

絶対君を見捨てない スクーパーズ来襲編 2 るな充120%

(アニメURAHARA同人小説)

注意

この同人小説は、春奈るなが主演声優を務め、2017年秋に公開されたアニメ「URAHARA」をもとに書かれています。設定や内容はかなり変更されていますが、この小説を読む場合は、アニメ「URAHARA」をご覧になってからの方が、声の感じが掴め、より会話を楽しむことができると思います。ですので、この小説は、アニメ「URAHARA」をご視聴されてからお読みになることをお勧めします。

なお、この小説はフィクションです。実在の人物や団体などとの関係はありません。

目次

(スクーパーズ来襲編 第2巻)	
第4章 ラフォーレ陥落	
第5章 明治通り防衛線	
第6章 捕虜	
(スクーパーズ来襲編 第3巻以降の予定)	
第7章 ラフォーレ奪還作戦	
第8章 決戦	
第9章 黒いスクーパーズ	
第10章 ラフォーレの決闘	
第11章 PARK動乱	
第12章 原宿の結婚式	

第4章 ラフォーレ陥落

日本国の国家安全保障委員会は全省庁からの代表を呼び、さらに拡大して開催されていた。上杉内閣調査室長から状況の説明が行われていた。

「原宿の状況を説明します。宇宙戦艦、宇宙駆逐艦と推定される宇宙船を盾にして、スクーパーズの部隊が原宿の明治通りの裏手、通称「裏原」に向けてゆっくり近づいていきました。そのとき、裏原にあるオタク系のショップPARK、はい、須藤、白子、綿紬がバイトをしている店です。PARKの建物の屋上から射撃があり、弾またはビームは宇宙駆逐艦の装甲を貫通し、宇宙戦艦も装甲に被害を受けたようで、煙幕を出しながら後退していきました。その後、原宿が白い膜状の物で覆われてしまいました。戦艦の艦首についている砲で2回ほど攻撃しましたが、覆いが跳ね返したようです。跳弾、跳ね返された弾ですが、2発は宇宙空間に抜けて行ったと思われる。何しろ弾が高速のため、弾自体を観測することはできませんでしたが、空気を電離させながら進んで行きますので、その跡を観測した結果です。1発は太平洋の海面に当たり、角度が浅かったため跳ね返って宇宙空間に抜けていったようです。エネルギーが全部海に吸収されると大津波が心配されたところですが、ほとんどのエネルギーはそのまま弾に残ったため、1メートル以下の津波で済んだようです。警報を出しましたが、スクーパーズのための避難中で、海岸周辺には人がいなかったため、被害はありません。残りの2発は発射した戦艦に当たったようです。そのため戦艦にかなりの被害が出ているようです。」

「そうですか。かなり本格的な戦闘になってきたようです。それで地上での被害はどうでしたか。」

「住民は避難していましたが、自衛隊員も戦艦の原宿への接近時に退避していましたので、人的な被害はありません。しかし、戦艦の破片で原宿近くの多数の建物が崩れるなどしているようです。残念ながら、スクーパーズを刺激しないため人やドローンでの接近も避けているため正確なことは分からない状況です。」

「人的な被害はなかったのですね。まずは良かったです。スクーパーズがやられて、喜んでばかりいる場合でもありません。宇宙戦艦が爆発した時の被害が心配です。どのくらいの被害が推定できますか。核爆弾程度なのか。それより、大きいのか。」

「文科省と経産省の合同委員会の委員長候補の石橋教授が検討しています。恒星間飛行に必要なエネルギーは地球には理論さえ存在しないため、戦艦の動力炉、エンジンが発生できるエネルギーの計算は難しい状況です。ただ、今回使用した砲は戦艦が発生できるかなりのエネルギーを使っていると思われます。弾が空気を電離した量から、そのエネルギーを見積もり、戦艦が爆発したときのエネルギーをその100倍程度と見積もると、5かける10の18乗Joule程度でないかと推測しています。わかりやすくいいますと、1メガトン水爆1200発程度です。」

「そうですか。日本を破壊するには十分なエネルギーですね。」

「ただ、石橋委員長の意見では、この爆発がスクーパーパズ之星で起きても大変なことになるので、動力炉には緊急にシャットダウン・閉鎖ができる装置が付いているのではないかと推測しています。そのため、爆発はしないだろうとのことですよ。」

「そうだと良いですね。現在の状況はどうですか。」

「戦艦、駆逐艦は渋谷まで下がっています。スクーパーパズは原宿駅周辺に集結しているようです。」

「戦艦が下がったことは嬉しいです。防衛大臣、スクーパーパズの動きに関して何か見解はありますか。」

「はい、移動できる盾のようなものを準備していますので、原宿駅竹下口の近くから竹下通りに突入するのではないかと推測しています。この件もあまり近づくとできないため、正確なことはよくわからない状況です。」

「そうですか。引き続き観測を続けて下さい。」

「総理！」

「何でしょうか、経産大臣。」

「東京電力から、覆いできたときに原宿の大部分の配電系統が切れたのですが、原宿口からのものが生きているとの連絡がありました。需要が少ないため、それで原宿に配電中とのことですよ。」

「どういうことでしょうか。」

「竹下口あたりで覆いに穴があいているのではないかと考えられます。」

「なるほど。スクーパーパズがあけたのでしょうか、それとも初めから開いていたのでしょうか。」

「それは初めから開いていたと考えられます。そうでなければ、電気は切れているはずですよ。」

「なるほど。それでは、なぜ竹下口だけ覆いに穴をあけたのでしょうか。PARKのお客さんが入れるようにでしょうか。」

笑いが起きる。

「現状では理由はわかりません。」

「冗談はさておき、できるだけ情報収集をお願いします。まだ中に人がいますので、電気などは切らさないようにしてください。」

「わかりました。電力会社に伝えます。」

「ほかのライフラインはどうですか。」

「ガスはスクーパーパズの飛来と共に止めてあります。爆発の危険がありますから。インターネットの光ファイバーは経路が違うため、切れてしまっているそうです。」

「ありがとうございます。ネットがあれば、中の様子がわかるかもしれませんが、残念です。」

「総理！」

「なんでしょうか。外務大臣。」

「アメリカをはじめとして、諸外国から説明を求める要請が届いています。防衛大臣も続けて発言する。」

「防衛省にも、在日米軍から原宿で何が起きているのか説明を求めてきています。向こうでも、独自に観測を行っているようです。」

「そうですね。中の人間について情報を開示するのはやめておきましょう。エビフライ星人と名乗る宇宙人とスクーパーズが戦っているが、こちらも状況が良くわからない。とだけ伝えて下さい。ただ、アメリカから丸野みさに関して問い合わせがあったら、一度、避難所に避難したがその後原宿に戻ったのではないかとだけ伝えて下さい。」

「承知しました。」

「家族からの問い合わせとかはないのですか。」

「はい、原宿から一度避難した時に連絡したようで、今のところはありません。長引けば連絡があると思います。」

「わかりました。問い合わせがあった場合は、六本木に避難して登録したが、その後どこか行ってしまったとだけ伝えて下さい。連絡が取れずに心配はするでしょうが、現状では、エビフライ星人といっしょにスクーパーズと戦っていると連絡するのは避けましょう。」

竹下口の近くで見張っていたりとのところに、まりとことが到着した。スクーパーズは穴からかなり離れたところに集まってきたようだった。りとまりが周囲を警戒する中、ことが囲いの穴の調査を開始した。

「このあたりが、中性子の結晶構造の特異点になっていて、囲いが安定に存在できないみたい。」
りとが、尋ねる。

「そっか、そうすると穴を埋めるのは無理か。それじゃあ、中にもう一つ囲いを作ることはいかない？穴はできれば反対側にして。」

「うーん、囲いどうしの相互作用で、両方の囲いが壊れちゃうかもしれない。」

「確かにそう。じゃあ、ここを死守するしかないわけか。」
まりが言う。

「招かれざるお客さんだから、しょうがないわね。」

「ここで守るにしても、数が多いから押されるかな。」

「招きたいお客さんならばいいのね。イケメンか、可愛い子。あとは、お金をいっぱい持って
どんな商品を買ってくれるお客さん。」

「まりらしい。」

「店を経営するのは大変なのよ。」

「そうだね。PARKをいつもありがとう。」
ことが作戦を考える。

「押し込まれることを考えるとPARKは少し遠いので、あたりを見渡せるラフォーレ原宿に前進防衛拠点を作るね。休む場所も必要だし。その次に明治通りに防衛線を作るよ。見通しがいいから、明治通りを簡単に渡れないようにする。やっぱり、PARKが最終防衛拠点かな。最大限に強化するつもり。」

「わかった。ここはそれが向いていると思う。ここは、まりと二人で守る。」
りとはまりの方を向く。

「ここが防衛ラインを作るまでは、二人で守るよ。」

「わかってるって。それにしても、こんな積極的なりとは初めて見た。」

「そう？原宿を守りたいからかな。」

「そうね。私も原宿を守りたいわ。私を認めてくれる街なんて原宿しかない。No Harajuku No Lifeだわ。」

「ここが自分の得意なもう一つの街を提案する。」

「アキバでも大丈夫だと思うよ。」

「ホント？今度、行ってみようかしら、秋葉原。」
りとはまりが提案する。

「じゃあ、スクーパーズが去ったら、3人でアキバに遊びに行こう。」

「あら、さゆみんと、みさちゃんは置いてきぼり。」

「うーん、さゆみんは可愛いというより美人だし、アキバという感じじゃないけど。でも、5人でアキバ。」

「了解だわ。ここ、そのときは案内をお願いね。」

「ラジャー。」

そのとき、また大きな音がした。まりが、やめて欲しそうに言う。

「しつこいわね。スクーパーズがまた何かやっているのかしら。」
りとはまりが答える。

「なんか、内側から音がしたようだけど。」
りとはまりが答える。

「よくわからないけれど、今度はビームみたい。エネルギーは最初の攻撃より小さいかな。」
まりが言う。

「それはよかった。まだ攻撃はなさそうだから、りとは休んでいて。交代で番をしましょう。」
「大丈夫。私もいるよ。」

「長くなりそうだから、休めるときには休んで。スクーパーズが来たらすぐに呼ぶから。」
りとはまりが言う。

「穴の近くならば、外でも様子がわかるから大丈夫。りとは休んでいて。」
「わかった。1時間交代？」

まりが答える。

「それでは休めないと思う。4時間ぐらいは必要だわ。その代わり本当に休んでいて。」

「わかった。4時間後に来る。」

「了解。」

りととことこがラフォーレ原宿の最上階のホールに上がった。ことこがりとに言う。

「りとちゃんは休んでいて。ここに、様子がわかる指揮所を作るから。」

「ことこ、ありがとう。わかった。」

そう言っ、りとはタイマーをセットしてソファアに横になった。また時間も早いので寝ることはできなかった。この先2人をどうするか思いをめぐらせていた。ことこは、センサーの情報を統合できる指揮所を作成していた。

指揮所が完成して少しして、センサーが反応した。ことこが言う。

「何かラフォーレ原宿に近づいてくる。大小2体。」

りとが立ち上がって言う。

「何？スクーパーズがどこから入って来たの。」

「歩くぐらいの速さだけど、いま、見てみる。」

ことこが、接近するものを画像で確認する。

「なんだ、さゆみんと三毛だー。」

「なんだーって。なんでさゆみんがいるの。」

「うーん、わかんない。今、エレベーターで上がって来るみたい。」

「分かった。私、迎えに行ってくる。」

最上階のエレベータの扉が開いた瞬間、りとがさゆみに尋ねる。

「さゆみん、何で原宿に来ちゃったの。」

さゆみんが驚きながら答える。

「急に出てくるから驚いちゃった。それより、それはこっちのセリフ。おばあちゃんを確認しに来たの？」

「そう、そうしたら、スクーパーズが来ちゃって、PARKに逃げ込んだの。」

「私は、みんなを探しに原宿の境界まで行ったら、三毛が突然走り出して、猫カフェに戻っちゃったの。それより、スクーパーズと戦っていたようだけど、その武器はみさちゃんか、エビふりゃーさんにもらったの。」

「みさちゃんのわけはないけれど。エビふりゃーにもらったことになるのかな。考えると何でも作れるものももらったの。それを使って作ったの。」

「えっ、それって伝説のアマツマラ？何でそんな大切なものをりとちゃんたちに・・・」

「さゆみん、アマツマラを知っているの。」

「あつ、さつきエビふりヤーさんが言ったの。すごく大切なものだって。」
「そうなんだ。そうだよね。考えれば何でも作れちゃうんだものね。」
さゆみんはエビふりヤーがアマツマラをりとたちに渡した理由を考えたが、わからなかったの
で、とりあえず来た目的を告げることにした。
「お腹がすいているんじゃないかと思って、クレープを持ってきたのよ。」
「ほんと、ありがとう。さゆみんのクレープ美味しいから嬉しい。」
「ただ、今回は味の保証はできないわ。」
「どうして。」
「うーん、お米が入っているし。」
「えっ、もう作ったんだ、カレーライスクレープ。」
「そう。」
「食事にはびったりかも。ことこといっしょに食べよう。」
「まりちゃんは？」
「囲いに穴が開いていて、そこを見張っている。私と交代で見張ることになっているの。」
「原宿の囲いは、りとちゃんたちが作ったの。」
「そう、ことが考えた設計図で。」
「そうなんだ。」
ことがいる部屋に到着して、さゆみんがことことに話かける。
「ことこちゃん、大丈夫。」
「あつ、さゆみん。うん、みんなの原宿を守らなくちゃ。」
「この設備は、ことこちゃんが作ったの？」
「そう。この設備の設営は大体終わって、これから明治通りに防衛線を作るところ。」
「本当は、逃げて欲しいところだけど。とりあえず、カレーライスクレープを食べてみて。」
「りとちゃんが言っていたやつ？」
「そうよ。」
「有難う、さゆみん。本当はお腹がすいていたんだ。コンビニでお金を置いて、食べ物を持って
こようかと思っていたところ。」
「どういたしました。じゃあ、頂きますをしましょう。」
3人そろって、頂きますをする。
「頂きます。」
「ことがお礼を言う。」
「美味しいよ。有難う、さゆみん。」
「どういたしました。りとちゃんのアイデアだけど。」
りとも同意する。

「本当、美味しい。私が作ったから、こんなに美味しくならない。ありがとう、さゆみん。」

「どういたしまして。まだまだカレーに改良の余地がありそう。」

「さすが、さゆみん。それが美味しさの秘訣か。ところで、さゆみんは、どこにいるの。」

「Angelyyにいるの。三毛がそこに行こうとしちゃうの。でも、ここにはおとなしく付いてきたけど。りとちゃんたちに会いたいのかもしれない。」

「本当、三毛。会いに来てくれたの。嬉しい。」

そう言っつりとは三毛の頭をなでた。三毛はりとをじっと見ていた。

さゆみんが二人に告げた。

「じゃあ、私、まりちゃんのところへクレープと飲み物を持っていくね。」

りとが止める。

「危ないから、私が持っていく。」

「大丈夫だつて。スクーパーズが来たら逃げるから。」

「でも。」

ことが、緊急ボタンを渡す。

「さゆみん、なんかあったら、これを押して。そしたら何とかするから。」

りとはことに感心して言う。

「ここ、ありがとう。さゆみん、お願い。ことこのこれ持っつて。何かあったら、絶対助けに行くね。」

「ありがとう。りとちゃん、ことこちゃん。でも、これ、何か自爆スイッチみたいだけど。」

ことが弁解する。

「ごめん、さゆみん。押しやすそうということでこんなデザインにしたけど、ちょっと待っつて、デザインを変更する。」

そう言っつて、ネックレスのアマツマラを使っつて、デザインを変更した。さゆみんが、少し驚いて言う。

「これがアマツマラの力なんだ。」

「うん。りとちゃんのはプレスレットになっつてるの。まりちゃんのは指輪。想像したものが、現実になっちゃう。」

「どんなものでも、できるのかな。」

「これから調べてみるけど、説明書もないから、まだよくわかんない。創造力や精神力が大切みたい。」

「そうなの。3人にびっつたりと言えびっつたりの道具ね。でも、原宿を守るのが無理と思っつたら、アマツマラで逃げる道具を作っつて3人で逃げてね。私たちのことは置いて行っつていいから。」りとが言う。

「さゆみんやみさちゃんを置いては行けないよ。」

さゆみんは困ったが、今は無理を言わないことにした。

「わかった。有難う。そのときはボタンを押すので、いっしょに逃げようね。」

「はい。どこまでも、お供します。」

「りとちゃん、騎士様みたい。」

「ゲームでは、剣士や騎士の役が多いんだ。」

「私には騎士様がいるんだけど、さすがにスクーパーズ相手では敵わないかな。普通の人間だから。」

「あっ、そうかい。これは失礼。では、専属騎士様のところまで、お姫様をお連れ致します。かな。」

「有難う。じゃあ、りとちゃん、ことこちゃん、まりちゃんのところに行ってくるね。」

「いってらっしゃい。でも、本当に気を付けて。」

原宿駅の竹下口の穴で見張っている、まりは一人になって、原宿に来るようになったときのことを思い出していた。まりは小さいときから背が大きく整った容姿をしていた。親が着せる服もとても可愛く、ダンスを習っていたため、小学校の中では目立つ存在ではあったが、クラスの中では少し浮いていた。また、ファッションに興味は持っていたが、原宿に来るようになったのは中学2年生のころで、ファッション雑誌のバーゲンの広告を見たことがきっかけである。

「初めて、原宿に来たとき、山手線に乗って、ここから来たんだっけ。バーゲンの広告を見て。」

「雑誌で見たことはあったけど、実物はやっぱり違った。新鮮だったわ。」

「中学生の時は、欲しいものはあったけど、バーゲンでもお金がなくて、あまり買えなかったな。」

大きくなったら、もっと買おうって思ってた。」

「スカウトされたのは、明治通りだっけ。モデルになって、ラフォーレのランウェイを歩いたな。右も左もわからなかったから、デザイナーのお姉さんの言われるままにしてたっけ。私も、ファッションデザイナーになりたいって真剣に思ったり。でも、素敵なダンスを見ると、ダンサーになりたいと思ったり。私って、ホントだめね。やりたいことはいっぱいあるけれど、絞ることができなくて。」

「原宿に週2で行くようになって、PARKのバイト募集を見て、応募して、いい加減な店長で、簡単な面接でバイトが決まって。でも、いろいろ自由にできた。」

「いろんな、クリエーターさんと知り合って、デザインばかりでなく、大人になってからの生活なんかも教わった。まあ、世の中の人からするとまともな生活ではないようだけれど、私も将来こんな生活をするのかなって思っていた。」

「学校が終わったら、原宿に入り浸るようになって。逆に、学校のことはあまり覚えていないな。原宿が、PARKが、学校だったかな。」

「店長は土日が休めるようになったし、春夏秋冬の休みには長期旅行ができるようになって、大喜

びだった。そして、りとと知り合っただけ。

そんなとき、りとから連絡が入った。

「あっ、りと！」

「まり、驚かせた。」

「ううん。大丈夫。」

「さゆみんが、クレープを持って、いまからそっちに行く。」

「さゆみんが、原宿に来ちゃったの。」

「そうみたい。私たちを探しに避難の境界線まで来てたら、三毛がAngelyyの方に走り出しちゃったんだって。」

「そうなんだ。それは大変なことになったわね。何とかさゆみを逃がさなきゃ。」

「でも、さゆみんは一緒にいるって。ご飯を持ってきてくれるって。」

「うーん、さゆみんも責任感がある人だから、私たちだけ置いていくことはできないか。」

「まりの言う通りかもしれない。」

「Angelyyに強化した部屋を作って、そこに退避してもらうことを考えようか。交代したら、ことごと相談してみる。」

「うん、お願い。さゆみんの安全も考えないと。」

「あっ、さゆみんが来たみたい。詳しくは後で。」

「了解。」

さゆみんがやって来た。

「まりちゃん、こんばんは。」

「さゆみん、こんばんは。原宿に残っちゃったんですね。」

「そういうことになっちゃったわね。新作クレープを持ってきた。りとちゃん考案のカレーライスクレープ。」

「カレーライスクレープ！早速、作ったんですね。さすがというしかないです。」

「ありがとう。でも結構いけるわ。食べてみて。」

そう言って、まりにカレーライスクレープを渡す。

「うん、なかなかいけるわ。カレーライスクレープ。こういう時には、ぴったりかもしれない。あははは。」

「そうね。さすがは、りとちゃんだわ。でも、まりちゃん、一人で大丈夫？さびしくない？」

「大丈夫です。学校とかで一人は慣れていますし。今は原宿に来た時のことを思い出しています。バーゲンの広告につられて、山手線で行ってきた。その交差点を渡って。」

「そうなんだ。それから、ずうっと原宿に。」

「そうです。時間があるときは、ずうっと原宿にきていました。ファッションにダンスに。さゆみんは、どうして原宿に。」

「うーん。私ね、両親が事故で死んじゃったの。それで田舎から出てきて、初めて来たところが原宿。そこで生活が始まったの。」

「ごめんなさい。いやなこと聞いちゃって。」

「もう大丈夫。だいぶ経ったから。」

「りとはご両親が亡くなられたことを知っていますか。」

「知らないかもしれない。言っていないし。変に心配をかけたくないし。」

「そうですか。今は原宿が生活の場って感じですか。」

「住んでいるところは、小田急線沿いだけど、寝る時以外はほとんど原宿。原宿以外だと、秋葉原かな。秋葉原にもAngelyyのお店があって、人手が足りないと手伝いに行くときがあるの。」

「秋葉原！秋葉原にクレープ屋さんがあるんですか。」

「ちよっと言いたくないんだけど、メイドカフェ。」

「えっ、メイドさんをやるんですか。」

「まあ、そう。人手が足りないときに。」

「是非、今度行ってみたいです。さゆみんのメイド姿見てみたい。きっと、端正なメイドさんが見れると思います。」

「えー、やめて、さすがにまりちゃんに見られるのは恥ずかしい。衣装はクレープ屋のとあまり変わらないから、見なくて大丈夫よ。」

「りとは、さゆみんは美人だから秋葉原は似合わないって言ってたけど。メイドカフェとは。」

「りとちゃん、私を買いかぶりすぎだから。私は逆にまりちゃんたちのメイド姿が見てみたいかな。きっと可愛いと思う。」

「りとのメイドは見ものだわ。」

「まりちゃん、ひどい。でも聞いてみたいかも。りとちゃんのお帰りなさいませ、ご主人様。」

「あはははは。でも、さゆみんも、お客さんにそういうことを言うんですか。」

「それがメイドカフェのいらっしやいませだから。まあ、慣れば何ともないけど。」

「よし、今度りとをだまして、そこでバイトさせましょう。」

「そうね。二人で悪たくみ。」

「ふふふふふー。りと、覚悟。」

そう言いながら二人で声を出して笑った。まりが、さゆみんに尋ねた。

「でも、さゆみん、これからどうするんですか。」

「私はAngelyyにもどる。三毛もそこがいいみたい。また、ご飯作って持っていくから。」

「有難うございます。楽しみにしています。」

「じゃあ、また。」

「はい。また。」

さゆみんが帰っていった後、また一人になったまりは、警戒を続けた。ただ、さつきより心は温かった。時間が経って、りとがやってきた。

「まり、交代。」

「りと、有難う。でも覚悟しておきなさいよ。」

「何？」

「ふふふふ。さゆみんと二人で悪たくみを考えたから。」

「何？何か驚かすこと。」

「驚くかも知れないけど、ちよつと違うわよ。まあ、スクーパーズが去った後を楽しみにね。おほほほほ。」

「まり、なんか気持ち悪い。でも、わかった。スクーパーズが去った後を楽しみにしておく。」

「そうね、それまでにさゆみんと計画を練っておくわ。」

「まあ、さゆみんがいつしよなら大丈夫だろうし、まりが楽しそうだからいいことにしておく。それより早く休んで。スクーパーズが原宿をあきらめるのに、何日かかるか分からないから。」

「そうね。そうする。じゃあ4時間後。」

そう言って、まりはラフォーレ原宿へ向かった。

(著者注…4人がメイドカフェでバイトをするのは、2作目の予定です。2作目では秋葉原でデストロイヤーズと戦います。メイドカフェでは、りとはドジっ子メイドぶりを発揮して、「ぶっきー」というあだ名がつく予定です。)

まりがラフォーレに帰る途中で、ここが明治通りに防衛線を構築するための作業をしているのが見えた。

「こここー。大丈夫。」

「うん。まかせて。監視装置の設置は終わって、いま、通信ネットワークを設置しているところ。まりちゃんは休んでいて。私も少ししたら休憩する。」

「わかった。ラフォーレのホールで休んでいるね。」

まりはラフォーレ最上階のホールに向かった。ホールに入ると、モデルとしてランウェイを歩いたことをまた思いだした。」

「ここにランウェイがあつて、歩いたのよね。お客さんに注目されて、フラッシュが焚かれて。そう言いながら、ホールの中央を歩いてみた。」

「原宿にいっぱい思い出があるのは、りとだけじゃない。失いたくない。そう、さゆみんも、なんだかんだ言いながらも三毛のことばかりでなく、同じ思いで原宿に残ったのかも。」

「でも、りとが突っ走るから、私も、原宿を守ることができるのかもしれない。」
あたりを見回して、まりは大声で叫んだ。

「絶対に、原宿をスクーパーズに渡さないぞ！」

そう叫んだら、すこし落ち着いた。そして、次の交代時間まで休むことにした。

「りとと交代するために休まなくちゃ。」

まりはソファーに横になった。

竹下口のりとも、手持ち無沙汰だった。囲いの穴から少し出て様子を見てみたりしたが、スクーパーズも遠くの方でこちらを観察するだけだった。スクーパーズが原宿に入ってくるのは、明日の朝のような気がして、少し緊張がほぐれた。りとも小学校に入る前、おばあちゃんといしょに原宿に来たときのことを思い出していた。

「もう、よく覚えていないけど、夜、お父さんとお母さんが喧嘩していると思ったら、朝起きたら誰れもいなくて。」

「食べるものが無くなって、すぐ、お腹がすいていたっけ。心細かった。あんなのは、もういや。私は絶対に誰かを見捨てたりはしない。」

「でも何日かしたら、おばあちゃんが迎えに来てくれたんだよね。お父さんのお母さんと言った。会ったことはなかったけれど、不思議に信じる事ができた。苗字も同じだったし。」

「最初におばあちゃんちに来たとき、竹下通を歩いたから、ここを通ったのかなー。」

「おばあちゃんちでは、いろいろやらされたっけ。おばあちゃんについていくしかなかったし、いやでもなかったな。宇宙一のプリンセスになれて、無茶言ってた。でも、絵を描くのも、初めはおばあちゃんに習ったんだっけ。筋がいいってほめてくれた。おばあちゃん、心配しているかな。それとも、スクーパーズに夢中で私のことなんか忘れてるかも。いや、もしかすると、『スクーパーズか、りとはちょうどいい訓練相手だ』なんて無茶言っているかもしれない。」

「絵に夢中で、おばあちゃんの言いつけに忙しくて、あんまり学校で思い出はないかな。たぶん、本当にまりが最初の友達かもしれない。」

「まりとは、PARKで出会ったんだよ。コンピュータで絵を描くための機材を買いたいときに、PARKのイラストが描かける人の求人を見て。店長、いつもの調子で簡単にOKして。そこで、まりと出会ったんだっけ。同じ高校生なのに、店長がいなときは一人で店を切り盛りして、すごいなと思っていたら、モデルでダンスも上手で。人間じゃないみたいって思った。けど、イラストをたくさん使ってくれて、あんなにいっぱい絵を褒めてくれて、嬉しかったな。人の上に立つ才能があるんだよね、まりには。」

「そう言えば、おばあちゃん、まりの名前も知っていたんだ。モデルやダンスをやっていて、原宿では有名だったのかな。でも、こともみさちゃんも知ってたし。えー、もしかすると、知ってるふりをしているだけかな。まあ、いいや。」

そんなことを考えるうちに時間が経っていった。そして、まりと4時間ごとに交代しながら、夜が更け、朝が近づいて行った。朝7時ごろ、まりが見張っているときに、外で動きがあった。まりがラフォーレにいたりことを呼び出す。こともりとの傍らで寝ていた。2人は飛び起きた。ここが観測装置で囲いのまわりを調べていた。約千体のスクーパーズが4つのグループ

に分かれて、囲いから少し離れたところに集結していた。そして、移動できる盾のようなものが、囲いの穴に向かって少しずつ進んできた。りとも、それを見ながら言った。

「この車の付いた盾でこちらの攻撃を防ぐつもりね。まりのリア銃ならば吹き飛ばせそうだけど。」

「相手も、ビーム攪乱幕を使うと思うよ。」

「そうね。ことこの言う通り。でも、あっちのビームも効かなくなる。」

「そのはずだよ。」

「接近戦になるけど、スクーパーズの数が多いのが問題。」

「そうだね。」

ことは、りと少し違和感を覚えた。

「でも、何かりとちゃんじゃないみたい。」

「どこが？」

「なんか、戦いにやる気満々で。」

「うん、その通りかも。今までは絵以外に興味なかったし。でも、今は原宿を守りたい。本当に守りたい。」

「そうか、そうだよ。私も、明治通りの防衛線を急いで作らなくっちゃ。」

「ことこも、やる気満々。」

「私の場合は、りとちゃんとまりちゃんが頑張っていると、やらなくてはいけないって感じかな。でも、がんばろう。」

「がんばろう。じゃあ、まりのところに行ってくるね。」

「いつてらっしやい。」

りとはまりのところへ飛んで行った。その途中、竹下通りの中間点付近にあるセブンイレブンで、パンと牛乳を買った。商品は自由に持って行っていいとの張り紙がしてあったが、一応お金を置いてきた。

「まり、どう？」

「うん、スクーパーズが集まってきている感じ。」

「ことこもそう言っていた。4つのグループに分かれて、もう少ししたら、攻撃が始まるかもって。」

「わかったわ。」

「今のうちに、パンと牛乳。食べておこう。」

「そうね。食べておかなくっちゃね。」

「ことこの情報は見た？」

「見た。盾を使ってくるみたいね。」

「あと、ビーム攪乱幕も。」

「どうする。」

「私が前に出て、まりは後ろから援護かな。」

「大丈夫？」

「こちらもビーム攪乱幕を使えば、相手はビームが使えないから、こちらの方が有利だと思う。」
「そうね。」

「ただ、数が多いから、次第に押されるとは思う。ここでは、こここの防衛線を作るための時間稼ぎが中心かな。そして、防衛線で相手の戦力をだんだん削いでいって、相手を撤退させる。」

「すごいね。りと、ちゃんと考えているのね。」

「何となくね。ここでは負けないことが重要。だからまり、勝とうとして無理をしないで。」

「わかった。というより、それはこっちのセリフ。りとこそ無理はしないでね。それにしても、パンと牛乳がこんなに美味しいなんて知らなかったわ。」

「うん。味わう余裕があるのは、さすが、まりね。」

「まあ、りとがいつしよなら。」

「私も。まりがいつしよなら。」

二人は少し笑った。そして、昨晚、二人とも昔のことを思い出していたことなどを話ながら、竹下口の傍にあるゲートの左右の柱に隠れて、近くの囲いの穴を見張っていた。

入り口の外では、第2中隊の隊員が集まっていた。中隊長が訓示をする。

「戦艦の旋回主砲射撃後、我々はこの囲いの中に突入する。敵の正体も配置もわからないまま、我々はみさ王女様の救出のために、少しずつでも確実に前進していかなくてはならない。敵の武器は我々を消し去り、戦艦の装甲を大きく損傷させる威力を持っている。また、戦術もアストロイヤーズとは異なるだろう。今回の作戦は、これまでで最も困難な作戦になると予想できる。それでも、第2中隊の名誉にかけて、王女様救出のために、皆には全力を尽くしてこの作戦を成功させてもらいたい。諸君らの奮闘に期待する。では、作戦終了後にまた会おう。」

訓示が終わると、全員持ち場に戻った。第111分隊は、遠くからその様子を見ていた。ザトムがガジメに言った。

「やつら、やつぱり我々で狩りを楽しむつもりなんじゃないですか。戦艦は入れない囲いはつくるのに、1か所だけ入れる穴をあけて。」

「俺もいやな予感がある。お前の言う通りかもしれない。それで、狩りを楽しみ終わったところで、王女様を開放する。」

「我々で狩りを楽しむなんて、なんて奴らなんだ。」

「さあな。我々が動物を狩るのと同じ感覚なのかもしれないな。」
ゼクルルが口を挟む。

「王女様が無事ならばいいじゃないですか。それならば、思う存分暴れられます。こちらも、逆

にやつらを狩ってやりましょう。」

「ゼクールは、積極的だな。」

「飛び込まなくちゃ、話にならないですからね。」

「そうだな。ゼクルの言う通りだ。今回、我々は予備戦力だが、中の様子が分からないだけに、作戦がうまく運ばず、我々がすぐに投入される可能性は十分ある。みんな準備だけは怠るなよ。」

「わかりました。」

スクーパーズの工作部隊が、原宿駅をスクープビームで消した。その後、戦艦が下りてきた。そして、橋頭保を確保する援護のため、穴の入り口付近に向けて、旋回主砲を発射した。

その少し前、入り口で見張っているりとまりに対して、急にことこから連絡が入った。

「りとちゃん、まりちゃん、穴から離れて。戦艦が明治神宮から近づいている。穴に向けて砲撃があるかもしれない。」

二人は急いで穴から離れ、SWEET BOX裏の小道に逃げ込んだ。まりはリア銃のエネルギーチャージを開始した。原宿駅が突然消え、そこにスクーパーズの戦艦がゆっくりと降りてきた。そして、穴に向けて旋回主砲のビームを立て続けに1発、2発、3発と発射した。ただ、あまり遠くまでは届かず、囲いの穴の周りを焼き払っただけだった。そして、煙が入ってきた。

囲いの外では、ガーチューンがダウザ艦長から連絡を受けていた。

「穴の入り口は焼き払った。穴が狭すぎるため、突入後の援護は難しい。」

「わかりました。入り口への射撃。有難うございます。これから、突入します。戦艦は渋谷まで下がって下さい。」

「わかった。艦内の医療体制を整える。傷病兵の運搬はこちらの隊員にも手伝わせる。」

「有難うございます。助かります。」

「では、武運を。」

「はい。」

ガーチューンが第2中隊に突入を指示する。それを受けて、第2中隊長が命令を発する。

「入り口にビーム攪乱幕を張れ。」

「第2中隊、第211分隊を先頭に突入する。あせるなよ。」

内側では、煙を見たまりがりとに話しかける。

「ビーム攪乱幕ね。りと、来るわよ。」

「うん。」

スクーパーズが台車に乗せた装甲板を盾にゆっくりと進んできた。スクーパーズ側では、囲いの外の入り口の近くにいる中隊長が、先頭を行っている第211分隊長に呼びかける。

「ビーム攪乱幕が薄くないか。これでは危ないぞ。」

「しかし、濃くすると前が見えなくなってしまう。」

「しかし。」

そのとき、SWEET BOX裏の小道にいたまりが、身を乗り出した。

「いくわよ。」

まりはそう叫んで、リア銃を発射した。ビームは装甲台車に命中した、ビーム攪乱幕がまだ薄かったため、装甲版を貫通して、台車ごと吹き飛ばした。ビームは中隊長をかすめて、明治神宮の山にぶつかった。被害が出ていることは明白だったが、中隊長は被害状況確認より先に指示をする。

「急いで、ビーム攪乱幕を濃くしろ。」

攪乱幕が濃くなったことを確認して、中隊長が前衛部隊に尋ねる。

「大丈夫か。」

第211分隊長から返事がなかった。そのかわりに、少し離れたところにいた第212分隊長が返事をした。

「隊員10体ほどが消えてしまいました。第211分隊長もそれに含まれます。3名ほどが重傷です。」

「わかった。重傷者を運び出せ。戦艦の医務室に連れて行く。」

悲しんでいるひまはなかった。中隊長は第212分隊長に最前線の指揮を引継ぎ、前進するように命じた。

SWEET BOX裏の小道でエネルギーの再充填が終わったまりが、再度リア銃を発射した。こんどは、ビームは拡散して装甲に命中した。スクーパーズの再前衛では、第212分隊長が被害の確認を命じる。

「ビームが当たった。被害は。」

「装甲板は大丈夫なようです。隊員にも被害はありません。」

「よし。それではこの濃さを維持しつつ前進だ。前が良く見えないが、仕方がない。我々は前進することが任務だ。」

一方、効果があつたかかなかつたか分からなかったため、りとが言う。

「今度は、私が行く。まりは、ここで煙から出てきたスクーパーズを撃退して。」

「わかったわ。りと、気を付けてね。」

りとは答える間もなく飛び出し、竹下口の方に高速で向かった。煙に入ると1mぐらいいしか視界がなかった。ただ、それはスクーパーズも同じであるため、りとの接近中に攻撃はなかった。

第212分隊長は、ゆつくりと前進している装甲台車の上を越えて、自分の2mぐらい横にいきなり人間が現れたことを見つけた。人間は、仲間の隊員に棒のようなもので切りつけていた。数体の隊員がすぐに消滅していった。まわりのスクーパーズがスクープビームを発射したが、よけられたり、棒やボードではじき返されて、攻撃の合間にスクーパーズが切りつけられていた。分隊長が命令を発する。

「下がるな。ここを死守するんだ。敵が防ぎにくいように同時射撃をする。俺と同時に撃て。」

第212分隊長が少し先で別のスクーパーズに切り付けていた人間に狙いを定めて命じる。

「撃て。」

そう言いながら、自分でもスクープビームを発射した。しかし、第212分隊長のビームは棒ではじかれ、その他のビームもボードで弾かれるか、かわされるかした。瞬間、人間が第212分隊長に突進し、切りかかった。第212分隊長は避ける間もなく、棒のようなものに突き刺され消滅した。ただ、人間も今回はここまでと思ったのか、撤退して行った。第212分隊の隊員が後を追った。第213分隊長が叫んだ。

「先頭の指揮は私がとる。第212分隊隊員、もどれ。攪乱幕の外は危険だ。」
だが、分隊長を殺された第212分隊隊員は戻ってこなかった。

煙の外にりとが出てきた。少しして、スクーパーズが9体ほど後を追ってきた。まりが、叫んだ。

「りと、代々木側によけて。」

りとは、左下ぎりぎりを高速で飛んだ。まりは、煙から出てきたスクーパーズに対して、散弾を発射した。9体のスクーパーズはすぐに消滅した。りとが、SWEET BOX裏の小道のまりのところに戻ってきた。

「ありがとう、まり。でも、状況は良くない。何体か倒しているけど、スクーパーズは進むのをやめない。」

「そう。どうする。」

「ちょっとしたら、また突入する。それで少しでも時間を稼ぐ。」

「爆弾でいっぺんにやっつけられたらいいのに。」

「普通の爆弾じゃ、やっつけられなそう。」

「そうだね。それでやっつけられたら、アメリカ軍は苦勞しないか。」

「うん。地道にやっっていくしかないみたい。」

「わかった。」

「煙の中は視界も効かない。電波もだめみたい。それは同じだからいいとして、あとは、音だけ。不意打ちをかけたから音が聞こえるとかえって邪魔。」

「音が聞こえなくて大丈夫なの。」

「うん、相手がこっちの接近を感じできない方がいいと思う。」

「じゃあ、ここに原宿のスピーカーから音楽を流してもらおうというのは。」

「できるかな。」

「連絡してみるわ。」

まりが、ことごとく通信をして音楽をリクエストする。その結果をりとに報告する。

「できるって。ちょっと待ってって。」

「良かった。で、曲は何を頼んだの？」

「春奈るなのベストアルバムLUNA JULEをエンドレスリピートで。」

「まり、ナイス選曲！」

ガーチューンも短時間のうちに第2中隊に30体近く、10%以上の犠牲が出たことから、これから増える損害を減らすべく方策を考えていたが、なかなか良い案は浮かばなかった。

「一部部隊を突入させると、ビーム攪乱幕から出ることになり、相手の散弾でやられることになる。この囲い内側全体をビーム攪乱幕を覆うことは散布装置の配備が不可能だ。できたとしても、内側では全く視界が効かなくなる。やっかいなことに、電波探査も効かない。そうすると、地の利がないだけ、各個撃破される可能性が高い。」

原宿に音楽がかかった。

「音による接近探知の妨害か。また攻撃してくると考えて間違いないな。しかし、王女様救出を諦めるわけにはいかない。」

ガーチューンは橋頭保は確保できたこと、慣れない戦闘で第2中隊は疲労してきているため、ここで第3中隊に一度交代した方が良く判断し、命令を出した。

「第2中隊は現地点に陣地を設営、そこにビーム攪乱幕などの補給物資を運び込め。第3中隊は第2中隊に代わって前進しろ。」

第2中隊は竹下口のゲートの少し内側で前進を停止し、陣地設営のための装甲板やビーム攪乱幕を運び始めた。囲いの外にいた第3中隊の中隊長が訓示をする。

「第2中隊が橋頭保を確保した。我々はそのから進撃する。前は見えなかったため敵は突然現れる。こちらのビームはほとんど効かない。それでも、王女様を救出するため前進しなくてはいけない。敵が現れた場合は、敵が対処しにくいように、そこでの上級隊員が号令をかけ同時攻撃を行え。逆に、敵が逃げたときには、深追いを避け装甲台車の外には出るな。そして、前進を少しづつでも着実に続ける。これ以外に我々が勝利する方法はない。皆の活躍に期待する。私が陣頭指揮を執る。行くぞ。」

中隊長の訓示が終わると、中隊長を先頭に、第3中隊が囲いの中に入っていくた。あたりは本当に1m先しか見えなかった。第2中隊の陣地まで到着して、第2中隊長に挨拶した。

「お疲れ様です。これから行ってきます。」

「お気を付けて下さい。敵はすばしっこいです。残念ながら、損害を出しつつ進むしかありません。」

「わかっています。少しでも前に進んできます。ビーム攪乱幕の供給をお願いします。」

「わかりました。絶対に切らさないようにします。」

「頼もしいお言葉、ありがとうございます。」

「陣頭指揮をされるのですか。」

「ええ、それが第3中隊の得意の戦術です。」

「わかりました。お気をつけて、次は私もお株を奪って陣頭で指揮をします。」

「王女様を救出したら、一杯やりましょうか。」

「そうですね。楽しみです。」

「私も。では。」

「では。」

第3中隊長が号令をかける。

「第3中隊、出発だ！」

第3中隊は、第2中隊が作った互い違いになっている装甲板で作られた防壁の隙間を縫って、装甲車を先頭に進撃を開始した。

りとは、煙がまた前進を開始したのを確認して、まりに言う。

「じゃあ、行ってくる。」

「気を付けて。相手も警戒している思う。」

「わかった。」

りとは、煙の中に突入していった。装甲板を越えて2体ほど倒したが、多方向からの同時攻撃が続けさまにきた。何とかかわしたが、それ以上の攻撃はできなかった。そのため、無理をせずに、すぐに引き返すことにした。スクーパーズは追ってはこなかった。煙が迫って来ているため、まりはアルタ後ろの路地りまで後退していた。まりのところにもどったりとは、状況を説明する。

「スクーパーズが組織的に攻撃してきて、近寄れない。」

「そう。どうする。」

「ルナ銃を使ってみる。」

「わかった。」

スクーパーズ側では被害を確認していた。第311分隊長が中隊長に報告する。

「2体ほど消えました。」

「そうか。」

そう言う他はなかった。

「前進するぞ。」

その号令のもとにスクーパーズが前進を開始した。そのときである。人間がまた現れた。中隊長が号令をかける。

「第312分隊、照準。」

しかし、射撃の指示をする前に攪乱幕の中に消えていった。

「何しに来たんだ。」

そう言った後、横にいる隊員が順番に消えていった。それに気付いた中隊長は飛び後ろに下がった。その瞬間、自分のいた地面にビームが当たった。上を見ると、細いホースがついたタンクのようなものが浮いていた。

「みんな、動け。今の位置から動くんだ。敵の誘導できる銃が攻撃している。」
上のタンクは、スクーパーズがいた位置を攻撃していく。

「くそー。さっきは、位置を確認していたのか。」

中隊長は装甲台車から飛び出し、人間を探した。タンクは小さくて動くためタンクを攻撃することが難しいと判断したためである。人間らしき影を発見して近づいたが、人間もスクーパーズの接近を感知して下がっていった。中隊長も装甲台車に戻り、隊員に指示した。

「敵は誘導できる銃を持っている。それで、第312分隊長をはじめとして9体やられた。常態上を警戒すること。タンクのようなものが見えたら、急いでみんなに知らせ、物陰に隠れること。」

そして、また前進を開始した。

りとがまりのところに戻ってきた。

「すこし、手ごたえはあったけれど、結果はよく分からない。」

「カメラを付けなければいいんじゃない。」

「遠い敵ならいいけれど、画像を見て操作していたら、近くの動く敵には間に合わない。おぼあちゃん、敵を感じろって言った。」

「ゲームで？」

「ゲームじゃない気もするけれど。良く覚えていない。」

「そう。でも、どうしよう。また前進を開始した。」

「今度は私がおとりになるから、まりのリア銃で攻撃しよう。」

「どうやって。」

「私が切り込む。その間に装甲板に近づいて。私がまりのところへ行ったらリア銃を撃って。」

「わかった。」

「じゃあ、いっしょに行くよ。」

「了解。」

そうやって、りともまりが煙の中に入って行った。りとは、装甲板の少し手前でまりを止めた。そして、自分は装甲板の中に飛び込んだ。まりはエネルギーを充填しながら、ゆっくりと装甲板の方に進んだ。

また、人間が現れたことを確認した中隊長は上を見た。タンクは見えなかった。人間の方を見ると、人間は隊員に切りかかっていた。

「今度はまた白兵戦か。第313分隊、照準。撃て。」
同時に数発のスクーパーズがりとに向けて発射された。りとは、ボードでビームを弾きながら前進してきた。

「第321分隊、照準。撃て。」

今度は、りとはスピードを上げて中隊長の方に向かい、第311分隊のビームをかわした。りとはそのまま中隊長に切りかかったが、中隊長も急いで後方に下り、棒のようなものによる攻撃をかわした。りとは深追いせずにそのまま煙の中に消えて行った。その直後、強力なビームが装甲版を貫いていった。第31小隊のすぐ後方にいた第32小隊の隊員に大きな被害が出て、20体ほどの隊員が消滅した。

「第313分隊、装甲台車の前を捜索しろ。大きな銃を持った人間がいるはずだ。被害状況は？」
第31小隊の小隊長が答える。

「第31小隊で4体が消滅しました。直後の第32小隊の被害が大きく13体、また第33小隊でも3体が消滅しました。重傷者も10体ほど出ました。」

「分かった、第31、32小隊は後ろに下がれ。第34、35小隊を呼び出せ。」

「わかりました。」

そのとき、装甲台車の前に探しに行った第313分隊の隊員2名が帰ってきた。

「報告します。大きな銃を持った人間はいませんでした。棒のようなものを持った人間が残っていました。」

「他の隊員はどうした。」

「棒のようなものを持った人間に、人間に、殺されました。」

「そうか、すまない。私の指示が不十分だった。棒のようなものを持った人間、長いな、棒人間には不用意に近づくな。距離を取って、複数の隊員でスクープビームによる同時攻撃をかける。」

「わかりました。棒人間には、少し離れたところから同時攻撃をかけるようにします。」

「だが今はいい。第31、32小隊には後退を命じた。後ろに下がって少し休め。」

「わかりました。」

中隊長がつぶやく。

「30メートル進むのに30体かの犠牲か。」

アルタの陰で、まりがりとが相談する。

「次はどうする。」

「戦っている最中、ホースが地面を這っているのを見たの。たぶん、ビーム攪乱幕を供給するホースだと思う。それを回り込んで切ってくる。そしたら、リア銃で撃って。」

「どこから行くの。」

「さっき居たSWEET BOX裏の小道から突入する。合図をしたら、装甲版より高い位置にリア銃を何発か撃って。その熱で攪乱幕が晴れると思うから。その後は任せる。」

「わかったわ。」

「じゃあ、行ってくる。」

りとは、アルタの裏を通り、マンションを越えたところで右に曲がり、SWEET BOX裏の小道に出て、竹下通りのスクーパーズに切りかかった。2体を消滅させたところで、他のスク

ーパーズは突然現れた人間に驚いて逃げてしまった。そこで、地面を這っていたパイプを切断し、竹下口から伸びているパイプを竹下口の方に向けて蹴った。そして、SWEET BOX裏の小道に戻りながら、まりに連絡した。

「まり、うまくいった。あとはお願い。」

「わかったわ。」

りとに言われた通りリア銃を発射した。エネルギーチャージ後にまた1発。そうすると、リア銃のエネルギーの熱で上昇気流が生じて、ビーム攪乱幕が上昇して少しずつ晴れていった。そして、再チャージ後に、今度は装甲板に向けて、リア銃を発射していった。

装甲板を打ち抜かれ、多数のスクーパーパーズが消滅した最前線の部隊は大混乱に陥った。中隊長が叫ぶ。

「どうした。ビーム攪乱幕の供給が止まってるぞ。」

「はい、途中に人間が現れて、パイプを切断したようです。」

「側面を突かれたか。戦線の維持は不可能だ。第2中隊の陣地まで後退する。後方の部隊に、少しでも攪乱幕を前方に投射するように伝えてくれ。」

「わかりました。」

「撤退開始。」

最前線の部隊が撤退を開始した。そうすると、今度は散弾が飛んできて多数のスクーパーパーズが消滅していった。第34小隊長が叫ぶ。

「第34小隊、中隊長をお守りしろ。」

第34小隊隊員は、中隊長の後ろについて盾になった。次々と隊員が消滅していった。

りとは、SWEET BOX裏の小道から戦況を見ていた。すると、多数のスクーパーパーズに後ろを守られながら、後退するスクーパーパーズが見えた。

「あれが、リーダーね。」

そのスクーパーパーズに狙いをつけて、ルナ銃を発射し、そのスクーパーパーズの消滅を確認した。

「一度、まりのところへ戻ろう。」

りとはそう言って、さっき来た道を逆に通って、まりのところへ戻っていった。

第2中隊の陣地まで撤退した第3中隊の隊員が点呼を開始した。半数以上のスクーパーパーズが消滅し、20体が重傷だった。第2中隊の中隊長は第3中隊の中隊長の訃報を聞いて、

「わかった。」

とだけつぶやいた。その後、第2中隊隊員に、第3中隊重傷者を戦艦の医務室まで運ぶことを命じた。

まりのところに戻ったりとは、まりに言う。

「とりあえず、押し戻せた。」

「これで、撤退してくれるかな。」

「残念だけど、また来ると思う。」

「そうよね。それにしてもしつこいわね。」

「文明・文化を奪う以外にも何か目的があるのかもしれない。」

「何だろうね。」

りとは、みさに関係することだろうとは思ったが、

「今は、わからない。」

とだけ答えた。

ガーチューンは、損害の大きさに驚いていたが、王女様救出のために、ひるむわけにはいかなかった。再び攻撃するために部隊の再編を命じた。

「第3中隊は下がって、上方の警戒に当たれ。中隊の指揮は第31小隊の小隊長が執れ。第4中隊が第3中隊と代わって、第2中隊と超越交代で進撃する。第111分隊以外の第1中隊は、先頭から入り口までの経路守備の強化に当たる。側面に対しても装甲板を設置する。可能ならば、2重に設置するように。また、前線にパイプが切られてもある程度の時間ビーム攪乱幕を散布できるタンクを設置する。そして、主装甲台車の前に1体用の装甲台車を配置して、2体で監視を行え。」

アルドアに向かって聞く。

「タンクと1体用の台車数台の準備にどれくらいかかるか。」

「1時間ほど下さい。」

「わかった。その後も装甲台車の製作をたのむ。多ければ多いほどいい。」

そして、全員に命じる。

「1時間後に攻撃を再開する。それまで持ち場を維持しつつ、交代で食事や休憩するように。敵はいつ、どこからくるか分からない。地の利は向こうにある。警戒だけは怠るな。」

また、ガジメに言う。

「第111分隊には、また重要な役割を担ってもらいかもしれない。それまで、休んでいるように。」

「わかりました。」

ガジメが隊員にその旨を伝えた。

「第111分隊は連隊長から指示があるまで休憩だ。第3中隊は隊員の半分以上を失った。残念ながら、第3中隊の中隊長も含まれる。敵は、現在2体とのことだ。ビーム攪乱幕は有効であるが、大きな銃に至近距離から撃たれると、装甲版を貫通して広い範囲に被害を及ぼす。1体がその銃を持っている。もう1体は、棒のようなもので、こちらに切りかかるか、細いホースの先のタンクでビームを撃って来る。この人間は、動きがかなり素早く補足が難しいという情報だ。」

ゼクールは早く囲いの中に入りたかった。そして、素早い人間を抑えに行きたかった。

「素早い人間はあいつだろうな。第111分隊で囲んでも突破された。多分、第111分隊が行かないと無理なんじゃないかな。」

りととまりは、スクーパーズがいったん退却したため、アルタの陰で休んでいた。りとが、セブイレブンに飲み物と食べ物を買に行こうとしたとき、さゆみんがやって来た。

「りとちゃん、どう？大丈夫？」

「さゆみん、ここに来ちゃダメ。危ないよ。」

「お腹がすいているかなと思って、クレープを持ってきたの。」

「それは、有難いけど。やっぱり、危ない。」

まりも同意する。

「さゆみん、やっぱり危ないと思う。」

「ごめんなさい。でも、今はクレープを食べて。」

「今度は、どんなクレープなんですか。」

「りとちゃんに負けない発想でクレープを作ろうと思って。」

「へー、どんなんです。」

「食べてみて。へへへへへへ」

さゆみんは、りととまりにクレープを渡す。2人がクレープを食べだす。りとが驚いて言う。

「ラーメン!？」

まりも尋ねる。

「ラーメンクレープ!？」

さゆみんが答える。

「そう。汁なしラーメンを作って入れてみたの。時間がないので、チャーシューは買って来たものだけ。どう。」

りととまりが答える。

「美味しい。昼にはびったり。」

「美味しいですけれど、りとに影響されすぎじゃないですか。」

水筒の中華スープを取り出しながら、答える。

「そうかもね。独創力を磨かなくちゃと思って。あっ、スープも作ってきたので、飲んで。」

「美味しい。ありがとう、さゆみん。」

「美味しいです。有難うございます。本当に、彼氏さんが羨ましいです。」

りとがそれを聞いて心配する。

「そうか、そうだよね。だから、さゆみんは危ないことをしちゃダメ。昼ご飯は嬉しかったけど。」

さゆみんが答える。

「ありがとう。でも、大丈夫。彼も大事だけど、りとちゃんとまりちゃんも大切。私のことは心配しないで。もう大人だから。自分のことは、自分で考える。」

「でも。」

「大丈夫。」

そのとき、まりが驚いて叫ぶ。

「これ！」

りどが尋ねる。

「何、何かあった？大丈夫？」

「これ、なると。なるとが入っている。」

さゆみんがまりに答える。

「ラーメンだからなるとは入っているわ。」

「そうですけど。」

「次は、何を作ろうかな。中華なら、ラーメンの次は餃子かな。」

「でも、餃子にも皮がありますよ。」

「そうね。餃子はクレープと相性が悪そうね。」

「そうですね。」

3人で笑い合ったとき、スクーパーズが進撃を再開した。様子を見ていたりと言う。

「スクーパーズがまた来る。さゆみん、お店に帰ってて。」

「私は大丈夫だけど。でも、邪魔そうだから、店に戻るね。」

「邪魔じゃない。邪魔じゃないけど。やっぱり。」

「夕ご飯はクレープじゃないものを作ってくるね。じゃあ、また、夕方。」

「・・・。うん。じゃあ、また。」

りどは力なく答えた。さゆみんが店の方に帰っていった。まりがりとを慰める。

「さゆみん、優しいけれど、頑固なところは頑固そうだから。」

「うん、そう。昔からそうかもしれない。」

「上品で本当に高貴なお方って感じ。」

「そうかもね。さゆみんを囲いの外に出す方法があればいいんだけど。今は何とかスクーパーズの進撃を遅らせて、ことこの防衛線に期待するしかない。」

「そうだね。」

進撃を遅らせるべく、りどがまりに話しかける。

「どうですか。」

「また、二人で行ってみましょう。」

「了解。後についてきて。大丈夫なようならば、私が飛び込むから、同じ要領で。」

「わかったわ。」

スクーパーズに先頭に近づくと、前に出ている1体のスクーパーズが気が付いたようで、装甲台車の後ろから何体か出てきた。スクーパーズはりとをさけて、動きが遅いまりを狙っているよ

うだった。りとがまりに向かって叫ぶ。

「まり、下がって。まりを狙っているみたい。後ろに回られたらやっかい。」

スクーパーズも、ビーム攪乱幕の中ではスクープビームがあまり届かないので、まりへ接近していった。まりは全速力で来た方向へ戻っていった。りとはまりの背中について、スクープビームをボードで止めたり、払いながら後退した。左右からビームが来るため、止めるのに必死で攻撃することはできなかった。攪乱幕の外に出ると、スクーパーズは追っては来なかった。しかし、その間も、スクーパーズは前進を止めなかった。

「また、横から行ってみる。」

「気を付けてね、りと。」

「わかってる。スクーパーズも何か対策を考えていそうだから。」

「スクーパーズの前進の速度も速いわね。」

「うん、慣れてきたのかな。まり、ここが無理と思ったら、また下がってね。」

「わかったわ。」

「じゃあ、行ってくる。」

側面に回って、また、SWEET BOX裏の小道から接近を試みた。竹下通りとの接続部分に装甲板が2重に設置されていた。そして、装甲板を超えると中には多数のスクーパーズが待ち構えていた。ルナ銃で何体かは倒したが、数体がまとまって同時にそして連続して攻撃があり、それを避けるのが精いっぱい、ビーム攪乱幕供給ホースに近づくことはできなかった。そのため、撤退することにした。りとが側面攻撃をしている間にも、スクーパーズは前進していた。そのため、まりは、ジュマベル原宿の影まで撤退していた。まりが、りとに話しかける。

「どうだった。」

「だめ、防御が厚くなっている。ルナ銃をもっと上手に使えば、ホースを攻撃できるんだけど。ごめん。」

「ううん。りとは頑張っているわ。」

「有難う。」

「お茶でも飲もうか。」

「えー、そんなことを言っている場合じゃ。」

「でも、休まないよ。少しだけ。付いてきて。」

そう言って、まりとりとは、近くの「SPINNSカフェ×スイーツパラダイス店」へ向かった。まりが、正面のドアを確認した。

「鍵は開いている。」

まりとりとが扉を開けて店に入ってしまった。まりは、厨房に向かった。厨房からりとに話しかける。

「大丈夫。座ってて。ここでバイトしていたこともあるの。」

「そうなんだ。」

「やった、スイーツもあるわよ。賞味期限も大丈夫。」

「勝手に食べて平気？」

「残したって腐るだけだし。全部終わったら店長に話しておくから大丈夫だよ。」

「わかった。まりを信用する。」

「昔はね、PARKの店がこの下にあったの。それで昼とかはこっちを手伝うことになったのよ。」

「へー、こんな立派なところがあったんだ。何で向こうに移ったの。」

「うーん、それは聞かないことね。武士の情けよ。」

「そう。分かった、詮索はしない。店長、いい人だもんね。」

「そうよね。だから、私たちでも続けて行けるのね。」

「まりの言う通り。」

「はい、紅茶とスイーツでティータイムとしゃれましょう。」

「うん。いただきます。」

「いただきます。」

「いつかPARKの店長に、恩返ししたい。」

「賛成。そのためには、もっとレベルアップしなきゃ。」

「そう。絵をもっと勉強しなくちゃ。」

「私は、ファッションとダンス。」

「頑張ろう。」

「頑張りましょう。PARKを盛り立てましょう。」

「そうだね。」

ふたりは笑って未来を思い描いた。しかし、そのすぐ後、スクーパーズの先頭がサンタモニカクレープを越えて来た。りとがまりに言う。

「まりは、ラフォーレに戻って、上空からスクーパーズが来れないようにしてて。」

「わかったけど、りとはどうするの？」

「ここからの連絡だと、防衛線の設置がだいぶん進んでいるみたいだから、もう少し頑張る。前進を邪魔して少しでも時間をかせぐ。」

「何度も言うけれど、無理はしないでね。って、スクーパーズと戦うことが無理と言えば無理だけれど。」

「そうね。でも、大丈夫、離れたところから攻撃してみる。」

「わかったわ。」

「まりも、何かあったらすぐに呼んで。すぐに駆け付けるから。」

「了解。」

「じゃあ、ラフォーレで。」

「うん、ラフォーレで会いましょう。」

サンタモニカクレープのところで、今まで先頭だった第4中隊が陣地の構築を開始し、第2中隊が先頭を引き継いだ。第231分隊のゾリドル分隊長が、隊員に告げる。

「中隊長から、第231分隊が名誉ある先陣の名を受けた。2体が前に出て、それぞれ1体用の防弾板を弾除けで見張りを行う。異常を発見しだい、主防弾板の第23小隊の小隊長に連絡しろ。私もここにいる。この見張りに失敗すれば、第3中隊のように中隊全体が大損害を被る。危険な任務だが重要な任務だ。気を抜かないで遂行するように。見張りには10分交代だ。見張り以外のものは、少し下がって休んでいるように。」

第231分隊隊員が全員息を飲む。

「まずは、デリル、カレグム、お前ら2体に見張を命じる。」

2体が答える。

「わかりました。」

デリルとカレグムがそれぞれの1体用の防弾板に着いたところで、第24小隊小隊長が中隊長に確認して、前進を命じる。

「今から前進するぞ。防弾板を押す隊員は、前の見張りとの距離を気を付ける。大きな銃もった人間が現れたら、第241分隊は対処するように。棒人間にはあまり近づかず、距離を保って同時攻撃を心がけること。それでは、前進！」

第2中隊が前進を開始した。見張りの2体は極度に緊張しながら前進した。しかし、3分がたったが、何も起きなかったため、見張りのデリルがカレグムに話しかける。

「第4中隊は、あまり損害を出さずに進めたが、このままいくといいな。」

「そうだな。でも油断するなよ、どこから出てくるかわからないからな。」

「棒人間を、同時攻撃で倒せればい・・・。」

「カレグム、どうした。」

デリルがカレグムの方をみたが、だれもいなかった。

「分隊長、カレグムが消えました。」

第231分隊長がデリルに指示をする。

「そこも狙われているぞ。少し下がれ。」

同時に第241分隊長が指示する。

「第241分隊、敵が近い。防弾版の前を3体1組で搜索する。棒人間に近づきすぎるとなよ。」
「そう言いながら、第241分隊が防弾版の前に飛び出す。そのとき、デリルに攻撃があり、デリルは地面に転がった。」

「うぐ。分隊長、撃たれました。」

少し下がっていたため急所から外れたが、動いていなければ即死だった。第231分隊ゾリドル

分隊長が飛び出し、デリルに向かって叫ぶ。

「大丈夫か！」

そして、そのまま後ろに向かって叫ぶ。

「衛生兵！」

ゾリドル分隊長はデリルを運んで、主装甲版の陰まで来た。大けがではあったが、消えずに済みそうだった。

「しっかりしろ。大丈夫だ。衛生兵が戦艦の医務室に運ぶから。気をしっかり持て。」

「痛いです。痛いです。」

「すぐに衛生兵が麻酔を打つから。敵はどこから攻撃してきた。」

「う、上から撃たれました。どこからかは正確には分かりません。」

「わかった。感謝する。衛生兵、運んでくれ。」

デリルは衛生兵に運ばれていった。ゾリドル分隊長が命じる。

「ジムル、バコズ、見張りに付け。」

ジムル、バコズは湧き出る恐怖心を胸にしまつて答える。

「わ、わかりました。」

1体用の防弾版の陰に隠れる。そして、第24小隊長が前進を命じる。

「ひるむな！前進だ。」

ゾリドル分隊長も、見張りの2体に命じる。

「前進する。見張りの2体、良く回りを見る。特に上が危ない。上にタンクのようなものが見えたら、一度すぐに下がるんだ。行くぞ。分隊、前進！」

ゾリドルも、主防弾版から半身以上乗り出して、先頭の2体の周りを警戒しながら前進を開始する。少しして、ゾリドルがバコズの上にタンクを見つけて叫ぶ。

「バコズ、上だ。避ける。」

バコズが避けた瞬間、地面にエネルギー弾が命中し、続いてその周りの地面に数発命中した。タンクが消えたのを見計らって、ゾリドルが前進を命令する。止まっていると、全体の危険性が増すだけだった。

「バコズ、持ち場に戻れ。ジムル、バコズ、前進だ。」

そういうと、少しの間だけ止まっていた前進が再開する。ゾリドルがみんなに言う。

「向こうもこちらが良く見えていないようだ。落ち着いて確認して進め。」

少ししてバコズが叫ぶ。

「上方、タンク。」

同時に、横に避けた。しかし、何も変化はなかった。煙の濃淡で見間違えたようだった。みんなピリピリしてた。ゾリドルはバコズを責めることなく前進の再開を命じる。

「よーし、また前進だ。」

しかし、攻撃が続いた。ジムルは2回の攻撃を受け、連射された3発目が命中して消滅した。バコズは3回目の攻撃で重傷を負い、後方へ下げられた。それでも、第241分隊隊員は前進を続け、計4体が消滅、4体が重傷を負っていた。この状況は、ガーチューンにも伝えられていた。しかし、今までよりはずつと小さい損害で50m進むことができたため、現実的にはこの作戦以外の選択肢はなかった。そのため作戦の続行を各中隊長に命じた。

「夕方までには、何としても裏原に到達せよ。」

しかし、順番を待っている第231分隊隊員の恐怖は極限に達していた。

「もうやだ、こんな自殺のような任務は。」

「連隊長は、俺たちに死ねというのか。」

先頭の見張りが必要なことを理性では理解しても、やはり納得ができなかった。ザトスが消滅して、ゾリドルは、ビエルトにザトスの位置に着くように命じた。だが、ビエルトは動かなかった。

「どうした、ビエルト。」

「僕は、みんなの言う通り、臆病ものなんです。怖くて、動けないんです。」

「そうか。相手はやたら強い。今までで一番危険な作戦だ。誰でも怖い。臆病なんてことはないよ。」

「でも。」

「敵は王女様を餌にして、狩りを楽しんでいるんじゃないかなんて噂もある。」

「私たちは、獲物というわけですね。」

「そうだ。でも敵も攻撃をしあぐねている。ならば、実力で王女様を取り返してやろうじゃないか。」

「でも。」

ゾリドルも隊員の恐怖は分かっていた。また、隊員の半分以上を失った状況で自分だけが安全なところにいることも嫌だった。

「グドル、下がれ。俺がそこへ行く。ビエルト、行くぞ。」

ビエルトも、分隊長にそこまで言われて、行かないわけにはいかなかった。

「わかりました。」

「なに、心配するな。気を付けていれば、大けがぐらいで早く帰還できるさ。」

「大けがですか。」

「そうだ。」

2体が位置について、前進が再開された。ビエルトが叫ぶ。

「分隊長上です。」

ゾリドルが退くと数発の射撃があったが、命中しなかった。

「ビエルト、お前、目がいいな。」

「そうですね。だから、臆病なのかもしれません。」

「そうかもしれないな。」

敵からの攻撃が何度かあったが、すべて避けることができた。ゾリドルが言う。

「いいコンビだな。」

「そうですね。」

しかし、そんな良い時間は長くは続かなかった。ビエルトがすぐ横の異変に気付き、そっちを見ると、タンクが分隊長を狙っていた。呼びかけても、分隊長が逃げる間はなさそうだった。

「くそっ。」

ビエルトはタンクに飛びつき、体で押し出そうとした。その動きで、ゾリドルもタンクに気が付いた。

「ビエルト。」

その瞬間、エネルギー弾が発射され、それが防弾版の横で跳ね返って、ビエルトに命中した。

「ビエルト！」

それは、最初の呼びかけの何倍も大きな声だった。そして、ビエルトに駆け寄った。

「大丈夫か。いま、すぐ後方へ運んでやる。衛生兵！いま、そっちに運ぶから準備している！」

「これで臆病者の名は返上できるでしょうか。」

「ああ、お前は分隊一の勇者だ。」

「有難うございます。分隊長。」

「王女様の戦艦の看護師は美スクーパーズぞろいだぞ。うらやましいな。」

そう言いながら、ゾリドルがビエルトをすぐ後ろの主防弾板まで運んでいる途中に、ビエルトは消滅してしまった。

「ビエルト！」

ゾリドルが前を見ると、タンクが下がっていくのが見えた。

「棒人間、そっちか！」

ゾリドルは、タンクを追って行った。主防弾板の裏の第231分隊の残りの隊員もそれを追おうとしたが、第23小隊の小隊長が他の隊員も今まで見たことがないほど、強く制止した。

「行くな！これは命令だ。行くならば、私がお前らを撃つぞ。」

そのため、残りの第231分隊隊員は、

「分隊長！戻って下さい。分隊長！分隊長！」

と呼びかける他はなかった。しかし、分隊長が戻ることはなかった。

りとも焦っていた。

「だめ、前進を止められない。少し止まっても、すぐに前進してくる。気配だけの攻撃だと無理だ。煙の中だと突然スクーパーズが現れて危ないし。さっきの1体みたいに、煙の外に出て来てくれるといいんだけど。」

りとは後ろを振り向くと、明治通りまで後50mのところまで迫っていた。

「このままじゃ、明治通りまで30分持たない。横から攻撃しても、前進を許すだけになるし。前を抑えるしかない。」

第2中隊は、残った第231分隊隊員を下がらせ、第232分隊が見張りを担当することとし、前進を再開した。りとの気配による攻撃もスクーパーズの移動を予測し、だんだんと精度を上げ、見張りは死への片道切符のような様相になってきたが、それでも見張りを担当する分隊を変えて、25体の消滅、15体の重傷者を出しながら、第2中隊は明治通りに達しようとしていた。りとがここに連絡する。

「ここ、ごめん。もう、スクーパーズを止めることができない。」

「まだ攻撃装置の設置がただけ、なんとかなるよ。ラフォーレの屋上でまりと待機していい。」

「わかった。ありがとう、ここ。」

「ううん、りとちゃん。時間を稼いでくれて有難う。」

連絡を切ると、ラフォーレの屋上に向かった。屋上に着くと、まりが待っていた。

「りと、ご苦労様。お茶でも飲む？」

「有難う。でもそんな気分じゃない。」

「それはわかるわ。でも水分は必要だから、これを飲んで。」

まり、そう言って、スポーツドリンクのペットボトルを渡す。

「有難う。屋上の防弾板はまりが作ったの。」

「そうだよ。ここに教わっていただけだね。ここから上空を飛んでくるスクーパーズを阻止してた。」

「そうか、だから他からスクーパーズが来なかったのか。有難う、まり。」

「えっ、それはりとが私に指示したことよ。」

「私、そんなこと言ったの？」

「うん、言った。必死だから覚えていないのね。」

「そうかも。」

「気にはしないわよ。」

「有難う。でも、ここは大丈夫って言ってたけれど、これからどうするんだろう。」

「良くわからないけど、合図をしたら、明治通りのスクーパーズを攻撃してね、ってことだった。」

「そうか。ビーム攪乱幕に対処できるということかな。ここを信じて、合図まで休んでいいか。」

「賛成。見張りながら、休んでいよう。」

「いい眺めだね。」

「そうだね。私もラフォーレの屋上に来たのは初めてよ。原宿の街が見渡せる。」

「明治通りを渡る歩行者用信号が青になった。信号が動いているんだ。」

「そうみたいね。律儀なこと。」

「でも、スクーパーズは渡らせない。」

「決心が堅いわね。」

「まりもそうでしょう。」

「私も原宿を守りたいけど、りとは私よりも堅そう。」

「原宿を守りたいというのもあるけど、何か今のスクーパーズは、原宿の文化じゃなくて、みさちゃんを狙っている気がする。」

「そうなの。」

「何となくだけど。みさちゃん、地球人じゃなくて、スクーパーズの敵の宇宙人じゃないかと思っ
て。」

「デストロイヤーズ？」

「わかんないけど。エビフライ星人とか他の宇宙人もいるみたいだから、どこかの星のお姫様っ
て感じがする。」

「お姫様というのは、わかる気がするわ。確かに、少し生意気だけど、高貴な感じがするわね。
あと、そういう教育を受けている感じ。」

「そうね。でも、みさちゃん、いい子だから、たとえ地球人じゃなくても守らなくっちゃって思
う。」

「なんかSFっぽいけど、りとの言う通りとしたら、やっぱり、みさちゃんは守らなきゃね。」

「うん。エビふりゃーじゃ、頼りないし。」

「そうね、エビふりゃーじゃ。」

PARKで、エビふりゃーがくしゃみをしながら言う。

「なんででしょう、鼻がむずかゆくなってきました。歴史で習った、風邪という病気の症状に似
ているではございますが。」

「おかしいですな。その病気は数百年前に無くなっているですな。地球の細菌にも対応済みな
はずですな。」

「でも、治りましたでございます。ご心配をおかけしました。それにしても、ガーチューンはさ
すがでございます。」

「どうしてですな。」

「この状況で明治通りまで到達しています。夕方までにはここに来ると思うでございます。」

「それはそれで、困るですな。」

「もう、十分にスクーパーズの情報がアマツマラに貯まりましてございます。これ以上の犠牲は
ご無用かと。」

「まだだめですな。特にりとちゃんには情報の量が全然足りていないと思うですな。」

「そうでございますか。」

「そうですね。でも、大丈夫ですな。今日中にここに到達することはないですな。まあ、見ているですな。」

「姫様と意見が異なりますが、どちらが正しいか楽しみでございます。」
戦闘の経験が豊富なエビふりヤーは自信満々に答えた。

ガーチューンは、明治通りを渡る際にも基本的には戦法を変えないことにした。両側に防弾板を配置しつつ、ビーム攪乱幕を張りながら前進する方法である。竹下口交差点の *asics* の前に防弾版やホースを集積することを急いだ。そして、約1時間後、第4中隊を先頭にして前進の再開を命令した。

「竹下口交差点を渡り、裏原に迫る。」

第4中隊が慎重に、しかし、確実に前進を開始した。

りととまりは、ラフォーレの上から見ていた。まりがりとに話しかける。

「どうする。明治通りを渡る気みたい。」

「このままだと、PARKまで、1、2時間で着いてしまいそう。」

「どうする。攻撃する？」

「ことが待ってと言っているのです、ことこの合図を待とう。」

「わかったわ。」

第4中隊は何事もなく、交差点を進行していった。先頭を指揮している第41小隊の小隊長がつぶやく。

「このまま無事に渡り切れれば良いが、何もしかけてこないのは、やはり不気味だ。」

小隊長は隊員に油断しないように注意した。明治通りの3分の2ほど渡り終えたとき、小隊長の悪い予感が当たった。突然、強い風が明治通りを駆け抜けて、ビーム攪乱幕が吹き飛んでしまった。小隊長が命令する。

「全員、防弾板の陰に隠れろ。」

しかし、密集していたため、全員が隠れることができるほどのスペースがなかった。隠れられないものはその場に伏せるほかはなかった。

りととまりのところに、ことこの合図があった。

「まりちゃん、お願い。」

まりが、リア銃で明治通りの竹下通りに近いスクーパーズに向けて照準する。

「さあ、いくわよ。」

ここに言われた通り散弾を連射した。りととは、まりへの攻撃を防ぐために周りを見ていた。明治通りの防弾板の陰になっていないスクーパーズは、竹下通りに戻れたものも少数いたが、それ以外は次々に消えて行った。そして、防弾版の陰にいるスクーパーズを攻撃するために、まりは防弾板に向けてリア銃を発射した。

ガーチューンは、a s i c s の建物の横で、多数の第4中隊の隊員が消滅していくのを目の当たりにした。一瞬、声が出なかったが、すぐに気を取り直した。攻撃してくる場所を見ると、ラフォーレの屋上であることがわかった。すぐに、ガーチューンのそばにいる第111分隊と第112分隊に命じた。

「第111分隊と第112分隊は、ラフォーレ屋上の敵に接近、第4中隊への攻撃を阻止しろ。倒す必要はない。攻撃を第4中隊からそらすだけでいい。」

ガジメは、敵の攻撃の直後に隊員に呼びかけ、突撃の準備を済ませていた。

「了解しました。ラフォーレ屋上の敵を牽制します。」

そう言って、ラフォーレの屋上に向けて突撃して行った。第111分隊隊員に命じる。

「棒人間が出てくると思う。近づくのは、俺、ゼクル、ゴモだけにして、あとは距離を取って援護だ。射撃手の射撃にも気を付けろ。相手の射撃から隠れるところはない。察知して避けるんだ。」

屋上のりとは、竹下通りからスクーパーズが出てくるのを見つけると、第4中隊に射撃をしていたまりに伝える。

「スクーパーズが向かってくる。危なくなったら、まリモビーム攪乱幕をまいて、下のホールに向かって。」

言葉の途中ですでにりとは飛び出していた。まりは射撃を止めて、りとは通信で答える。

「わかった。援護射撃はまかせて。」

「うん。」

ゼクルがゴモに位置取りを命じる。

「分隊長の言う通り、やつが出てきた。やつは素早い、無理はしないで、僕の斜め横にいてくれ。」

「わかりました。」

ガジメ、ゼクル、ゴモがりとの方向に向かった。下では、第112分隊が出発していた。ガジメが第112分隊分隊長に連絡する。

「棒人間はこっちで抑える。そっちは上の射撃手に向かってくれ。」

第112分隊は散開しながら第111分隊とりとを迂回して、ラフォーレの屋上に向かい始めた。それを見たりとが決意を込める。

「行かせない。」

りとはまず先に近づいてきている第111分隊の先頭のガジメの方に向かった。まだ少し距離はあったが、ガジメ、ゼクル、ゴモがスクープビームを撃つ。しかし、それは、棒で弾かれたり、かわされたりした。りとは、一番最初に原宿上空で正確で強力なビームを撃ってきたスクーパーズを残さない方が良くと思い、ビームを避けながら、先頭でなくゾロモをるな銃で射撃した。ガジメは向かってくる敵のタンク型の銃の先端が自分でなく斜めに照準しているようだったことに気が付き、後ろを見て叫ぶ。

「ゾロモ、気を付けろ。そっちだ。」

その瞬間射撃があった。ゾロモは急なことで動けなかった。しかし、狙撃助手のデツホがゾロモにぶつかり押し出した。エネルギー弾は、デツホに当たった。デツホは弱い声で言う。

「ゾロモさん。」

ゾロモはデツホの傍に寄って叫ぶ。

「何、デツホ。消えないで！」

「ご無事で・・・」

デツホはそう言って消滅してしまった。敵が向かってくる状況では、戦闘を継続するしかなかった。ただ、自分の助手の復讐だけを心に誓っていた。りとは、

「外した。」

とだけつぶやいた。最初の第111分隊の3体とはもう間近に迫っていた。りとは棒を正眼の構えで持って突入した。ガジメ、ゼクル、ゴモも同時射撃の準備をしてぶつかってくる敵に接近していった。

しかし、両者が衝突する直前、りとは進路を変え横に向かった。

「逃げるのか。」

ゼクルが、そう言いながら後を追う。ギデそしてデツホを失った第111分隊の他の隊員も復讐を誓いながら追った。ただ、後ろから敵を撃とうとしたとき、それは間違いだったことに気付く。ガジメが叫ぶ。

「撃つな。そこから撃つと、第112分隊にあたる。」

そう、りとの目標は最初から第112分隊の方だった。まさに、連絡する。

「合図したら、私の方に向かって、散弾を撃って。」

「えっ。」

「私に向けて散弾を撃って。大丈夫だから。」

「本当に？」

「本当に。何発かまとめて。」

「わかったわ。」

りとはそのまま第112分隊の少し前に向けて移動する。第112分隊分隊長が指示をする。

「打ち合わせ通り、2つのグループで交互に同時攻撃だ。こちらも、ラフォーレからの攻撃の射線が、棒人間に被るように移動するんだ。」

第112分隊は、りとをまりからの射線に入れるため、後退しながら横に移動し、前方と横に少し離れた後方グループに分かれた。それを見たりとは、2つのグループのうち、後方グループに向かった。第112分隊の前方グループは射線に第111分隊が入って撃てない。そして、第111分隊も第112分隊の前方のグループのために撃てなかった。このままでは、まずいと思ったガジメがゾロモに命令する。

「右の建物の陰に入れ。棒人間から見えない位置で射撃手を狙え。」

ゾロモは動きが速くないため、2方向から狙われると危険と思い、物陰からの射撃を命じたのである。続いて、

「パドとイワタ、ゾロモをサポートしろ。棒人間から守れ。」

と命じた。ゾロモ、パド、イワタが建物の方に移動し始めた。第112分隊は、後方グループがりと同時に同時攻撃を仕掛けた。しかし、りとはボードで防いだ。そして、前後のグループに入る直前、まりに連絡した。

「いま。撃って！」

「わかった。避けてね。」

まりが射撃を開始する。りとは、まりの散弾を逆さになりながらボードで防いだ。まりの散弾は第112分隊の2つグループを襲い、第112分隊最強の隊員で機敏にかわしたもの1体と、ちよどりとの陰で当たらなかったもの2体、計3体を残して消滅していた。

「第112分隊が。」

ゼクールはそう叫びながらも、ゼクールから見たりとの後方に第112分隊がいなくなったため、すかさずスクープビームをりとに向けた放った。しかし、りとはその攻撃を予期してたかのようにビームを棒で払う。一方、カジメは散弾が次はこちらに向けられると思った。

「散開しろ。」

それに従い分隊は散開したが、ゼクールはりとを目標に接近して行った。りとがルナ銃で攻撃するが、ゼクールは機敏に動いてかわす。

「タンクの動きを見ればかわせる。」

ゼクールも射撃するが、りとも難なく射撃をかわす。そして、まりに撃つように連絡する。まりが、散弾を放つ。りとは、逆さになり、まりからの攻撃を防ぎながら、ゼクールに接近する。りとに気を取られたいたゼクールにまりの散弾が当たった。

「ゼクール！」

ガジメが叫ぶが、ゼクールは何事もなかったように攻撃を続けている。

「そうか、あいつのサイコバリアーは、散弾に勝っているんだ。」

ゼクールならば大丈夫かもしれないとアルドア技術参謀が言っていたことを思い出した。

「そう言えば、アルドアが俺も大丈夫かもしれないって言ってたな。よし、ゼクール、2体でいくぞ。挟み撃ちだ。」

ゼクールが答える。

「挟み撃ちは、分隊長が攻撃の邪魔になります。私の斜め後ろから撃って下さい。」

「俺に後ろに付けと言うのか。いいだろう。いくぞ。」

「はい。タンクが指向している方向にも気を付けて下さい。」

「私に指図か。だが、そうだな、気を付ける。」

りとはこのスクーパーズには散弾が効かない予感がしていた。

「やっぱり、これには散弾は効かない。」

そのため、散弾が降る中、そのスクーパーズに接近を試みていた。ただ、もう1体に加わろうとしていたため、そちらから攻撃することにして、ルナ銃を向けた。

「分隊長！そっちを狙っています。」

「わかってるって。」

ガジメが答えながら、指示する。

「よし、今度はこっちの番だ。撃て。」

「はい。」

両スクーパーズがりとを射撃するが、ガジメのはかわし、ゼクルルのは棒ではじいた。

「くそー、どうする。」

「角度とタイミングを変えて、繰り返しましょう。」

りとは、正確な射撃をするスクーパーズが見えないことが気になっていた。散開している中、2体が建物の前に並んでいるのが見えた。

「そこかな？」

その建物に向けて、ルナ銃を発射した。ゼクルルがあざ笑う。

「どこを撃っている。」

ガジメが叫んだ。

「違う！ゾロモを探しているんだ。」

ルナ銃のエネルギー弾がゾロモのすぐ前の壁に当たる。まさに照準をつけていたゾロモが驚いて様子を見る。それを見たりとがまりに連絡する。

「H&Mの上に、正確な射撃をするスクーパーズがいる。防弾板に隠れて。」

「りとが戦っているのに、隠れるわけにはいかないわよねー。」

まりは、そう言いながら、リア銃をそのH&Mの建物の屋上に指向した。

ガジメがゾロモに向かって叫ぶ。

「そこは危険だ。急いで離れろ！」

ゾロモたちが散開してそのたてものから離れた。リア銃のエネルギー弾が建物に当たって飛び散ったが、3体はそのエネルギーの破片を避けることができた。その間にも、りとがゾロモの方を見ているガジメに斬りかかろうとする。ガジメはそれに気づいたが、もう避けられないと覚悟した。

「しまった。気を取られた。」

しかし、ゼクルルがりとにスクープビームを発射した。りとは、それをよけるために、ガジメへの攻撃は成功しなかった。ガジメがゼクルルに言った。

「おー、有難う。危ない所だった。そうだな、お前は棒人間だけを見ていてくれ。」

「はい、初めからそうしています。分隊長は全体も見えてください。」

「わかった。さすがだな。」

しかし、りとはそのままゾロモの方へ向かう。

「あいつを倒さないと、まりが危ない。」

ゼクルルが、そして、ガジメがりとを追いかけるが、少しづつ離されていった。

「くっそー。」

そう言いながら、全力で追いかけた。りとはゾロモの手前にいるイワタを見つけた。

「あれが、大きくて遅そう。」

そして、イワタの方に向かった。少し離れたところにいたパドが叫ぶ。

「イワタ、そっちに行くぞ。」

イワタは動こうとしたが恐怖のあまり動けなかった。りとが迫ってきた。スクープビームを撃とうとしたが、全く間に合っていないことは明らかだった。後ろから追ってきたゼクルルは射線にイワタが入るため撃つことはできなかった。パドが叫ぶ。

「イワタ、よける。」

イワタはもう動くことができなかった。りとがすぐそばに来て、斬りかかられると思ってイワタは目を閉じた。しかし、りとは側を通るときに横に押しただけだった。

「えっ」

そして、イワタの後ろを回りこんで、ゾロモに向かった。ゼクルルは、またイワタが射線に入りりとを撃つことができなかった。

「くそっ、どうする。イワタごと撃つのか。」

そう思ったが、撃つことができなかった。ゼクルルは射線からゾロモとイワタが入らない位置に移動し始めたが、間に合うとは思えなかった。ゾロモはパドの方に逃げようとしたが、やはり間に合うとは思えなかった。パドはスクープビームを撃ったが、りとの動きにはついていけず、ビームはりとのかなり後ろを通過していった。りとが、ゾロモに斬りかかろうとした。だが、ちょうどそのとき、横から強力なスクープビームが来るのを感じた。とっさに、ボードで弾いたが、りとも弾き飛ばされた。

「何？」

りとは予想外の攻撃に驚いた。そして、すぐさま2射目が来た。それは1射目よりさらに強力だった。ボードで防いだが、バランスを失い回転しながら弾き飛ばされた。さらに3射目がきた。りとに直撃するかもしれない。しかし、3射目の直前にまりが、りとの前面にビーム攪乱幕を連続して発射して攪乱幕でりとの前をカバーした。そのため、強力なビームも拡散してりとは届かなかった。第111分隊隊員が射撃したスクープビームを見て叫ぶ。

「連隊長！」

そう、ガーチューンが単身こちらに向かってきた。ゾロモがお礼を言う。

「連隊長！有難うございます。」

「礼は不要だ。第4中隊の撤退は完了した。降下して撤退だ。」

ガーチューンもりとを深追いしなかった。第111分隊と第112分隊の残存兵は急降下して、ラフォーレの屋上から見えないところを撤退して行った。竹下通りに着くと、ガーチューンは返ってきた隊員の労をねぎらった。

「中隊の半分近くがやられてしまった。しかし、第4中隊の120体のスクーパーズを救うことができた。有難う。」

そして、第112分隊の生き残りは第111分隊に編入することを命じた。ゼクルルは、ガーチューンのスクープビームの威力を見て思う。

「連隊長のビーム、すごかったな。僕もまだまだだ。もっと努力して、あいつに勝てるようにならなくっちゃ。みんなを助けられるようにならなくっちゃ。」

スクーパーズが撤退していくのを見て、りとはまりのところへ向かった。

「まり、有難う。危なかった。」

「こっちこそ、りとに危ないことばかりさせちゃって。」

「それにしても、あのビームは強力だった。散弾が効かないスクーパーズもいるし、能力はそれぞれなのかも知れない。」

「そうね。個性があるということよね。いいことだわ。」

「今はあまり嬉しくないけど。」

「それもそうね。スクーパーズは竹下通りまで引き上げたみたいだから、とりあえず、ホールに戻ろうか。」

「うん、また来るとは思うけど、今はそうしよう。監視はことがやってくれると思う。」

そう言いながら2人は下の階に降りて行った。りとがお茶を入れてみると、まりは一度下の階に降りてから、上がってきた。そして、りとに言う。

「見て、りと。」

「わー、可愛い！でも、その服、まりのデザインだったよね。」

「覚えていてくれるんだ。」

「そのスケッチは私でしたし。」

「うん、私がデザインした服のいくつかは、PARKだけでなく、すぐ下のお店に置いてもらっているの。」

「ラフォーレのお店に！それはすごい。」

「置いてもらえるのは、そんなに多くないけど。」

「それでも、すごい。私の絵を他のお店に置いてもらえるのは、まだまだ先。ネットでは猫の絵とか売っているけれど、あまり売れないかな。」

「私もそうよ、少しだけ。本当のプロになるのは大変。」

「そうね。頑張らなくっちゃ。」

まりが鏡を見ながら、やはり嬉しそうに言う。

「でも、「可愛い服を着ると、リフレッシュできる。」

「うん。少し時間がありそうだから、私も今の様子を絵に書いておこうかな。」

「そうしなさいよ。でも、あまり集中しすぎると、呼びかけても気づかないから、それだけは注意ね。」

「わかってるって。」

そして、りとは紙と鉛筆を探してきて絵を描きはじめ、まりは可愛い服を着た自分の姿を見ながら、新しい服のアイディアを練りはじめた。

一方、竹下通りのガーチューンは、さっきの戦闘を思い出ししながら、次の作戦を練っていた。「向こうもビーム攪乱幕を使うのか、やっかいだな。」

また、半分近くに戦力が減ってしまった状態では、慎重に対処せざるを得ないと判断した。そして、中隊長を集めて命令を発した。

「明治通りを渡ることは、現戦力では無理と判断せざるを得ない。明治通りの西側を確保し、明治通りを渡る準備をすることを目的とする。その後は、たぶん第3連隊になると思うが、他の連隊が到着してからとする。」

それを聞いていたゼクルルは、早く王女を助けたかったが、それが無理であることもわかってきた。そのため、棒人間に対抗する手段を無言で考えていた。

「どうする。移動速度は向こうの方が速い。同時多方向からの攻撃でも防がれる。そして対応力もある。たぶん次は連隊長の攻撃も効かないだろうな。僕がなんとかしなくちゃ。もっともっとパワーが欲しい。」

ガーチューンが当面の作戦を指示する。

「そのために、ラフォーレを奪取し、あいつらを裏原に追いやる。竹下通りの途中から分岐して、ラフォーレに到達する。途中の道やラフォーレの建物内部も、ビーム攪乱幕が使える。防弾板は階段にスロープを設置して押し上げる。スロープの設置のために、防弾板から外に出なくてはいけないが、遠距離からの散弾ならば攪乱幕で十分防げる。また、強力な銃を室内で撃つてくる可能性は少ないと思われる。夕方までに、ラフォーレを奪取し、明治通りの西側を確保する。」

ガーチューンは、それぞれ半数近くになってしまった第3中隊を中隊長が健在な第4中隊に編入した。第2中隊と新しい第4中隊が超越交代で前進し、第1中隊がその上空と途中経路の支援を担当することにした。

まず、第2中隊がジユマベル原宿から分岐し、SPINNSカフェ×スイーツパラダイス店の前で左折した。そして、カーサ・モーツアルトの前を右折し、そこで新しい第4連隊と交代して、裏手からラフォーレに迫って来た。スクーパーズは順調にラフォーレに近づくことができた。

第411分隊隊員の先頭の2名が警戒しながらも、少しだけ余裕があった。

「攻撃がないな。どういことだろう。」

「ラフォーレを決戦場とするための準備をしているのかもしれない。」

「そうか。とりあえず、俺たちの番が何事もなく終わってくれと嬉しいが。」

「そうだな。」

第411分隊分隊長が注意をする。

「お前ら、不要な話はするな。注意力が下がる。お前らの発見が遅れると、中隊全体を危険にさらすことになるんだぞ。」

2名が返事をする。

「わかりました。申し訳ありません。」

そして、周辺の警戒をしながらゆっくりと進んでいった。第411分隊の分隊長も同じことを考えていた。

「ラフォーレは地獄になるかもしれない。」

スクーパーズがカーサ・モーツアルトを右折したところで、まりがりとに話しかけた。

「りと、ラフォーレまでもうすぐやってきそう。」

「あつ、まり。スクーパーズ、もうここか。裏手から来そうね。」

「そうね。本当はラフォーレには思い出がいつぱいで、あまり傷つけないけど、しょうがないわね。ここで時間を稼がなくちゃ。」

「そうか、そうだよね。ファッシュンショーに、まりの服を置いてくれている店もあるんだよね。」

「あと、中学の時は毎週通ったかな。でも、仕方がないわ。ここで時間を稼ぎましょう。」

「ここにどのぐらい時間を稼げばいいか聞いてみるね。」

りとはそう言って、ここに通信した。

「ここ、防衛線が完成するまで、あとのぐらいかかる。」

「りとちゃん、ごめんね、遅くなって。」

「ううん、ここが頑張っているのは分かっているから。」

「散弾発射装置がスクーパーズからの攻撃に耐えられるように、発射装置の前に防弾板を設置したり、何か所かが破壊されても大丈夫なように発射装置もできるだけ多く設置しているの。無線だと妨害されちゃいそうだから有線でもネットワークを張って、それで時間がかかっちゃって、ごめんね。」

「ううん、ここが頑張っているのは分かっている。有難う。でも、あとどれぐらい持たせればいい？」

「北側はだいたい終わったから、あと1時間ぐらいかな。」

「わかった。あと1時間ぐらいは持たせる。」

「ごめんね。」

「大丈夫。」

まりに話しかける。

「あと1時間ぐらいだっさ。」

「そうか。」

「こちらも、ビーム攪乱幕を張ろう。それもかなり濃く。そうすれば、スクーパーズも良く見えないので、前進が遅くなるはず。それにビームも届かないので、建物の中が荒れないですむ。まりは、攪乱幕を張るのをお願い。」

「りとはどうするの。」

「私は時々斬りこんで、前進を遅らせる。」

「大丈夫？」

「うん、濃く張れば、多方向からの同時攻撃がしにくいから、少し楽になると思う。こっちの攻撃も効率落ちるけど。それで前進を遅らせるのが目的だから。」

「わかった。けど、気を付けてね。」

「エレベーターは止めておかないと。」

「そうね、ここに聞いて、エレベーターを止めておくわ。それまで、りとは休んでいて。たぶん、動きっぱなしになると思うから。」

「ありがとう、まり。いまは休んでおく。」

スクーパーズが教会を越えたところで、まりがりと呼びかける。

「りと、スクーパーズが教会を越えてきたわ。」

「ありがとう。それじゃ、行こうか。」

りとは休むために横になっていたが、まりの声で起き上がり、いっしょに裏の入り口がある2.5階に降りて行った。

スクーパーズは、裏の入り口の下に到達すると、入口までに階段があるため、入り口前にビーム攪乱幕を張りながら、1人用防弾板を車いす用のスロープを使って上に上げていった。そして、5体ほどのスクーパーズが階段にスロープをかけた。そして、主防弾板を押し、入り口前まで押し上げた。突入の先陣は第1中隊第2小隊が担当することになった。

ビーム攪乱幕を散布した後、第121分隊が建物に入ってしまった。分隊長が状況を見る。

「視界が悪い。攪乱幕が濃いな、散布量の設定は大丈夫か。」

「はい、計算通りに散布されています。」

前進を止めて、アルドア技術参謀の部下が原因を調査した。原因が判明した。

「我々のものでないビーム攪乱幕が混じっています。」

「敵のものか。」

「はい、成分はこれまでに見たことがなく、デストロイヤーズのものとも違うため断定はできませんが、その可能性が高いです。」

「わかった。敵のものではどうしようもないな。こちらの散布量を調整するが、それでも攪乱幕がかかなり濃い状態で戦わなくてはいけないか。スクープビームはどのぐらい届く？」

「個体差はありますが、2 mから3 mと思います。ただ、敵の散弾はほとんど使えないはず。強力なビームの方は15 m程度は有効と思われませんが、連射はできないため、損害は押さえられます。また、撃った直後は攻撃のチャンスです。」

「わかった、肉弾戦だな。」

第121分隊分隊長が突入に際して隊員に指示を出す。

「先頭の見張りは、主防弾版からあまり離れるな。離れると援護ができない。同時攻撃する3体もなるべく固まっていること。敵が現れたら同時攻撃で相手を牽制しろ。我々はこのフロアを制圧したら、第122分隊に交代する。」

第121分隊が廊下を抵抗を受けることなく進んでいった。階段の前で第122分隊と交代し、第121分隊は、2、5階フロアの制圧を行うことになった。

まりとりとは入り口にビーム攪乱幕を散布した後、スクープパズの前進に合わせて3階まで後退していった。まりが尋ねる。

「りとは、どうする。」

「私は3階の隅に隠れて、スクープパズが階段をさらに上がって行ったら、後ろからそのスクープパズを攻撃する。」

「その方が攻撃しやすいから？」

「うん、それにスクープパズのリーダーがいるかもしれない。」

「りと、これ見て。」

「スコップ？」

「さっき作ってみたの。近接戦闘には最適って、ロシア好きの友達が言っていたわ。」

「そうなんだ。」

「これで、りとといっしょに戦える。」

「ううん。まりは散弾で先頭の進行を抑えて。」

「でも。」

「たぶん、リア銃が怖くて防弾板より前に何体かが出ているはずだから、それだけ狙って。」

「うん。」

「待ち伏せして近くから散弾を撃ったら、ビーム攪乱幕を散布して、すぐに上に逃げて。」

「少し不安だけど、がんばるわ。」

「何かあったら、ビーム攪乱幕を散布しながらそのまま窓を破って裏原に逃げて。強化してある

けど、リア銃ならば窓は壊れると思う。私はなんとかするから。」

「わかったわ。とりあえず、3.5階への階段の途中にいて、スクーパーズの先頭を撃ってみる。」

「撃ったら、すぐに上に上がって。」

「わかってるって、心配性ね。」

「ごめん、まりは戦う人って感じじゃないから。」

「りとも戦う人じゃないわよ。」

「そうだけど、昨日からの場面場面が何か経験したことがあるような気がして。」

「デジャヴ？偽の追想じゃない。」

「そうかもしれないけど。」

「りと、スクーパーズが上がってくるみたい。」

「じゃあ、作戦通りに。ここから防衛線の準備完了の合図があったら、窓から脱出して東急プラザの裏で集合しよう。」

「東急プラザの裏ね。わかったわ。」

2. 5階では、第122分隊が3階に上がる準備をしていた。分隊長が指示をする。

「まず、3体のグループ2組で3階に上がり、階段周りを警戒する。その間に階段にスロープをかけ、防弾版を押し上げる。」

3体2組がそれぞれ階段の3階の踊り場の両側まで前進してあたりを警戒し、別のグループがスロープをかけようとしたとき、散弾での攻撃があった。濃密な攪乱幕のために消えたものはいなかったが、2名が重傷を負い下に運ばれていった。その後、防弾板が3階に到着するまでの間攻撃はなかった。第122分隊は、3階フロアの制圧のためにフロアの探索に向かった。第12小隊小隊長が隊員に告げた。

「第123分隊は防弾板を3階から3.5階に押し上げた後、3.5階の制圧にあたれ。3.5階で1度は上から攻撃がある可能性が高い。異常を発見次第、身を隠したのち、同時攻撃を心がける。第123分隊が3.5階を制圧したら、第12小隊の役割はとりあえず終わりだ。」

ラフォーレの下にいたガーチューンは、第111分隊を呼び出した。そして、ガジメに命じる。

「第111分隊は建物上部から侵入し、下からの侵攻する部隊を掩護せよ。」

「挟み撃ちというわけですか。」

「そうだ。しかし、防弾板は硬すぎてスクープビームでは持つていけない。ビーム攪乱幕も持つて行ける量に制限があるので、相手の攻撃に対して危険な作戦になる。」

「はい。分かっております。」

「相手が強く反撃してくるようならば、できるだけ時間を稼ぎながら撤退しろ。あくまでも敵を分散させ、下の部隊を支援することが目的だ。撤退に関して冷静な判断が必要だ。ガジメならできると信じている。」

「分かりました。第111分隊は、ラフォーレ上部より侵入し、敵を挟撃します。」

「頼む。うまくやれば、下の部隊の損害をかなり減らすことができる。」

ガジメは、第111分隊の隊員に命令を伝える。

「ゼクール、ゴモ。私といっしょに屋上の入り口から建物への侵入を試みる。無理だと思ったらすぐに下がるぞ。ゾロモは撤退が必要な場合に援護できる位置で待機しろ。パドはゾロモの援護。他の隊員は、なるべく近くの身を隠せる場所のそばで待機しろ。」

ガジメ、ゼクール、ゴモが屋上の傍に行く。ガジメが屋上の上に誰もいないことを確認して、3体が屋上の探索を開始する。ゼクールとゴモがガジメに報告する。

「誰もいません。」

「誰もいないようです。」

「こちらもだれもいなかった。あそこが下への入口のようだ。ゴモはここで待っていてくれ。俺とゼクールが中に入って様子を探ってみる。この扉は開けておくように。」

ゼクールとゴモが返事をする。

「はい、行きましよう。」

「わかりました。待機します。」

入口の前まで来ると、ゴモが扉を開けて、そのまま横で待機する。ガジメとゼクールが左右から内部をのぞき込む。ビーム攪乱幕が上昇してきたのか、薄っすらと煙っていたが誰もいなかった。ガジメがゼクールに命じる。

「これから突入する。ゼクール、後ろを頼む。」

「わかりました。」

2体は階段を降りて行った。6階について、6階を探索したがだれもいなかった。大きな扉があったので、ゼクールが開けて、ガジメが様子を見た。中には通信装置のようなものやソファアがあったが、誰もいなかった。2体は警戒しながら入って行った。ゼクールがガジメに話しかける。

「ここが、やつらの指揮所でしょうか。」

「それにしては装置が少ない。前線の監視設備じゃないか。とりあえず壊しておくか。」

「そうですね。そうしましよう。」

2体は監視装置を破壊した。そのあと、ガジメは階段まで戻り、バンクスに屋上入り口の確保を、他の隊員には6階まで来るように命じた。

監視装置が破壊されたことによるエラーがここに届いた。装置からの最後の信号を確認すると、外部からの力で破壊されたようだった。そのため、3階の店の中に隠れているりとと、4階の階段の踊り場の脇にいるまりに連絡を取った。

「りとちゃん、まりちゃん、今どこにいるの。ホールの機械が誰かに壊されたみたい。り」とが答える。

「私は3階。そうか上から入って来たんだ。たぶん、あいつら。」

「私は4階。どうする。」

りとは二手に分かれたことを後悔したが、それより今できる対処方法を考える事にした。

「このままだと、まりが挟み撃ちになる。ここ、防衛線の設置が終わるまであとのくらいかかる。」

「えーと、あと40分ぐらい。」

「そう。40分なら私がかするから、まりは窓から逃げて。」

「とりあえず、3・5階の先頭のスクーパーズをもう1回だけ攻撃してから、上にながってみる。」

「やめて、一人じゃ危ない。」

「大丈夫。いざとなったらビーム攪乱幕を思いっきり撒いて逃げるわ。ラフォーレの中なら、目をつむっても動けるから。」

「無理はしないでね。窓側に退路を確保しておくようにしてね。」

「わかったわ。」

ここも2人に伝える。

「東急プラザの攻撃装置は設置が終わったから、いつでも撤退の援護ができるよ。だから、逃げるときは連絡してね。」

「ここ有難うね。じゃあ、りと、行こう。」

「うん、わかった。退路の確保を忘れないで。」

3・5階のスクーパーズの先頭見張りが声を上げる。

「4階に人影です。」

第123分隊分隊長が命じる。

「上の隊員は退避散開しろ。」

その命令と同時に散弾の攻撃があった。攪乱幕で散弾が威力が弱まり、サイコバリアーによってだれも怪我することはなかった。分隊長が攻撃を命じる。

「先頭の見張りは同時攻撃。スロープの作業班は下がれ。」

人影は見えなくなっていたが、3体つつスクープビームを発射した。人間には届いていないようだった。分隊長が前方の隊員に問いかけた。

「みんな無事か」

「全員無事であります。」

「そう良かった。これならば行けるぞ。作業再開だ。」

「はい。」

「見張りは、注意を怠るな。早く見つければ、損害を出さずに済むんだ。」

ただ、3階では異変が起きていた。北側を制圧に行った隊員の連絡が1体また1体と途絶えて行った。第12小隊小隊長から第1中隊中隊長に報告が言った。

「3階南側に行った隊員の連絡が次々に途絶えています。」

棒人間がいることは明らかだった。中隊長は多数で制圧に向かうことも考えた。

「フロアには人間の形をした模型がたくさんあり、攪乱幕の中では敵の発見が困難です。」
この報告を聞いた中隊長は考え直した。

「人間の模型なんて気味悪いな。おとりを配置するとは、初めからここを戦場にする予定だったのか。うかつに誘いに乗らない方がいいか。」

そのため、ビル全体の制圧を優先させ、3階南側の敵は封鎖して対処することにした。

「防弾板を通路南側に配置しろ。1体用の防弾板2組が前に出て監視しろ。」

竹下通りを進んできた作戦、うまくいった作戦と基本的に同じ作戦を指示した。

第111分隊が6階のホールに集合した。ガジメが命じる。

「これから下に降りる。ゾロモ、パド、イワタはここに残れ。もし、射撃手がやって来たら場合によっては挟み撃ちにする。ただ、棒人間だったらとにかく逃げろ。閉ざされた場所で敵う相手じゃない。少しでも気を引くことができればそれで十分だ。相手が逃げた場合でも深い追いはするな。わなの可能性もある。」

3体が返事をする。

「わかりました。」

第112分隊から編入してきた3体にも告げる。

「これから、あの2名にぶつかる可能性が高い。」

「はい。」

「大丈夫か。」

「大丈夫であります。早く、分隊の仇を取りたいであります。」

「そうか。なら、安心だ。しかし私の指示には従うように。」

「はい。無理して勝てる相手でないことは身にかけています。連携を崩さず、一緒に攻撃することが重要であります。」

「その通りだ。他の隊員も冷静に対処するように。我々の目的は、相手を倒すことでなく、現在、3.5階にいる本隊の前進を助けることだ。」

隊の全員が答える。

「わかりました。」

ガジメは隊員の顔を見渡してから、命じる。

「出発だ。」

3体を残して、第111分隊は階段の方へ下りて行った。

まりは、6階にいるスクーパーズが下りてくることを予想して、5階のファッションの店のマネキンに隠れて、階段の様子を見ていた。すると、階段を下りていくスクーパーズが見えた。列が途切れると、まりは、りとに連絡した。

「りと、いまスクーパーズが下に降りて行ったわよ。」

「ありがとう。3階階の北側にいる。南から北側に行くときに何体か倒したけど追ってこない。」

「無理をしないでね。」

「わかっている。まりは裏原に脱出して。私は、もう少し時間を稼いでからにする。」

「わかったわ。あつ、逃げるときには連絡して、裏原からビーム攪乱幕を撒くから。」

「ありがとう、そうする。じゃあ、裏原で。」

「裏原で。」

二人は連絡を切った。まりは自分の服がスクーパーズに占領されて、台無しになるかもしれないのがいやだった。

「とりあえずホールに戻って、自分の服を持って行こう。」

まりは、ホールに向かうために階段を上がっていった。

ホールの中では、ゾロモ軍曹が置いてあった人間の服をかぶっていた。狙撃手として、服を着れば迷彩になりスクーパーズであることがわかりにくくなると思ったこともあるが、興味もあった。イワタに話しかける。

「どう、この格好。」

「えっ。どうと言われましても。」

「可愛い？」

「えっ、はい。可愛いであります。」

「全然そうじゃなさそうね。パド、どう。」

「人間は何で、服を着るんでしょう？」

「さあ、温度調節のためじゃない。他の星にも服を着ている生命体がいたと思うわ。」

「なるほど、生物として未進化というわけですか。」

「逆に、服を着るようになって退化したという話もあるみたい。」

「そうなんですか。じゃあ、なんで服を着るようになったんでしょう。」

「わからないけど、着ると自分の雰囲気が変わるのは面白いわ。」

ゾロモは鏡を見ながら言った。そのとき、入り口から音がした。人間の声のようだったが、翻訳機のスイッチを入れていなかったため、何と言っているか分からなかった。ゾロモが最初に音に気付いた。テレパシー通信がなかったので、物陰の方に移動しながら叫ぶ。

「敵よ！隠れて！」

隠れた後に、入り口を良く見てから叫ぶ。

「敵射撃手が入り口付近にいる。」

パドとイワタも物陰に隠れる。入り口付近には、服を持った射撃手が立っていた。パドがゾロモに対応を助言する。

「軍曹、ビーム攪乱幕のタンクを撃つて下さい。」

「わかったわ。」

ゾロモがタンクを撃つと、攪乱幕が部屋に拡散していった。パドがガジメに連絡する。

「隊長、部屋に射撃手がやってきました。ビーム攪乱幕を張って、しのいでいます。」

「わかった。こっちも棒人間が攻撃してきて対処中だが、何体かそっちに向かわせる。できれば、射撃主を引きつけていてくれ。でも、無理はするな。無理なら脱出してもかまわん。そのときは、連絡だけはくれ。」

「わかりました。」

通信を聴いていたゾロモが指示をする。

「連携を取りながら、入口に向かうわよ。撃ったら、すぐに奥に下がるわよ。」

パドが言う。

「軍曹、待ってください。」

「なに？」

「軍曹のビームも強力ですが、攪乱幕のなかでも向こうの銃の方が有効射程が長い可能性があります。特に、強力な方は。」

「そうかもしれない。戦艦の装甲を破るぐらいだから。でも、どうするの。」

「強力な方が単発ですから、動けばかわせます。2人で敵を確認しますから、上にたくさんあるものを、反スクープビームで加速して落としてください。それで、相手の動きが止まったら、3人で攻撃しましょう。」

「さすが、パドね。」

「いくぞ、イワタ。発見したらすぐ敵の横に動くんだ。下がるんじゃないぞ。散弾ならそれでも大丈夫だか、強力な方だとやられる。」

「わかりました。」

この少し前、まりがりとに連絡を取っていた。

「スクーパーズが6階のホールに居るわ。」

「大丈夫？」

「うん、まだ、見つかっていない。」

「わかった。そのスクーパーズは放っておいて、裏原に逃げて。」

「でも、スクーパーズの1体が、私の服を着てたの。」

「そうなんだ。人間の服に興味があるんだ。」

「文化を奪いに来たのよね。私の服も選んでくれるのかしら。私の服、スクーパーズが着ても結構似合っていた。」

「まりの服、可愛いから。でも、今は逃げないと。」

「わかった、危なくなったら逃げる。りとも無理しないでね。」

「うん。ことこの準備が完了したら、すぐに逃げる。」

りとは、なんとなくまりのことが不安になった。それで6階へ向かうことにした。まりは、自分

の服に興味を持ったスクーパーズとならば話し合えないか、試してみる誘惑に駆られた。そこで、下の階から女物と男物の服を取ってきて、スクーパーズに見せてみることにした。そして、服を持ってきて入り口に立って、

「スクーパーズさん、この服も可愛いわよ。」
と声をかけた。そのとき、ゾロモに見つかったのである。

りとは、注意しながら階段の方に近づいた。踊り場には防弾板が設置してあった。先頭にいる2体のスクーパーズに見つかったが、ルナ銃で攻撃した。防弾板の後ろからスクープビームが同時に何回も発射された。今までなら一度下がるところだったが、まりのところに行くために、下がるわけにいかなかった。前に出ている1体用の防弾板を思い切り蹴飛ばすと、その防弾板の影に隠れて進み、主防弾板を越えることに成功した。スクーパーズたちは、主防弾板の内側に人間が現れて、驚いて止まってしまうもの、逃げだすもの大混乱だった。ただ、4階の3体のスクーパーズは落ち着いて、攻撃態勢を取ろうとしていた。

「あいつらか。でも今は、まりと合流しないと。」
そう言うと、ホースの先のタンクから、ルナ銃のエネルギーでなくビーム攪乱幕を、その3体の前に噴射した。そして、その横をすり抜けて上に向かった。

ガジメたちの方は3.5階北側にいると推定される棒人間に対処するために、4階で打ち合わせをしていた。しかし、3.5階の踊り場に対して急に攻撃があり、棒人間が現れたため、部隊が混乱しているのが見て取れた。そしてガジメが、

「ゼクール、ゴモ、階段のわきに移動、攻撃準備。」

と指示した。階段のわきに隠れながら、下からゴモ、ゼクール、ガジメの順に垂直に並んで、発射の機会をうかがった。棒人間と目が合うと、棒人間が突っ込んできた。ガジメが、

「射撃準備。」

と指示した瞬間、弾でなくビーム攪乱幕が撒かれ、前が見えなくなった。そのため、3体が少し下がると、棒人間は横を通って、階段の上の方に飛んで行った。ガジメが叫ぶ。

「追うぞ。」

ゼクールが答える。

「上の隊員が危ない。」

ゼクールは他の2体を引き離して、棒人間を追った。ゴモがガジメに言う。

「いま上に向かったザトムに、棒人間が向かったと連絡しました。」

「すばやいな。距離を十分に取るように言ってくれ。」

「わかりました。」

りとは5.5階を過ぎるとき、両側からスクープビームの攻撃があったが、距離があったため、かすることもなく背中の後ろを過ぎて行った。

「今は、まりのところに向かわないと。」

りとは、そのまま上に向かって行った。6階に着くか着かないところで、まりの悲鳴が聞こえた。ホール入り口に急ぐと、まりが天井にあった照明機材やその支えの下敷きになっていた。

「まり、まり、大丈夫？」

と叫びながら、まりの傍でボードを降りた。手に持っている棒のようなもので、照明の支えを切り裂き、照明機材をまりからどけた。そして、まりにまた尋ねた。

「まり、大丈夫？」

「この服、スクーパーズにも似合うと思うんだけどな。」

「まり、何を言っているの。痛くはない？」

「少し痛いけど、大丈夫。」

「良かった。じゃあ、脱出するわよ。」

「ごめんね。」

りとは、あたりを見回した。ホール側は濃いビーム攪乱幕で満たされていて、通路側に流れ出ていた。いつまた攻撃があるかわからないので、まりと自分のボードを通路側のまりの盾として置いた。階段の出口に10体ほどのスクーパーズが隠れていた。ホールにもスクーパーズがいることは明らかだった。りとは、ここに連絡した。

「まりがケガしたの。裏原に連れて行くから、もう時間は稼げない。」

「わかった。防衛システムを応急で稼働するから、なんとかなるよ。それより、まりは大丈夫。」

「うん、なんとか大丈夫みたい。」

「わかった、システム稼働を急ぐね。」

「ありがとう。」

ガジメがゾロモに指示をする。

「ゾロモ、合図を出したら牽制攻撃をしてくれ。そっちは攪乱幕が濃いから、無理はしなくてもいい。棒人間が気を取られているうちに、こっちが突っ込む。」

そのとき、りとのタンクが階段出口の方に飛んできて、スクーパーズを攻撃した。弾は当たらなかった。

「くそー、牽制か。こちらの攻撃はお見通しか。」

ガジメが残念がるが、ゼクルが答える。

「しかし、今が最大のチャンスであることは変わりません。突撃するのは、隊長と私とゴモにしましょう。3体ならば、タンクからの攻撃はかわせます。」

「そうだな。今が最大のチャンスだな。その3体で突撃する。後の隊員はここから援護射撃をしてくれ。」

ガジメはそう指示をして、作戦開始を命じる。

「ゾロモ、牽制攻撃を開始してくれ。」

りとは、階段付近のスクーパーズが気になって、ルナ銃で攻撃してみたが、後ろのホールを警

戒しながらの攻撃であり、前のスクーパーズも階段の壁に隠れていたため、有効な攻撃にはならなかった。

「どうしよう。攪乱幕を使うにしても、まりといっしょに屋上に上がるには、あっちのスクーパーズをなんとかしなきゃ。まりを置いて、攻撃に行くわけにもいかないし。」

そのときである。ホールの方からスクーパーズが近づいてくる気配がした。そして、攪乱幕の中から攻撃があった。攪乱幕が濃いため、それほど有効ではないが、まりに当てさせるわけにはいかない。棒で払うとともに、タンクを自分の方に戻した。そして、タンクをスクーパーズがいる方向に進ませた。それがスクーパーズに当たり、1体が飛ばされ床に落ちたようだった。しかし、そのとき階段から3体が突入してきた。再度、タンクを戻し、中央のスクーパーズに進ませたが、それはかわされた。そして、後ろからルナ銃を発射するが、それも上昇してかわされた。

「あの3体ね。」

1体がビームをかわすために少し遅れ、左右の2体が同じくらしいの距離を進んできた。りとは、タンクを戻してホールを牽制し、まりのボードを左手に持ち、まりの前に出る。まず、少し後ろの中央のスクーパーズから撃ってきた。距離があったので、棒でなんなく払うと。今度は中央と左のスクーパーズが同時に攻撃してきた。左のビームはまりのボードで、中央のビームは棒で払おうとしたとき、一番接近していた右のスクーパーズから攻撃があった。ビームがりと命中しようとした瞬間、ビームを右足で蹴り飛ばして左のスクーパーズに命中させた。それと同時に右足の後ろに移動してあったタンクからルナ銃を発射した。右のスクーパーズはそれをぎりぎり避けたが、そのため壁に当たって、次の攻撃を避けるために上昇して下がっていった。りとはホール側の牽制のためにタンクをホールの内側で大きく一周させた。前の3体はすでに階段の近くまで撤退していたが、その後ろに別の3体が出てきていた。ただ、動きは遅かった。1体をルナ銃で倒し、もう1体はタンクの動きを見てルナ銃の射撃をかわしたため、タンクを回して、タンクを棒に結んでいる細いホースをスクーパーズに巻き付けて切断し、それを見てすくんでいた1体を再度ルナ銃で倒し、3体を消滅させた。そして、再度ホール側の牽制のためタンクをホールの内側で1周させた。

他のスクーパーズは一度下がりがり、階段とホールの奥にいるようだった。りとはまりに言った。

「リア銃でホールの天井を撃てる？階段の方にはあの3体がいるから逃げるのが難しそう。」

「ラフォーレをこわしちゃうの。」

りとは、真剣な目をして、まりに言う。

「それしかない。」

まりは、自分が活躍したホールを壊すのはいやだったけれど、こんな状況になったのは自分の責任ということもわかっていた。

「わかった。やってみる。」

リア銃を持ってエネルギーの充填を開始した。エネルギー充填が終わると、リア銃を天井に向け

て、まりが静かに思いを込めて言う。

「いくわよ。」

そして、リア銃からエネルギーを発した。ビーム攪乱幕の影響で天井に到達したときにはビームの威力は弱くなっていた。また、最初に建物を強化したため、天井は真っ赤になったが、壊れなかった。そこで、りとはタンクからガスジェットを下向きに発射し、タンクを加速して後ろから天井にぶつけた。そして、タンクを反転させルナ銃を放った。すると天井に直径1メートルぐらいの穴をあけることに成功した。りとは前と後ろにビーム攪乱幕を散布しながら、まりをりとのボードに乗せ、左手でまりのボードを持ち、まりを支えながら、天井の穴に向かった。穴を覗いていたスクーパーズがいたが、蹴飛ばして外に出ることができた。外に出ると裏原側からビーム攪乱幕の弾が発射され、りとの後ろを攪乱幕で隠していた。

「ことこね。ありがとう。」

りとはそう思いながら、明治通りを渡った。後ろからスクーパーズ5体が追ってきた。りどが到着すると、ことこねはファンを動作させ攪乱幕を払うと共に、東急プラザに設置してあった散弾の発射装置を使って撃退を開始した。2体に命中し落ちて行った。2体はラフォーレに戻っていった。りどたちは、何とか裏原側に渡ることができたが、この日ラフォーレが陥落し、明治通りより西側の原宿はスクーパーズの支配下におかれることになった。

この戦闘をホールにいたスクーパーズ側から見ている。ビーム攪乱幕が満ちたホールの中で、手筈通り、パドとイワタが接近する間に、ゾロモは射撃手の上に移動した。射撃手は銃を下に向け、パドとイワタに話しかけているようでもあったが、畏の可能性もあり、作戦を続行することにした、上にあるものをスクープビームを逆に使い、加速して落とした。大きな音が出て、射撃手の大きな声も聞こえた。攪乱幕とガレキのために良く見えなかった。射撃手にとどめをさすべく近づくと、そこに棒人間が立っていた。最初に発見したゾロモが叫ぶ。

「棒人間がいるわ。」

3体は部屋の奥へ下がっていった。パドは対応を考えていた。

「近接戦闘になると、棒人間はやかいだな。」

「そうね。」

ゾロモも同意した。すると、ガジメから牽制攻撃の指示が来た。

「牽制攻撃の準備よ。いい、あまり近づきすぎないように。」

ゾロモがそう言った後、3体の位置取りを指示した。そして、ガジメから牽制攻撃の指示が入ると、3体が距離を測りながら、棒人間への接近と離脱を繰り返し、同時攻撃による牽制攻撃を開始した。パドがゾロモに話しかける。

「直撃はありませんが、こっちに気を取られて牽制はうまく行ってます。」

「黙って、攻撃に集中し・・・」

ゾロモがすべて言えないうちに、タンクが突入してきて、ゾロモに当たって、ゾロモが後ろに飛ばされて行った。パドがゾロモに飛び寄る。

「軍曹。大丈夫ですか？」

ゾロモは打撲はあったが、致命傷というわけではなかった。

「サイコバリヤーを破ってきた。でも大丈夫・・・痛い。」

動こうとしたが、痛くて動けなかった。ゾロモが申し訳なさそうに言う。

「私のことは放っておいていい。パド、悪いけど、指揮を執って牽制攻撃を続けて。隊長たちの攻撃が始まっていると思う。」

パドが答える。

「わかりました。軍曹はここで、休んでいてください。イワタ、行くぞ。」

「タンクの動きに気を付けて。」

「わかりました。」

再度、2体が人間の方に接近して行った。しかし、近づこうとすると、タンクが高速に回って来た。パドが叫ぶ。

「イワタ、下へ移動だ。タンクが来る。」

2体は下に避けると、すごい音がしてタンクが過ぎて行った。しかし、接近して牽制することができないでいた。パドが言う。

「くそー、牽制もできないのか。」

そして、またタンクが回ってきた。行きあぐねていると、ホール入り口から大きな音がして天井が真っ赤になりガレキがバラバラ落ちてきた。ゾロモのサイコバリヤーの力が心配だったため、ゾロモのところまで下がって、ゾロモに覆いかぶさって守った。

「パド、ありがとう。」

その直後、天井の赤くなった部分に、棒人間のタンクが当たって穴があいた。そして、棒人間と射撃手はその穴から逃げて行った。すぐに、ガジメ、ゼクル、ゴモが追って行ったのが見えた。パドはイワタに命じる。

「お前はここに残れ。」

そう言うと、天井の穴に飛び込んでいった。イワタも怖かったが、パド一人に行かせるわけにはいかないと考えた。

「パドさん、僕も行きます。」

イワタも穴に向かっていった。穴から出ると、そこは外だった。空には、裏原から撃たれているビーム攪乱幕の筋が何本も伸びていて、先頭に行く人間を覆っていた。先の3体はその煙の中を追って行った。しかし、途中で横から強い風が吹き、ビルの窓から散弾が飛んできた。パドはそれを避けるために急降下した。イワタもそれに続いたが、散弾はビルの各階に設置してあったため、かわし切ることができず、2体に命中して地面に落ちて行った。

この戦闘を階段にいたスクーパーズ側から見てみる。ガジメが、ゾロモによる牽制攻撃の開始を確認して命じる。

「ゾロモが牽制攻撃を開始した、ゼクルルが左、ゴモが右で、行くぞ。」

そう行つて、ガジメが先頭を切つて突入した。ゼクルルが全速で突撃し、ゴモもそれに続いた。途中で、ゾロモが負傷したことが分かったが、3体とも当然のように突入を続けた。その後ろで第112分隊から編入した3体が突入を開始した。

「112分隊の敵討ちだ。」

「やめろ。分隊長の指示に従うんだ。」

バンクスが制止したが、3体はさつき自分で言った言葉も忘れ、突撃して行つた。棒人間のタンクやタンクからのビームが、中央のガジメを襲う。ガジメは上昇して避けたが、2体に遅れてしまった。それで2体を掩護するために、その位置からスクーププビームを放った。それははじかれた。2体はガジメが次に撃つタイミングを熟知していた。ゴモはそれに合わせることにした。ゼクルルは棒人間が2つのビームを払うために態勢が乱れたところを狙うことにした。ガジメとゴモがビームを発射した、ゼクルルはりとがどう動くかを見ながら、最も近い位置から正確なタ イミングと狙いで、スクーププビームを発射した。

「これなら、避けられないだろう。」

ゼクルルは勝利を確信した。ところが、そのビームが脚のブーツで蹴られて、ゴモに当たってしまった。さらに蹴つた脚があったところから、ビームが飛んできた。

「あんなところに、タンクを隠していたのか。」

不意を突かれたが必死に横によけて、ビームには当たらなかった。しかし、勢い余つて壁に衝突してしまった。この状況にガジメが無理と判断し、ゴモの方に向かいながら、命じる。

「撤退だ。」

ゴモも跳弾だったこととビーム攪乱幕の影響で、なんとかサイコバリアーで蹴り返されたゼクルルのビームに耐えることができた。そして、速くはなかったが、飛んで撤退した。ゼクルルはゴモの後ろに付いてカバーしながら撤退した。棒人間がホールの方を牽制したため、追撃はなかった。しかし、第112分隊から来た3体が棒人間に突撃して行つた。

「やめろ、お前らでは無理だ。」

ガジメが叫んで制止したが、もう間に合わなかった。1体がビームで、もう1体は第112分隊でエースでぎりぎりビームをかわしたが、巻き付けられた細いホースで切断されて消えてしまった。

「なんてひどい奴だ。」

その隊員の断末魔の声を聞いたゼクルルは、そう思ったが、残りの1体を救出するのは無理と分かっていた。

「ごめん。」

と心の中で呟いて、全エネルギーをサイコバリアーに投入して、ゴモをカバーしながら後退していった。棒人間の銃にサイコバリアーが通用するかどうかはわからなかった。しかし、棒人間は第112分隊の残りの1体をビームで倒した後、後ろのホール側を牽制したため、第111分隊の3体は階段のところまで無事に撤退できた。様子をうかがっていると、射撃手がビームで天井を破壊して、棒人間のボードに射撃手を載せて、撤退しようとしているのが見えた。ガジメが命令を下す。

「ゼクール、危険だが射撃手を運んでいる今が一番のチャンスだ。もう1回行くぞ。」

ガジメが逃げる二人を追って行った。ゼクールも再度ダッシュでガジメを追った。そして、

「隊長、先行します。」

と言いながら、天井の穴にはガジメより先に飛び込んでいった。そして、ガジメの後ろにはゴモも続いていった。外に出ると、射撃手を支えながら、素早く飛べない棒人間が前に見えた。

「追いつける。」

そう感じて接近して行った。すると、裏原の方からビーム攪乱幕の弾が発射され煙が長くたなびき始めた。それでも、ゼクールは全速で追った。しかし、2名が東急プラザの屋上に達すると、強風が吹いて攪乱幕が飛ばされて、そのビルの複数の窓や壁の部分が開いて、散弾が発射され始めた。ガジメが指示する。

「散開」

ガジメとゼクールは上昇して、散弾をかわしながらフオーレまで何とか戻ることができた。多少かすったかもしれないが、サイコバリアーで無傷だった。撤退の途中、ゼクールは、追ってきたらしいパドとイワタが落下していくのが見えた。散弾でも多数直撃するとサイコバリアーが持つかわからないため、散弾をかわすのが精いっぱい、2体を追うことはできなかった。ガジメは一度、立ち止まったが、やはり撤退していった。ゴモは逆に戻った方が危険と思い斜め横下方に進路を取って進んで行き、明治通りの東側になんとか到達して、建物の中に隠れた。

りとは東急プラザの屋上でまりを下すと、まりに尋ねた。

「まり、具合はどう？」

「ちょっと痛いけれど、大丈夫。」

「本当に？かなり重いものが落ちてきたみたいだけれど。」

「うん、落ちるといふより飛んできたみたい。あの時は、もうだめだつて思った。でも、大きな怪我もしていないし、打ち身で少し痛いけど、大丈夫よ。」

「アマツマラの力かな。でも良かった。まりに何かあったら、どうしようかと思った。」

「心配をかけてごめんね。」

「ううん、まりが謝ることはない。もともと私が始めたことだし。PARKで休ませてあげたいんだけど、ことこのことも心配で、まだここを離れるわけにはいかなくて。」

「わかってるって。ことを準備不十分のまま、置いてはいけないわよ。」
「ことこの屋上が上がってきた。」

「まりちゃん、大丈夫。」

「うん、少し痛いけれど、もう全然平気。」

「良かった。なんかね、私たちの体の周りにバリヤーが張られているみたいなの。」
りとが驚いて言う。

「スクーパーズのバリヤーが？」

「うん、スクーパーズと同じようなバリヤーが、私たちにも張られてきているみたい。」

「そうなんだ。」

「良くわからないけど、バリヤーを作るための情報がアマツマラから私たちの体に投射されて、体からバリヤーが出ているみたい。」

「スクーパーズたちがバリヤーを作る情報がアマツマラに取り込まれて、同じようなものを私たちの体に取り込ませているってこと？」

「りとちゃんの言う通りかも知れない。バリヤーの情報がどこから来たかが不思議だったけど、スクーパーズの情報を取り込んでいるのかもしれない。」

「そのうち、スクーパーズのビームも撃てるようになるのかな。」

「わからないけれど、不可能じゃないかも。」

「スクーパーズのビームはあまりいらさないけど、バリアーは役立ちそう。」
まりが起き上がり、座って冗談を言う。

「そのうちスクーパーズの模様が私たちの体に浮かんできたりして。」
りとは、冗談でもそれはきつい。

「まり、冗談でもそれはきつい。」

「体自体が変わることはないんじゃないかな。」
「まりが答える。」

「でも、結構可愛く見えるかもしれないわよ。水着姿がとってもキュートになるかもしれない。」
「りどがあきれて言う。」

「もう、まりー。」

「冗談よ、りど。そんな体になったら、うーん、やっぱり生きていけないわ。」

「でも、そんな冗談が言えるぐらい元気でよかった。」

「うん、だいぶ元気になってきた。心配かけてごめん。」

「全然。元気ならばそれでいい。3人はいつもいっしょじゃないと。」
「ここが同意する。」

「りどちゃんの言う通り。3人いっしょがいい。」

「まりが答える。」

「そうね。」

りどがどこに尋ねる。

「あとのくらい時間が必要？」

「20分ぐらいかなー。」

「わかった。あと20分ここで見張っている。」

「まりも同意する。」

「私も。ビーム攪乱幕が使えないなら、散弾が一番役に立つわ。」

「まり、大丈夫？無理はしなくていいよ。」

「大丈夫だって。」

「わかった。じゃあ、スクーパーズが明治通りを超えてきたら、また私が突っ込むから、援護をお願い。」

「ここがりとを止める。」

「りとちゃんも、ここからルナ銃で迎撃して。連射もできるはずだから。」

「そうだね、こここの言う通り。それにスクーパーズは今日は渡って来ない気がする。いずれにしろ、ルナ銃をもっと上手に使えるようにならなくっちゃ。それじゃあ、ここ、私たちはここで守っているから防衛線の構築をお願い。」

「わかったー。」

「ここはそう言って、ボードに乗って移動して、明治通りの防衛線の散弾自動発射装置の設置と調整を再び始めた。屋上の台に上ったりとがまりに言う。」

「あいつらが、ラフォーレの上からこっちを見ている。」

「うん。」

「まだ、あきらめていないって感じ。」

「うん。」

「明治通りを越えさせないようにしないと。ここを越えさせたら、PARKまであつという間。」

「うん。」

「まり、何を考えているの。」

「ごめんね。ただ、私の服を嬉しそうに着ているスクーパーズを見ていたら、分かりあえるんじゃないかなと思って。」

「またそんなことを考えているの。アメリカでは何万人も死んでいるんだよ。」

「人間の戦争だって、何百万人も死んだ後に、分かりあえることもあるし。」

「そうだけど。でも、今は。」

「わかっているわ。今はスクーパーズの前進を止めることね。」

「そう思う。とりあえず、まりは休んでいて。スクーパーズがまた来るようだったら呼ぶから。」

「りと、ありがとう。」

そう言って、まりはまだ少し痛そうに、また横になった。りとはラフォーレの屋上のスクーパーズを見ていた。

一方、ラフォーレの屋上では、ガジメが状況を確認していた。

「ゴモ、パド、イワタの状況は分かるか。」

ゼクールが答える。

「私も、必死に弾をよけていたため、詳しい状況はわかりません。パドとイワタは弾が当たって落ちて行ったことは確認しています。ゴモについては分かりません。ただ、あれぐらいでゴモがやられるとは考えにくいです。」

「パドも一生懸命弾をよけながら俺を呼んでいたことはわかった。だが、助けることはできなかった。隊長失格だな。」

「私にも聞こえました。しかし、隊長も深く気に病まないで下さい。隊長の判断は間違っていないかっただと思います。」

ガーチューン連隊長とアルドア技術参謀もラフォーレ屋上に上がってきた。そして、ガーチューンが第111分隊隊員にお礼を言った。

「第111分隊隊の活躍で、この建物を占拠できた。そして、そのための第1中隊の損害が最小限で済んだ。感謝する。」

「いえ、連隊長の見事な作戦のおかげです。ただ、行方不明者を出し、結局、第112分隊が全滅してしまったことが残念です。」

「第112分隊の敵討ちのためにも、王女様を助け出す。」

「はい。」

向かいのビルの屋上でこちらを見ているりつを見ながら、ゼクールがガーチューンに尋ねた。

「連隊長は、王女様は生きているとお考えなんですね。」

「ああ、殺す意味がないだろう。たぶん近いうちに王女様が生存していることを我々に見せつけて、こちらを戦に誘い込むと思っている。」

アルドア技術参謀はその戦いが厳しいものになると考えていた。

「さっきの様子をみると、道の向こう側の建物には、かなりの攻撃兵器が設置されていると考えられます。」

ガーチューンが同意する。

「そうだな、地獄への道だな。それに突っ込ませるためには、王女様で誘うのが一番だ。」
その時、ゼクールが叫んだ。

「王女様だ！」

ガーチューンが尋ねる。

「どこだ。」

「棒人間の隣です。」

「アルドア、本物の王女様か確認できるか。」

とつさに、携帯式の分析器で覗いたアルドアが答えた。

「はい、生体信号はスコーパーズのもので、はい、パターンは王女様と一致しています。」

ガーチューンがつぶやいた。

「わかりやすい奴らだな。やっぱり、俺たちを誘っているのか。」

その後、王女様らしきスコーパーズは、棒人間に引き下ろされたようだった。一目で王女様と確信していたゼクールは、安否が分からなかった王女様が生きていることを自分の目で確認することができて、心の底から嬉しかった。王女様を助け出すためならば、危険を厭う気はなかった。そして進言する。

「連隊長、行きましょう。私たちが狩りの獲物にしたいならば、なってやりましょう。王女様を取り戻して、獲物の意地を見せてあげましょう。」

連隊長がアルドアに尋ねる。

「作戦は可能か？」

アルドアはすかさず答える。

「現在の戦力では無理です。」

「俺もそう思う。明朝には第3連隊が到着する。第3連隊と共同して、作戦を考えよう。」

「はい、私もそれが良いと思います。第3連隊の技術参謀のボナダ少佐は士官学校の同級で良く知っています。到着次第、第3連隊の技術参謀たちと共同で突破する方法を決めたいと思います。」

「わかった。今でも送れるデータはすぐにでも第3連隊に送っておいてくれ。」

「わかりました。我々も明朝までに作戦の案を考えます。」

作戦を検討するアルドアだったが、王女の居場所が不明で、攻撃を間違えると王女を巻き込んでしまうことが最大の懸念材料で、なかなか良い作戦が思い浮かばなかった。ゼクルルは今すぐにも突撃しなかった。しかしながら、歴戦の連隊長の判断を信用することにした。ただ、まだ防衛線の構築が完了していない状況で、ゼクルルの今すぐ突撃するという判断は実は間違っただけで、1日で半数近い兵員を失った第8連隊がそのことを知るよしもなかった。

この少し前に、みさとエビふりヤーは、歩いて東急プラザの屋上に向かってきていた。

「まりちゃん、大丈夫ですか？」

りとが怖い顔をしてみさに言う。

「みさちゃんは、ここに来ちゃダメ。」

「りとちゃん、怖いですが。まりちゃんが怪我をしたのが見えたですな。薬屋さんから、薬を持ってきたですな。」

まりが答える。

「みさちゃん、心配してくれて有難う。でも、ここは危ないから来ちゃだめよ。」

りとが怖い顔をしたまま言う。

「みさちゃんは、地下室に隠れてないと。」

「わかったですな。まりちゃんに薬を塗ったら帰るですな。」

仕方がないかと思いつながら、りとも普通の顔に戻って言う。

「ごめんね。今は、そうして。」

「わかったですな。打ち身みたいだから、湿布を張るですな。」

そう言いながら湿布を作って、まりに張った。まりが答える。

「すごい、気持ちいい。ほんと上手だね。」

「薬屋さんの本で、勉強したんですな。」

「さすが、みさちゃんだね。要領がいい。」

みさが、屋上にある台に上がって、りととの隣に並んで言う。

「あれが、スクーパーズですな。」

りとが呆れて言う。

「みさちゃんは、本当にマイペース。」

「りとちゃんもですな。」

「まあ、みさちゃんの言う通りかもしれないけど。ところで、みさちゃん、スクーパーズに狙われるようなことはしていない？」

みさは少し驚いて答える。

「な、な、なんでですか？」

「そんな感じがしただけ。スクーパーズの狙いは原宿ではなくて、みさちゃんかなと思って。」

「そ、そんなことはないですな。原宿のユニークな文化がスクーパーズの狙いと思うですな。エビふりヤーもそう思うですな。」

急に振られたエビふりヤーも戸惑いながら答える。

「そ、その通りでございます。みさ様の言う通りでございます。原宿には素晴らしい文化や人間がいつばいでございます。」

りとが答える。

「そう、素晴らしい人間。エビフライ星人でもそう思うんだね。」

りとはエビふりヤーの言葉で、素晴らしい人間なのか、宇宙人なのかはわからないけど、みさちゃんも狙いという思いを強めた。そして、みさを台から降ろしながら言う。

「どちらでもいい。絶対にみさちゃんを見捨てたりしないから。だから、私たちの言うことを聞いてね。」

「わかったですな。りとちゃんの言うことに間違いはないですな。」

「ありがとう。PARKに帰ると言っても一人で返すわけにはいかないから、もう少し待っててね。ことこの作業が終わったらいっしょに帰ろう。」

「はい、ですな。」

「いい子。」

りたとゼクルルが見合っている中、時間が過ぎて、ここが戻ってきた。

「作業終了!」

りたとまりが、PARKでの仕事が終わったときのように返事をする。

「お疲れ様!」

ここが説明する。

「防衛線に、たくさんの監視装置や散弾の発射装置、煙を吹き飛ばすファンを付けたから大丈夫だと思うよ。これで、みんなPARKに戻れるよ!」

まりが感謝する。

「有難う、ことこ。PARKで休めるのは嬉しいわ。」

りとがことこに尋ねる。

「防衛線の内側の監視はどうなの。」

「うーん、どうなるかな。スクーパーズがたくさんいればわかるかな。1体、2体が静かにしているかわからないかも。」

「そうか、その場合は個別に対処するしかないか。」

「うん、でも、PARKは最終防衛拠点としてかなり強化してあるの。散弾の威力も強力なものにしてあるから、そう簡単にはやられないよ!」

「そうだね。じゃあ、PARKに戻ろうか。まりはどう。動ける?」

立ち上がったまりが、ボードに乗ってみる。

「なんとか行けそう。」

「ほんと、大丈夫？」

少し飛んでみたまりがみさの方に向かって感謝する。

「大丈夫。大丈夫。みさちゃんの湿布が効いたみたい。」

「よかったですな。」

りとが提案する。

「じゃあ、みさちゃんとエビふりヤーは私がPARKまで運ぶから、まりとことこはボードで一緒に来て。」

りとは、ボードの前方エビふりヤーを首に巻いたみさを乗せて、急がずPARKへ飛んで行った。後には、まりとことこが付いて行った。りとが振り返ると、スクーパーズがこちらを見ているのが分かった。

それを見たゼクルルが言う。

「あいつら、奥の方へ飛んでいきます。」

ガジメが答える。

「今日はもう来ないと思ったのか。」

ガーチューンが同意する。

「明日決戦と言うことだな。エビふりヤー様もご一緒だったが、王女が傍にいたので何もできないんだろう。棒人間はかなり手強いということか。」

ゼクルルが同意する。

「スクーパーズを至近距離、多方向から同時に撃つても、防ぐことができます。あんな敵、見たことがないです。でも、刺し違えても絶対僕が倒します。」

ガーチューンが注意する。

「だが、主目的は、王女様の救出ということをお忘れなよ。」

ガジメが言う。

「大丈夫です。王女様の大ファンのことだからそれを忘れるわけはありません。」

「そうなのか。」

「はい、女神様のように崇めています。こいつの部屋には、王女様の写真だけです。王女様の等身大のフィギュアが出たら、年収と同じ額でも、きつと買うと思います。」

「それはそれで、困った話だな。」

ゼクルルが否定する。

「大丈夫です。王女様が幸せで、進みたい方向に進んでいけることが私の一番の幸せです。分はわきまえています。」

「そうか、分かった。信用している。」

「ただ、あいつを倒さないと、また多数のスクーパーズが犠牲になると思います。王女様を助けた後、可能であれば立ち向かいたいと思います。」

「うむ。それは私もそう思う。しかし、先走って犬死になることはないようにな。引くべきときは引け。」

「わかりました。」

ガーチューンは少し心配だったが、それは王女様救出の後にすることにした。

その時、遠くの方からガジメを呼ぶ声（テレパシー）が聞こえた。

「分隊長！分隊長！」

良く聴くと、ゴモの声に聞こえた。

「誰だ！ゴモか。」

「はい、分隊長、ゴモです。ビルからの敵の射撃があったとき、降下して前方に退避して、明治通りの東側に潜んでいます。」

「大丈夫か。けがはないか。」

「はい、大丈夫です。けがはありません。」

「それは良かった。パドとイワタのことはわかるか。弾が当たった後、行方不明なんだ。」

「残念ながら、わかりません。こちらでも、呼びかけてみたのですが。」

「そうか。わかった。救出したいが、その作戦は明朝以降になる。それまで、じっとしていてくれ。」

その時、ガーチューンが口を挟んだ。

「ゴモ、道の向こう側にて健在なんだな。」

「連隊長！？はい、そうであります。」

「この通りを渡れない状況では貴重な存在だ。申し訳ないが、道の東側を調査する任務を与える。その代わり成功すれば、連隊長として1階級昇進を推薦する。」

「はい、わかっております。私もこの連隊のナンバースリーです。昇進と関わりなく、あの敵を倒すために、自分のできることは何でもやります。」

「うむ。調査して欲しいことは、まず、防衛陣地に設置されている銃やビーム攪乱幕を吹き飛ばすファンの種類、数、配置だ。また、それらの銃に対するこちらのビームの有効性を知りたい。それが分かれば、明日の作戦を立てやすくなる。」

「わかりました、至急調査します。」

「王女様の居場所の調査もして欲しいところだが、敵に近づくことになるので危険だ。また、その時間もないだろう。敵がいない今、防衛線を徹底的に調査してくれ。連隊が渡ってしまえば、あとはこちらがかなり有利に作戦を進めることができる。」

「わかりました、全力で防衛線の敵の調査を行います。」

4人と1尾がPARKに帰り着くと、さゆみんが待っていた。

「みんな、おかえりなさい。」

りとは少し驚いたが嬉しそうに、まりは少し疲れた感じで、ここはエプロン姿のさゆみんの様子に何かアニメを思いついて、みさとエビふりゃーは普通に答える。

「さゆみん！ただいま。」

「ただいまです。」

「ただいまー。さゆみん、下宿の管理人さんみたい。」

「ただいまですな。」

「ただいまでございます。」

それを聞いて、さゆみんがことこの冗談に返しながら、まりを心配して尋ねる。

「はい、メゾンPARKへお帰りなさい。えーと、りとはちゃんは元気ね。まりちゃんは、疲れていそうだけれど大丈夫かな？」

「はい、少し疲れましたが大丈夫です。天井から物を落とされて、少し痛いけれど大丈夫です。」

「本当に、大丈夫なの？」

「体の周りにバリヤーみたいなものが張れるようになったみたいで、大丈夫です。」

「そうなの。アマツマラの力？」

「良くわかりませんが、ことこの話だと、そういう話です。」

「そうなの、ことこちゃん？」

「良くわからないけれど、スクーパーズの情報が取り込まれているみたいで、その力がアマツマラを通して使えるようになってきているみたい。アマツマラの色もカラフルに変わってきているのも、そのせい。」

アマツマラを改めてみたりとも同意する。

「ほんとだ。綺麗だけれど、怪しい色になってきている。」

みさがりとのアマツマラを見ながら言う。

「でも、綺麗ですな。スクーパーズと戦うと、もつときれいになるですな。」

まりが答える。

「さつきも、バリヤーの次にスクーパーズのビームが撃てるようになって、体の色もスクーパーズみたいになるんじゃないかって話しをしていたわ。」

さゆみんがまりに冗談を言う。

「最後はスクーパーズになったりして。」

「それは、きついわ。」

みさが慌てて否定する。

「そんなことはないですな。」

さゆみんが、進言する。

「やっぱりどんどん危なくなってきたし、みんなで逃げた方がいいんじゃないかな。逃げるならば、私も手伝うわよ。」

りとがみさを見ながら否定する。

「今の状況を見ると、たとえ逃げてもスーパーバズが追って来ると思う。やっぱり、地球から追いきれないと。」

ことこも、りとに同意する。

「明治通りの防衛線は、簡単に突破できないと思うよ。その間にどうするか考えようよ。」
さゆみんが話を変える。

「そうね。もう少し考えましょう。じゃあ、夕ご飯にしましょう。今日の晩御飯は、ステーキよ。」
ことが嬉しそうに定番のダジャレで返す。

「すごい。素敵。」

りとも同意する。

「さゆみんが作るには、ちょっと意外なメニュー。」

「みんな疲れているだろうと思って。」

「みさも、食べてみたいんですな。」

まりがみさに聞き返す。

「みさちゃん、アメリカ人だから、ビーフステーキはしょっちゅう食べているんじゃないの。」

「そつ、そうですな。でも、原宿のビーフステーキを食べてみたいんですな。」

「原宿のというより日本のね。和牛も美味しいわよ。」

「そうですな。和牛を食べてみたいんですな。」

まりがさゆみに聴く。

「アメリカンビーフということは何？」

「スーパーにあった最高級の松阪牛。スーパーのものは自由にお持ちくださいと書いてあったから持ってきちゃった。」

りとがおどろいて言う。

「すごい。食べたことないや、松阪牛。」

まりがりとに聞く。

「そうなんだ。いつもはどんなものを食べてるの。」

「うーん、おばあちゃんがタンパク質は豆からとるのが良いって言って、豆類が多いかな。後はお魚、肉は脂肪が少ないということで、鶏肉とかが多い。」

「健康的よね。」

「牛肉は好きだったと思う。小っちゃいころ、黒い肉が食べたいとか言ってたって。」

「黒い肉。そうか、鶏肉とか豚肉は白いからね。あははは。」

「ははは。そうかな。」

さゆみんが言う。

「おばあちゃん、りとちゃんの健康を考えていたのかな。」

「うん、それに頭も良くなるって。ならなかったけれど。それに、おかげで男の子に間違えられるような体形になっちゃったし。」

「そんなことはないわよ。すごい可愛いし、頭も私よりは良いし。でも、私より良くてもしかたがないか。」

「そんなこと。さゆみんは、何でもできて素敵です。」

「ありがとう。私にはりとちゃんの方が素敵だけれど。その話しは後にして、ステーキを焼きます。」

「じゃあ、まりちゃん、サラダを作るの手伝ってくれる。ことこちゃんは、食器を出してパンをお願い。」

みさがさゆみに言う。

「では、みさがエビふりやーとテーブルの上を片づけるんですな。」

「ありがとう。」

りとがさゆみに尋ねる。

「私は何をすればいい、さゆみん。」

「うーん、疲れていると思うから座ってて。」

りとが自分は頼りにされていないと思って、不満げに言う。

「えー。」

まりとみさも言う。

「本当に疲れたと思うわよ。休んでいて。りとが一番大変。」

「地下室のディスプレイで、りとちゃんの大活躍が見れたんですな。休んでいる方がいいですな。」

りとが答える。

「わかった。休んでいる。」

さゆみんが気を使って言う。

「スクーパーズがいなくなったら、みんなで料理を作ってパーティーをするから。そのときは、手伝ってもらおうわ。」

「ありがとう、さゆみん。わかった。今は休んでいる。」

そう言っ、ソファーに深く座って、ペンタブを使って絵を描きだした。それを見たさゆみんが声をかける。

「絵を描くのが一番休まる？」

「はい。」

ステーキの焼ける音とにおいが部屋を覆った。煙をみながら、りとはビーム攪乱幕を思い出して

いた。戦闘の場面が鮮やかに脳裏に浮かんだ。その様子を書くべきかと考えたが、やはり気が進まなかった。そこで料理をしているさゆみんの絵を描くことにした。スケッチを終えたころ、テーブルに食事がならんだ。さゆみんがりと声をかけた。

「りとちゃん、できたわよ。」

「ありがとう。なんか、私、居候みたいでごめん。これ、さゆみんのスケッチ。後で色を付けて送るね。」

「ほんと。有難う。すごい、料理をしている私、いい感じに描けている。」

「モデルが最高だから。」

「うん、この絵なら彼にも気に入ってもらえそう。外と通信できるようになったら、送るけどいい？」

「少し恥ずかしいけど、もちろん構いません。」

「ありが口をはさむ。」

「夕食前から、ごちそうさまです。」

「この手の話ならばいっぱいあるわよ。もっと食べる？」

「いえ、もうお腹いっぱいです。」

二人の冗談に、みんなで笑った。さゆみんが、いただきますの声をかけ、それにみんなが答える。

「それでは、いただきます。」

「いただきます。」「いただきますすな。」「いただきますでございませす。」

一口食べたりとがさゆみんに向かって言う。

「おいしい。焼き加減が最高。」

「ありがとう。りとちゃん。」

「まりがりとに冗談を言う。」

「やっぱり、黒い肉は違いますわね。」

「まりったら、もう。でも、おいしい。」

「私も、最高級の松坂牛は初めて。」

「ことこも同意する。」

「ジューシーなお味、すごいー。焼き加減も難しそう。」

「エビふりゃーとみさもさゆみんに言う。」

「ふむ、おいしいでございませす。地球には美味しいものがたくさんあって、いいところがございますな。」

「おいしいですな。でも、さゆみんのアボガドのクレープもおいしかったですな。」

「ありがとう、みさちゃん。」

「まりが感心して言う。」

「ここで、クレープの話を持ってくるのは、人の上に立つ人という感じだわ、みさちゃん。」

「違うですな。本当にあのクレープはおいしかったですな。」

「そういうことなの。わかったわ、今度食べてみるわ。」

「それがいいですな。」

食事中の会話は、明るい会話にしたかったが、やはりスクーパーズの部隊についての話になった。りとが言う。

「動きが速いスクーパーズが3体はいる。そして、その3体には散弾がきかなそう。」
まりが答える。

「先鋭部隊という感じだわ。」
りとがさらに説明する。

「その中でも1体が、動きも早くてルナ銃で捕捉するのが難しい。あとその3体とは別に正確なビームを撃つスクーパーズと強力なビームを撃つスクーパーズが1体づつ。」

「りとが弾き飛ばされていたわね。」

「ありがとう。まりの援護で助かった。」

さゆみんが心配そうに言う。

「二人とも無理はしないでね。」

「はい。でも、私は大丈夫。無理はしていない。まりはまりの服を着ているスクーパーズに気を取られて少し危なかった。」

「ごめんね、りと。私がデザインした服をスクーパーズが着ていたから。意外と似合ってたし。」

「ううん、謝る必要はないけれど、次は気を付けて。同じ手を使ってくるかもしれない。」
ことが言う。

「安全のために、もう少し防衛力の強化が必要かな。今日の夜のうちに、キャットストリートにも防衛線を構築するよー。あと、PARKの建物耐弾性ももっと強化する。それと、まりちゃんのボードの防御力も強化する方法を考えるよー。それをデータにして、朝にはまりちゃんに送るね。」

りとが言う。

「ここ、ありがとう。まりの防御力強化は嬉しい。防衛線の設置も大変だけど、お願い。私が護衛するから。」

「護衛はいらないよー。」

「念のため。」

みんなでの食事が終わった。それぞれがすることがあるため、さゆみんが帰る支度をしていて、それをりとが止める。

「ここに泊まったほうが安全だけど。」

「三毛が猫カフェの方が落ち着くみたい。真っすぐ帰るから大丈夫。それに、スクーパーズにとつて、私は眼中になさそうだから大丈夫。」

「心配だけど、わかった。何かあったらすぐに呼んで。」

「はい。朝食の準備はしておいたから、明日の夜また来るね。明日の夕食、何が食べたい？」
「うーん。」

「スペイン料理とか。」

「えっ、スペイン料理？」

「パエリアならば作れるわよ。」

「パエリア？あのチャーハンみたいなのほん？」

「うーん、チャーハンかどうかは知らないけど、そんな感じかな。スペイン人に怒られるかな？」

「わかった、明日はパエリアでお願いします。」

「よし、腕を振るって作るから。」

「ありがとう、さゆみん。」

まりがここに尋ねる。

「ここ、パエリアって食べたことある？」

「店ならばあるけれど、手作りは初めて。」

「私も。楽しみだわー。」

「うん、楽しみー。」

みさがエビふりやーに言う。

「明日は、パエリアですな。楽しみですな。」

「パエリアには海老が入っているようでございます。」

「エビふりやーは間違っても入ってはいけません。おいしくなくなるですな。」

「はい、間違っても入らないでございます。」

さゆみんが冗談を言う。

「そうか、もし海老がなかったら、ワンパンして、エビふりやーさんを入れればいいのね。」

「綺麗な顔をして怖いことを言う人でございますね。」

「ごめんなさい。大丈夫です。海老はちゃんと確保してありますから。心配しないで。」

「そうでございますか。はい、さゆみん様ですから心配はしていません。」

今でも自分はスクーパー最強で、普通の人間なら全人類がかかってきても平気と思っているので、実際全く心配はしていなかった。このようなとりとめのない話をした後、さゆみんは帰っていった。ただ、真っすぐ帰らないで、明治通りの方の様子を見てから帰っていくことにした。そして、りととまりが見守る中、ここがキャットストリートにも防衛線を構築していた。作業が終わると、ここがセンサーを使って異常がないことを確認した。りとはさゆみんに連絡してさゆみんの安全を確認した。まりはみさとエビふりやーに明日も何があるからわからないから寝たほうが良いと伝えた。その後3人は寝床について、すぐに寝入ってしまった。相当疲れていたようだった。3人のアマツマラを見たみさが、エビふりやーに話しかける。

「なかなかいい色になってきたですな。」

そして、自分も寝ることにした。

「もう少しで父上の命令を達成できるですな。あの3人を父上がどう評価して下さるか楽しみですな。」

ゴモは夜になってから明治通り沿いの建物のうち何か所かを、センサーに探知されないように注意しながら調査を続けていた。どの建物にも、散弾の発射装置やファンが防御盾と共に多数設置されていた。

「うーん、かなりの密度だな。これで突破は可能なのか。」

カメラを持ってこなかったゾモは状況を分かりやすくするためにスケッチを書いた。自分の絵を見ながらつぶやいた。

「下手な絵でいやになるな。でも送らないよりいいだろう。」

アルドアにデータを送りながら、壁の絵を思い出し出していた。

「どんな人間が描いたんだろう。会ってみたいな。人間をバカにするスクーパーズも多いけれど、僕はあんな綺麗で暖かい絵を描ける人間をバカにしたりしてないんだけれども。それにしても、王女様を誘拐したやつらは人間なのか、デストロイヤーズなのか、または未知の宇宙人なのか。そう言えば、最近、局所銀河群のあちこちで騒ぎが起きているという噂だし。全く違う銀河から来たんだろうか。」

ゴモからのデータを受け取ったアルドアは、ちょうどアメリカ大陸での作戦が終了し、隊員の撤収を行っている第3連隊の揚陸艦に乗船している技術参謀ボナダ少佐にも送った。ボナダは部下の技術参謀ダルガ少尉に分析を命じた。

「至急、第8連隊からのデータを分析してくれ。第8連隊は、すでに半数近い損害が出ているぞうだ。明日、王女様救出のため、第8連隊と協力してこの防衛線を突破する。少しでも犠牲を少なくする方策を考えておかないと。お前は、士官学校技術学科始まって以来の天才といわれているんだ。頼むぞ。」

「はい、わかりました。徹夜して全力で分析します。ですが、ぱっと見で突破は無理と思います。」

「何故、無理と分かる。」

「少し見ただけでも、配置やバックアップが完璧に考えられていることがわかります。突くべき穴が見えません。天才的配置です。」

「天才は天才を知るか。」

「少なくとも、向こうは天才と思います。」

「そうか。ではどうすればいい。」

「現在の状態ならば、トンネルを掘って地下を進めば突破できます。敵が地面を強化したため、

今設置してある散弾発射装置ならばトンネルを貫通しないと思われず。」

「しかし、本星から工兵部隊を呼び寄せると10日はかかるぞ。」

「はい。そして、そのところにはトンネルに対する対処も完了している可能性があります。」

「スクープビームでトンネルを掘れないか。」

「スクープビームでは強化した地面に穴を開けることができません。私が技術本部に研究を申請しているビーム攪乱幕を無効にするための武器があれば。」

「敵を倒せたか。」

「あの棒人間は倒せなくても、敵の散弾発射装置は破壊できたと思います。それで突入はできたとは思いません。」

「俺も、お前はスクープバズとは思えないほど創造性がある。研究開発部門にいた方が才能を発揮できると思うが、上の頭が硬いからな。スクープバズには創造性がないから研究開発部門に入れないということだ。でも、それじゃあ一体どんなやつが研究開発部門にいるんだ。」

「宇宙人だと思います。強制的に連れてきている場合もあるという噂もあります。助手としてスクープバズがいるようですが、助手でもいいので行ってみたいと思っています。」

「そうか。それにしても、ダルガ、お前は少し嬉しそうだな。」

「申し訳ありません。戦艦の艦首主砲を跳ね返す、敵が作った困いというのに興味があります。是非調査してみたいです。」

「私には厄介なものにしか感じないが。うちの連隊長が無茶な突撃をしないように、考えられる限りのプランとその結果の予想をまとめておいてくれ。」

「わかりました。」

ダルガは揚陸艦の計算機を使って、立案した作戦のシミュレーションを開始した。

「このコンピュータじゃ、十分な解析はできないな。」

それでも、ダルガは全力で分析と予測に全力を尽くしていた。

第3連隊を乗せた揚陸艦が、未明に原宿に到着した。すぐに第3連隊ギンシア連隊長、ボナダ技術参謀らが、戦艦で作戦を練っているガーチューン、アルドアらのところを訪ねた。まずはギンシアが切り出す。2体は士官学校の同期で、性格は異なるが普通に協力できる仲だった。

「ガーチューン、だいぶ苦労しているようだな。2〜3日前に会ったばかりなのに。こんなに痩せてしまった。大丈夫か。」

「私のことはどうでもいい。連隊始まって以来の大損害を被ってしまった。だが、王女様を何とかしても、スクープバズの手で救出しなくては。」

「そうだな。昨日の夕方に王女様の生存が確認できたという話だが。」

「ご健在は確認した。お怪我もないようだ。敵の目的は、こちらを誘い込むことのようなが。」

「狩りを楽しむためか。」

「今のところ、そうとしか考えられない。」

「そうか。まあ敵の目的はいい。何としても、その防衛線を突破する必要がある。ポナダ、敵の防衛線を突破するいいアイデアはあるか。」

「連隊長！残念ながら我々の戦力では無理と思われれます。様々なバターンでシミュレーションを行いました。敵の防衛線は我々の攻撃に対してほぼ完璧に防ぐことができます。本国から緊急に工兵部隊を呼んでトンネルを掘るべきとの結論になりました。」

報告書を見たアルドアが驚いて言った。

「すごいな。揚陸艦のコンピュータでこれだけの計算をするのは。誰がやったんだ。」

「なんだ、いかにも俺じゃないみたいない方は。まあいい、ダルガ少尉だ。私が知っている中で一番頭がいい。少尉で方法が見つからないんだから、俺では見つからない。」

「おお、ダルガか。やつは元気にやっているか。」

「おう、元気だ。やつを知っているのか。今、原宿の囲いを調べている。」

「士官学校時代にチューターをしたことがある。やつは中央の研究所の方が向いているだろう。」
「俺もそう思う。ほとんどのスクーパーズは新しい技術を生み出せなくなったが、あの研究所には、宇宙人や、何故か新しい技術を生み出せるスクーパーズが集まっているそうだ。推薦書は書いているが、なかなか受け入れてくれなくて。」

「お前の推薦書じゃな。俺も書いてみるよ。」

「そうか、それは有難い。」

ギンシアが話を遮る。

「今は、そんな話をしている場合じゃない。防衛線をどう突破するかだ。」

アルドアが答える。

「大変申し訳ありませんが、現在の戦力では方法はないと考えます。第3、第8連隊の技術参謀の意見は一致しています。敵の防衛陣地はほぼ完璧と考えられます。」

「そんなことは聞いていない。役に立たんやつらだ。」

ポナダが答える。

「ダルガ少尉は、戦艦の旋回主砲を取り外して運搬して使えば、防衛線突破は可能との計算もしています。威力がありすぎて王女様の位置が特定できてからでないと、王女様に危害を及ぼす可能性があり、現状では使えないと。」

アルドアが感心して言う。

「なるほど戦艦の主砲を使うのか。それは面白い、いえ、面白いと言って申し訳ありません。こちらでも検討してみます。ただ、確かに王女様の位置が分からないと使いにくいのは事実とは思いません。」

「使えなければ、意味がない。」

「申し訳ありません。ですので、現状は工兵部隊を呼ぶのが最善と考えます。」

「だから、それでは準備を含めて10日はかかる。遅すぎだ。」

「わかっております。それに、その間にトンネルに対する対策をとってくる可能性もあります。」

「その通りだ。時間が大切だ。」

「しかし、方法が他には・・・」

ボナダの言葉をさえぎって、ギンシアが決断を下す。

「あと1時間後に、第3連隊全員で敵防衛線に向けて総攻撃を敢行する。大通りを突破して、王女様を救出する。」

「連隊長、それでは、連隊が全滅してしまいます。」

「何を言うか、現に向こう側に第8連隊の隊員が1体渡っているではないか。当たらなければ、問題はない。」

「ですが。」

さすがにガーチューンもギンシアを止めた。

「ギンシア連隊長、それではたとえ突破できても、9割は犠牲になる可能性があります。もう少し作戦を練ったほうが良いのではないのでしょうか。」

「ガーチューン連隊長、それで良い作戦はあるのね。」

「あまり良い方法がないのですが、敵の兵器をこちらからスクープビームで攻撃することを検討しています。」

「ボナダ、それでなんとかなるか。」

ボナダが答える。

「敵の発射装置の防弾盾を避けて敵のビームの出るところに、スクープビームを当てられれば良いのですが。それ以外の場所では無効と思います。その場所は極めて小さく、そして動きます。」

さらに、敵の攻撃にさらされるため、ほぼ不可能と思われる。」

「ということだ。ガーチューン連隊長。」

「しかし、うちの連隊には、ゾロモという優秀な狙撃手がいます。」

「分かった、ガーチューン連隊長。第8連隊も半分近い損害を被っている。君の気持もわからないわけではない。だから我々だけで突入する。第8連隊は今言った方法で我々を援護してくれ。」

「ギンシア連隊長。」

「ガーチューン連隊長、デストロイヤーズとの戦いでは、すでに数億体のスクーパーズが犠牲になっっているんだ。天の川銀河で、王女様を奪われたなんて知られたら、デストロイヤーズに足元を見られてしまう。それでは、また大きな犠牲の元になるだけだ。我々は天の川銀河の戦いで負けるわけにはいかないんだ。」

「ギンシア連隊長。わかりました。もう何も言いません。我々も敵兵器の破壊と救援で全力で援護します。」

「頼む。」

ボナダは不満だった。

「冗談じゃない。こんな滅茶苦茶な作戦で、ダルガのような優秀な若者を失ってよいわけがあるか。それこそ、デストロイヤーズの思うつぼだ。」

第3連隊の本体に帰る途中、ボナダはギンシアに、ダルガを呼んでくると言っただけで別れた。

「囲いを調査しているダルガを呼んできます。」

「うむ。9時までに本体に合流するように。そこで作戦を説明して、10時に突入開始だ。」

「分かりました。」

ボナダは、囲いの周りを回ってダルガを探した。途中、人間も囲いを調査しているのを見つけた。

「やつらは、この星の科学技術者なんだろうな。どんなやつらなんだろう。俺たちと同じかな。」

そんなことを思いながら、ダルガを探した。そして、新宿側でダルガを見つけて尋ねた。

「ダルガ、どうだ、この壁について何か分かったか。」

「中性子星程度の密度を持った薄い中性子の壁ということはわかりますが、安定に存在できる理由や条件がまだ分かりません。この構造を解析して戦艦の装甲に使えば、艦隊戦でデストロイヤーズの艦隊に対して、非常に有利になると思います。」

「そうだな。よし、もう少し調べたあと、そのデータを戦艦のコンピュータを借りて解析してみるか。」

「戦艦のコンピュータがあれば、なんとかなるかもしれません。ただ貸してもらえないでしょうか。」

「艦隊戦で有利になるって、掛け合ってみるさ。」

ダルガがボナダに、データを取り終えたことを告げた。ボナダが片付けを終えたダルガに呼びかけた。

「さあ、行こう。」

ボナダが行く方向が、戦艦のいる方向でないので、ダルガが尋ねた。

「ボナダ少佐、そっちは戦艦がいる方向ではありません。」

「分かっている。黙ってついてこい。」

そう言って、青山の方向へ飛んで行った。

一方、PARKでは朝7時ごろにまりが目覚めた。その前から起きていたことがモニターを見ていた。まりは起き上がって、そこにいるモニターの前に向かった。

「ここどこ、どう?」

「うーん、スクパーズの数が増えているみたい。アメリカかヨーロッパに居たスクパーズが集まってきたんだと思う。」

「そう。大丈夫かな。」

「2重の防衛線に、この建物も強化したから大丈夫だとは思っけど。」

「そうね。じゃあ、私は朝食の用意をしちゃうね。」

「ありがとう。あと、ボードの防衛力を強化するデータができたから後あとで送るね。」

「また、手をつなげばいいのかな。」

「そうだよ。」

まりがりの方を見ながら。

「りとはいいの。」

「りとちゃんは、自分でどんどん強化しているみたい。」

「そうか、そうかもね・・・りとは疲れていたのか良く寝てるね。まだ寝かしておこうかな。」

「うん。それがいいー。」

7時半ごろ、残りの3人も起きてきて、朝食と朝のしたくを始めた。ただ、ことごまりはモニターを見ながらの食事である。りとがみさとエビふりやりに申し訳なさそうに言う。

「今日も地下室になるかもしれないけど、地下室に居れば大丈夫だから、おとなしくしてて。エビふりやーもみさちゃんをお願いね。」

「わかったですな。地下室でりとちゃんの活躍を見て応援しているですな。でも、りとちゃん、どんどん素早くなって、モニターで追いかけるのが大変ですな。」

「みさ様のことはお任せください。」

それだけ言って、りともことごまりの方に行って、明治通りの西側の様子を見ていた。

午前9時すぎ、第3連隊がラフォーレ裏側に集合していた。作戦と呼べるようなものはなかった。第3連隊の第2、3、4中隊が、それぞれ、ラフォーレの横、竹下通、原宿警察署の横から加速して突入する。機を見てギンシア連隊本部と第1中隊がラフォーレ横から突入する。そして、突入に成功したら、ムラサキスポーツの裏手に集合し、裏原の探索を開始するというものである。連隊長が狭い路地で訓示を与えた。

「王女様救出の作戦は今伝えた通りだ。第3連隊全体が火の玉になって、この防衛線を突破する。敵の防衛線は頑強であり、突破は不可能だというものもある。そんな臆病ものにはこの防衛線を突破することは不可能であろう。だが我々は違う。邪悪なものに対して戦う強い意志がある。我々第3連隊隊員の意思の強さによって、この防衛線は必ず突破できる。王室を守り、この天の川銀河の秩序を守る。それは我々スクーパーズ兵の使命だ。今こそ敵に我々の意思の強さを見せてやる。王女様を救出し、敵を倒し、我々に手を出したことを後悔させてやろう。そして、この天の川銀河に平和と秩序をもたらそうではないか。」

そう言うと、スクーパーズ兵から、賛同の歓声が上がった。

「そうだ!」「王女様を助けるんだ!」「敵を倒せ!」「我々の力を見せてやるぜ!」

そして、第3連隊連隊歌を連隊長が歌い始めると、他の隊員も続いた。

「では、突破後、合流地点で会うことを楽しみにしている。以上。」

ギンシアがそう言って、訓示を締めくくった。そして、第3連隊の各中隊は待機位置へと向かい、そこでつかの間の休息をとった。隊員には、お菓子が配られ、作戦開始まで談笑にふけていた。

「なんか、カラフルな街だな。アメリカよりも、もう少し行ってる感じだ。」

「そうだな、何か突っ走ってる感があるよな。」

「道の向こう側も楽しみだな。」

家族の写真を見ながら心配そうに上官に話しかける隊員もいる。

「防衛線、渡れるでしょうか。弾が当たると、何故か完全に消滅するとのことですが。」

「なに、ビビってもしょうがないぞ。大丈夫さ。第8連隊の隊員は渡れたそうだ。」

「弾に当たらないように気を付けますが。」

「そうだ。距離はあまりないから、加速してから渡ればなんとかなるよ。」

「はい、そうだと思います。天の川銀河を守るためにも、負けるわけにはいきません。家族のためにも頑張ります。」

自分に言い聞かせるように言って、また家族の写真に目を落とした。

一方、第8連隊では、ラフォーレのホールで、ガーチューンが第3連隊援護の任務を命じた。そして、アルドアが、明治通りに多数のビーム攪乱幕のタンクを同時に投射する準備、逃げてきたときに弾除けになるような防弾板の配置などを図を用いて具体的に指示した。ビーム攪乱幕は、風で吹き飛ばされてしまうため有効性に疑問が残るが、計算の結果、突撃初期の段階での有効性が確認されたため、実施することになった。そして、第111分隊に対しては、ゾロモによるラフォーレ屋上から敵の武器への狙撃、他の分隊員によるゾロモの援護を命じた。

そのころPARKでは、ここが明治通りに突入するためにスクーパーズが集結していることに気付いていた。

「なんか、スクーパーズが4カ所に分かれて集まってきているみたいー。」
りどが尋ねる。

「どのぐらいの数？」

「スクーパーズのビーム攪乱幕があって良くわからないけど、全部で千体ぐらいかなー。」

「そんなに。」

まりがりとうとう。

「さっきのこと、アメリカかヨーロッパのスクーパーズがこちらにきたんじゃないかなと話していたの。ヨーロッパの方は作業が慎重と聞いていたから、アメリカの方だと思っただけ。」

「そうか。アメリカのスクーパーズはヨーロッパのスクーパーズに比べて攻撃的なんだから、やっかいなことになりそう。」

りどがここに尋ねる。

「ここ、防衛線の方は大丈夫。」

「うーん、計算上は大丈夫だけれど、何か起きるか分からないから、出発する準備だけはして
て。」

「わかった。準備する。」

りどが冗談を言い、ここが答える。

「完璧なシステムとは、エラーが生じないシステムのことではない。エラーが生じても、迅速に
対応し、被害を最小限度にとどめることができる。そのような機能を含めたシステムのことだ
よ。」

「分かりました。局長。」

それを聞いてさゆみんが笑った。みさがその内容に感心して言う。

「その通りですな。さすが、りどちゃんですな。」

3人は、出発する準備を始めた。そして、りどが再度みさに指示する。

「みさちゃんとエビふりヤー。悪いけど、また地下室でおとなしくして。」

「わかったですな。」

まりが、みさとエビふりヤーを地下室に連れて行った。ここが監視装置を見ながら、りどに言
う。

「りどちゃんはまだ休んでいて。スクーパーズが突入してきたら呼ぶから。」

「うん、有難う。」

ここが地下室から戻ってきたまりにも言った。

「まりちゃんも今は休んでいて。」

「わかったわ。でも、どう、ここ。スクーパーズの様子、わかる？」

「いまは、向こうも休憩中みたい。あまり動きがない。」

「そう。じゃあ、もう少し休めるわね。」

「防衛線がちゃんと機能したら、スクーパーズ、諦めてくれるといいんだけど。」
りどが答える。

「どうだろう。ヨーロッパのグループがやって来そうだけど。」

「そっかー、なかなか終わらないか。残念。」

「うん、今は頑張るしかない。」

「そうだねー。防衛線の武器や装置をここからチェックしているけど、大丈夫だと思うよ。」

「わかった。ありがとう。」

10時少し前になって、第3連隊、第8連隊の隊員の時計の時刻合わせが行われた。

「9時55分、30秒前。20秒前、10秒前、8、7、6、5、4、3、2、1、合わせ。」
時刻合わせが終わると、各部隊の準備状況が確認された。

「第8連隊、ビーム攪乱幕投射班。」

「準備よし。」

「第8連隊、狙撃班。」

ガジメが答える。

「準備よし。」

「第3連隊、第1中隊。」

「準備よし。」

「第3連隊、第2中隊。」

「準備よし。」

「第3連隊、第3中隊。」

「準備よし。」

「第3連隊、第4中隊。」

「準備よし。」

ラフォーレ屋上にいるガーチューンとギンシアが、顔を見合わせ、うなずいて、各連隊に命令を發した。

「予定の時間通りに作戦を開始する。皆の健闘を期待する。」

ギンシアがガーチューンにお礼と別れを伝える。

「援護に感謝する。これから下に降りて、第1中隊と合流する。」

「お気をつけて。作戦が終了したら、一杯やりましょう。4星の酒があるんです。」

「おー、それは楽しみだ。では、そちらも気を付けて。」

「第3連隊に、ご武運を。」

「ありがとう。第8連隊に、ご武運を。」

そう言って、ギンシアが降りて行った。ガーチューンは時間を確認し、号令を發する。

「突入、マイナス200秒。いいか、突入マイナス30秒で、ビーム攪乱幕のタンクの投射を開始する。タイミングを間違えるなよ。攪乱幕が張られたら救護班は少しでも防弾板を前に出せ。」

第3連隊の退路を少しでも作るんだ。狙撃班準備はいいか。狙撃班は敵攻撃兵器が姿を現したら狙撃を開始するように。」

ガジメが答えた。

「はい、狙撃班の準備はできています。道の向こうのゴモも支援の準備を整えています。」

「わかった。だがゴモには無理をさせるな。道の向こう側の情報を得るために貴重な存在だ。」

「しかし、作戦が成功すれば、その心配は無用になります。」

「いや、作戦が成功する見込みは少ない。それが、第3連隊、第8連隊参謀の意見だ。」

「そうですか。わかりました。では、ゴモのためにタンクの投射に合わせて水と食料を投射する準備をします。」

「そうだな。頼む。」

「分かりました。」

時間を確認しながら、ガーチューンが号令をかける。

「突入マイナス100秒。」

第3連隊第1中隊中隊長が、ギンシアに尋ねる。

「やつら、気付いていますでしょうか。」

「たぶんな。」

ガーチューンの号令が続く。

「突入マイナス60秒。」

「突入マイナス35秒。」

そして、実質上の作戦開始が告げられた。

「ビーム攪乱幕タンク投射開始。防弾板を前に押し出せ。」

ビーム攪乱幕が詰まったタンクが道やその周りに投射され、着地点から煙が始めた。しかし、投射の同時に風が吹き始めて、攪乱幕は濃くなることはなかった。ガーチューンが命令する。

「休むな。連続投射だ。少しでも攪乱幕を濃くするんだ。」

タンクが連続的に投射された。そして、ギンシアが号令をかける。

「突撃マイナス5秒。」

そして、突入が指示された。

「王女様を取り戻すぞ！丸野王、万歳！みさ王女、万歳！突撃開始！」

ほぼ同時に、第2、3、4中隊中隊長やその小隊長、分隊長が命令を発する。

「突撃！」「丸野王、万歳！」

この号令と共に、3つの中隊が分隊ごとに歓声を上げながら加速し、明治通りに突入していった。それと同時に、東側の多数の建物で、窓や壁に見えていたところが開いて、散弾を放つ発射装置が現れ、スクーパーズへの攻撃が始まった。スクーパーズもジグザグに進んで散弾をかわそうとするものや、できるだけ加速して高速で道を横断しようとするものがあつたが、道の半分まで達するのがせいぜいだった。また、横断をあきらめて防弾板に隠れるものもあつたが、左右からの十字砲火のために消えて行った。それでも、十字砲火のために銃口が横を向いた瞬間に突入しようとするものなど、決死の突破作戦が続いていた。ガーチューンは、防弾版周りへ攪乱幕の投射を命じ、犠牲を少しでも少なくしようとしていた。

ラフォーレの屋上では、東急プラザの窓から発射装置が現れた瞬間からゾロモが発射装置の狙撃を開始していた。相手の防弾板の隙間を縫って、1つ1つ発射装置を破壊していった。ゾロモを守るためにゾロモの少し前方にいたゼクールが感心していった。

「すごい。ピンポイントに正確で強力な射撃だ。」

その時である。東急プラザの発射装置の2つがゾロモの方を指向した。ガジメが叫んだ。

「ゼクール、ゾロモを守るぞ。」

「はい、バリアー、最高出力！」

ガジメとゼクルールのバリアーでなんとか散弾からゾロモを守っているが、ゾロモの方も視界が悪くなり、正確に射撃することができなくなった。ガジメが命令する。

「他の全員は、あの2つの発射装置を攻撃しろ。破壊できなくても、照準をずらせればいい。」
第111分隊隊員がゾロモに向けて撃たれている発射装置に向けて、ビームを発射した。その衝撃で、銃身が横を向いた。ゾロモはその2つの発射装置を破壊するとともに、他の発射装置も次々と破壊していった。それを見た、ギンシアが第3連隊の第1中隊の突撃を命じた。

「第8連隊が発射装置を破壊した今がチャンスだ。いくぞ！突撃！」
ギンシアを先頭に第1中隊が歓声を上げて突撃した。弾幕が薄かったため、特に前方の隊員が明治通りの横断に成功した。後半から、横の建物の発射装置も第1中隊を攻撃し始めたため、消滅する隊員が増したが、それでも第1中隊の半分の120体ほどが横断に成功した。ギンシアは横断に成功した隊員を集めた。

「渡れないって言っていたやつがいるが、渡れただろう。計算なんて当てにならないものだ。これから奥へ向かい、王女様を救出するぞ。」

ガーチューンは、これ以上の突破は無理と判断して、他の第3連隊隊員の收容を命じた。防弾版を密に配置して、ビーム攪乱幕を使いながら、渡れなかった第3連隊隊員のための退路を築いた。負傷したが、消滅していない隊員は戦艦の医務室に運ばれた。戻ってくることできた第3連隊隊員は100名程度だった。この10分余りの戦闘で、第3連隊の8割近くの隊員が消滅した。ガーチューンも被害の大きさに心を痛めていたが、100体以上の隊員が横断に成功したことに高揚していた。

「さすがだな、ギンシア。だが、これからも大変だぞ。」

ラフォーレの上では、ゼクルールが突撃をガジメに上申した。

「隊長、我々も行きましょう。今の弾幕の密度ならば、突破できます。1体でも多いほうが良いです。」

「それはわかるが、それでもここを確実に突破できそうなのは、お前と俺ぐらいだ。」

「でしたら、私一人で第3連隊の応援に駆け付けます。隊長は分隊の指揮を執って下さい。」

「しかし。」

「隊長！王女様を助け出すチャンスは今しかないかもしれません。」

「それもわかるが・・・分かった。連隊長に掛け合ってみる。」

「有難うございます。」

「ここで待っている。」

「はい。」

一方、PARKでは、ここがスクーパーズの突入前から、迎撃の準備を整えていた。

「もうそろそろ来るかも。」

「あっ、何か投げ入れられた。」

りととまりがことこのわきからモニターを見ていた。まりが答える。

「ビーム攪乱幕のタンクね。防弾版を押し出してきたわ。」

りとが出入口に向かいながら言う。

「私、様子を見てくる。」

そして、竹下通の向かい側の建物の影に向かって飛んで行った。ことこは防衛線の動作のための操作を開始する。

「ファンの運転を開始。」

まりがことこを応援する。

「ことこ、がんばって。」

「わかったー。銃カバー開放。射撃諸元入力。センサー連動全自動射撃用意。セーフティー解除。あとは銃に任せるだけ。」

まりが叫ぶ。

「スクーパーズが加速してやってきたわ。」

2人が息を飲む。通信を通じて情報のやりとりをしているりとが、建物の陰で棒のようなものを構える。ことこが状況を確認しながら、

「これなら大丈夫。防げるよ。」

と言った瞬間、表示を見ながら叫び声を上げた。

「あれっ、東急プラザの発射装置が破壊されていつてる。ラフォーレの屋上から攻撃を受けているみたい。」

それを見たりとが言う。

「また、あいつらだ。まりを襲ったやつら。」

ことこがコマンドを入力する。

「2台を手動モードに変更。ラフォーレの屋上を攻撃。開始。」

攻撃をしているが、狙撃しているスクーパーズは消滅しない。ことこが言う。

「強力なバリヤーで守られているみたい。」

数秒後、弾が屋上の敵からそれはじめて、再度、銃が破壊されはじめたのでことこが叫んだ。

「あれっ、照準がずれた。えー、銃が次々に壊さ。」

そう言いかけたときに、スクーパーズが明治通りに突入してくるのが分かった。

「わー、スクーパーズがたくさん来た。今の弾の密度じゃ撃退は無理。」

りとが言う。

「わかった、東急プラザわきに向かう。」

まりも言う。

「待って、私も合流するわ。」

りとが心配して尋ねる。

「大丈夫？」

「大丈夫。」

まりは外へ向かって歩きながらも、りとと通信している。

「それじゃあ、まりは東急プラザから迎撃して。私は遊撃に徹する。」

「分かった。朝、ここに言われてボードを大きくして防弾を強化したから、それを試してみる。」

「無理はしないでね。」

「それは、こっちのセリフ。」

「とりあえず、着いた。スクーパーズが道に100体以上いる。詳しい状況は伝えるから、連絡

はつなげたままで。」

まりも、通信装置で答えた。

「了解。連絡はつなげたままでいくわ。」

そう言いながら、りとを追いかけて東急プラザの方に飛んで行った。

ギンシアは、東側に渡った隊員を集めて部隊を再編成した。規模を縮小し10体程度の分隊を12分隊を作り、それをもとに3小隊を編成した。道を渡れたが、負傷した隊員もいた。軽傷の隊員はそのまま作戦に参加するが、動けない隊員4体は応急処置はしたが、置いていくしかなかった。負傷兵にギンシアは、

「撤退するときに必ず連れて帰る。」

と告げて、負傷兵を建物の軒下に移した。ただ、自分の生還も難しいことは理解していた。

「残念ながら、他の中隊が渡れたとは思えない。したがって、集合地点に向かうことは時間の無駄だ。初日に射撃手がいた建物付近を目標に、3体に分かれて進む。連絡を欠かさなよ。」

ラフォーレの屋上で、明治通りの裏手を東急プラザへ向かうりとをゼクルルが見つけた。

「棒人間、東急プラザに向かっていきます。」

ガーチューンとガジメがゼクルルが言う方向を見た。ガジメが尋ねた。

「ゼクルル、どっちだ。」

「あっちですが、建物の陰に隠れてしまいました。」

そのときに、裏原から東急プラザに向かっているまりをみつけたガーチューンが言う。

「射撃手だな。」

ガジメが答える。

「そうです。」

「そうか。」

第3連隊の状況が良くない方向に向かうことをガーチューンは悟った。ゼクルルがガーチューン

ンに直訴する。

「私を行かせて下さい。やつらをデータでしか知らない第3連隊では、すぐに全滅してしまいます。私ならば、棒人間を引き付けることができます。射撃手は攪乱幕でなんとかあります。その間に、第3連隊が王女様を探索することができます。」

「分かった。行ってこい。」

「有難うございます。行ってきます。」

そう言うと、ゼクールは薄くなった弾幕をかいくぐりながら、明治通りを渡っていった。それを見た、ガーチューンがガジメに行った。

「すごいな。」

「はい。ゼクールはもう私を超えています。」

「そうか。こちらでも仕事をしなくては。ビーム攪乱幕のタンクを向こう側の建物、東急プラザやその周辺に投射する。」

「はい。」

準備していた隊が、タンクの投射を開始した。

まりが、りとのところに到着した。まりも多数のスクーパーズを視認した。

「すごい数ね。」

「うん、こっちは私に任せて。とりあえずルナ銃の散弾を使ってみる。」

「わかったわ。私は、東急プラザの屋上からこちらを攻撃してくるスクーパーズをやっつけるわ。」

「助かるけど、無理はしないでね。危なそうだったら、こっちに来て。二人で戦った方が安全。」

「わかったわ。」

第3連隊では、先に進んでいたスクーパーズの分隊が1つずつ消えていった。ギンシアは予想外に損害が大きかったため、攻撃への対応を急いでいた。

「くそー、棒人間が散弾を撃つのはデータにはなかった。少しでも建物の陰に隠れる。分隊ごとに同時斉射だ。相手が攻撃するすきを作るな。」

りとは連続した10体つつの同時攻撃に手を焼いていた。遠くからの散弾は最初は効果があつたが、分隊が撃つては隠れるため、散弾による攻撃はだんだんと有効ではなくなってしまう。また、接近することも難しかった。

「まりを呼んで2方向から散弾を浴びせようか。」

そうとも考えた。しかし、散弾が建物の壁で跳ね返ってスクーパーズに当たることがあり、スクーパーズの数を少しずつ減らすことができていた。また、スクーパーズの足止めができていたので、この攻撃方法で、もう少し様子を見ることにした。

ギンシアも突撃するかどうか考えあぐねていた。

「このままでは、少しずつやられるだけだが、突撃して突破できるか。」

そのときである。ビーム攪乱幕のタンクが着弾しはじめた。あたりが煙ってきて、ビームが届かなくなってきた。タンクは各所に飛ばされているようだった。ギンシアは、相手も突入してくると思った。そこで、すかさず命令を発した。

「連隊突撃！突入するのは今だ。裏原を指すぞ。」

およそ100体のスクーパーズは、煙の中で突撃を開始した。道を渡ったゼクルルは、第3連隊に追いつこうとしていた。

「ギンシア連隊長はあそこか。」

りともあたりが煙るのを見て突入を開始した。

「リーダーはあの辺りだった。」

棒を進路正面に配置し、正面にいるスクーパーズを切り裂き、排除しながら前に進んだ。

「あれだ。」

りとは、リーダーらしきスクーパーズを見つけて突入する。相手はまだこちらに気が付いていないようだった。ただ、そのとき横に気配を感じた。近くからスクープビームが飛んできて、ボードでそれを防いだ。その方向を見てつぶやいた。

「また、あいつ。」

ゼクルルは、ギンシアに襲い掛かろうとしていたりとを見つけて、スクープビームを発射していた。

「思った通り、連隊長を狙ってきた。」

そして、ギンシアに伝える。

「棒人間は私が抑えます。隊長は前に。」

「おおー、第8連隊のエースか。ありがたい。第3連隊前進だ！急げ。」

そう言って、ギンシアが先頭に立ち、第8連隊が裏腹に向かった。

りとも第8連隊を追おうとするが、ゼクルルが後ろから仕掛ける。

「お前の相手は私だ。」

ビームをボードで防ぐ。

「じゃまないで。」

りとは棒で切りかかるが、ゼクルルは横にかわす。ルナ銃をコントロールして、何発が発射する。しかし、これもゼクルルがタンクの動きを見てかわす。ゼクルルはりとは第3連隊を追えないように、りとのわずか前方にビームを発射してけん制する。りとはビームをボードで受けるが、裏原の方に進むことができない。そんな中、西側（明治神宮側）にりと、東側（裏原側）にゼクルルが対面して静止する。りとはルナ銃のタンクをコントロールして下方に伸ばして行く。両者はゆっくりと距離を詰める。りとは下からルナ銃を発射した、ゼクルルが前進してビームをかわしながら、全力でスクープビームをりへと向けて発射する。ゼクルルはビームを避けると思ったが、りとは棒でビームを切り裂きながら最高速でまっすぐにゼクルルに向かってきた。予想外の動

きだった。

「しまった。」

そう心の中で叫んだ。ビームの発射を中止して横によけようとしたが、相手はすぐそばまで迫っていた。棒の攻撃をかわせそうもなく、ゼクールは覚悟を決め、間に合いそうもなかったが再度ビームを発射しようとしていた。しかし、その時、横からスクープビームがりとに向かって撃たれた。りとは、それを棒で払ったが、ゼクールを攻撃することができず、りととゼクールはお互いの体の横をぶつけ合いながら離れた。

「ゼクールさん大丈夫ですか。」

声をかけたのは、ゴモだった。

「おとなしくしているという連隊長の命令でおとなしくしていましたが、見ていられなくて。」

ゼクールが答える。

「ゴモ、有難う。今のは危なかった。」

「それじゃあ、私も先輩に協力します。」

「申し訳ないが、お願いする。少し離れたところから援護してくれ。」

そう言っている間に、りとが再び突進してきた。ゼクールがまたビームを撃ちながら、ゴモに援護を要請する。

「横から撃ってくれ。」

りととは横に移動して、ゼクルールのビームをかわすと、ビーム攪乱幕を散布した。

「今は、裏原の奥に行かせないのが先。」

りとは、ゼクルールの横をすり抜けてキャットストリートの方に向かった。ゼクールが、ゴモに命じる。

「追うぞ、ゴモ。第3連隊に近づけさせるな。」

「はい。」

そう言って、2体はりとを追っていった。

一方、第3連隊は、ことが昨晚設置したキャットストリートの防衛線を突破できないでいた。

明治通りの防衛線ほどは頑強ではないが、攪乱幕を吹き飛ばすファンや散弾を発射する銃が配置してあった。ギンシアに、ゼクールからテレパシー通信があった。

「棒人間がそっちに向かっています。追いつけそうもありません。注意して下さい。」

ギンシアも1、2体では棒人間を抑えきるのは無理かもしれないとは思っていたので、あわてることはなかった。

「こんなときに。だがこの位置で交戦すると、防衛線に挟まれて苦しいな。」

それを避けるために指示を出した。

「この通りから30メートル戻る。全員建物の陰から棒人間を向かい撃て。」

続けて、ゼクールにも連絡する。

「この先の通りに第2防衛線が張られていて突破できないでいる。その少し手前で向かい撃つ。」
ゼクールが答える。

「了解です。棒人間をその防衛線に誘い込みます。そうすれば、防衛線からの攻撃が弱まると思います。その隙にうちの隊員ゴモに防衛線の突破を試みてもらいます。」

「了解した。いい作戦だ。私たちも隙ができれば突破を試みる。」

「はい。棒人間はそちらに到達するころと思います。」

「あー、来た。速いな。」

「こちらも、すぐに追いつきます。」

そして、ゼクールがゴモに命じる。

「私が、防衛線上で棒人間を引き付けるから、その隙に防衛線を突破して王女様を探してくれ。ただ、棒人間から離れると防衛線からの攻撃が激しくなると思うから、距離に気を付けてくれ。」

「了解しました。」

「僕はまず棒人間を第2防衛線の方に誘導する。渡らせたくないはずだから、こちらを追ってくるはずだ。」

「はい、相手の隙をついて突入します。」

「頼むぞ。」

ゼクールがキャットストリートの手前で、第3連隊と交戦しているりつを見つけた。ゴモに指示した。

「ゴモ、少し回り込んで防衛線の方へ向かうぞ。」

少し離れたところから、散弾で攻撃していたりとは、迂回して防衛線の方に向かっているスクーパーズを見つけた。

「また、あいつ。PARKに向かうつもりね。行かせない。」

りとは、ゼクールの方に向かって行った。

「うまく乗ってきたが、これからが勝負だ。」

ゼクールはりとを引き付けながらキャットストリートへ進み、キャットストリート上の低空での戦闘になった。防衛線の銃はゼクールを、第3連隊の攻撃はりとに向けられていた。その弾をかわしながらの戦闘で、両者とも十分に攻撃ができない状態だった。

「もっと速く動いて。」

りとは、ボードやタンクに関してそう念じていた。ゼクールも、自分の動きに不満だった。

「もっと俊敏に動けないのか。」

りともゼクールも、これまでの戦闘で、空間認識能力や判断力が高まり、その速度も向上していた。そのため、人間技、スクーパーズ技とは思えない速さで、遮蔽物がないところで第3連隊や防衛線からの攻撃を避けながら戦闘を継続していた。ただ、りとのボードやタンク、ゼクルールの飛翔能力の反応の限界でそれ以上の速さを出せないでいた。

りととゼクルの戦闘は続いていたが、ゴモはゼクルが言ったように、りとの周りでは防衛線の攻撃がほとんどないことを確認していた。そして、防衛線に突入する瞬間を探っていた。少しして、りとがゼクルを追ってゴモの目の前を過ぎようとするとき、ゴモがりとの下を通るように防衛線に突入した。ギンシアもほぼ同時に声を上げた。

「第3連隊突撃！」

ゴモを先頭に、ギンシア、第3連隊がりとの下をくぐり抜けて防衛線を突破しようとしていた。りとも気づいて、下に向けて散弾を発射した。

「させるか。」

第3連隊への攻撃を阻止するために、ゼクルが叫びながら、りと目掛けて突入してくる。りとは下の突入を止める方が先と考え、ゼクルの攻撃はボードで防ぎながら、ゼクルを攻撃せず、下のスクーパーズの攻撃に集中する。ゼクルはりととのボードに体を思い切りぶつけ、りととの攻撃を止めようとする。りととの傍によると、防衛線から攻撃が止まるため、りとへの攻撃がやりやすくなった。そのためゼクルは接近したままりとへの攻撃を続けた。

20体ほどのスクーパーズがキャットストリートを渡ることができた。20体はそのまま全速でPARKの建物の方に飛んで行った。りとは後を追おうとするが、ゼクルの近距離からの攻撃のため少しづつしか移動できなかった。それでもキャットストリートを渡り、裏原の方へ行こうとしたとき、ゼクルはりとに接近していき、りとのおすぐ横に自分では最強度のビームを発射した。りとが前から接近してくるゼクルに気を取られていると、後ろから強い衝撃を感じて、前に飛ばされた。ゼクルが近づいて来るりtoに向けてスクープビームを撃つたが、それは棒のようなもので弾かれてしまった。さらに、近づいて来るりとをゼクルは下に移動してかわした。さっきのりととの攻撃を見ていたゼクルが、建物にビームを反射させて後ろから当たったのである。しかし、りとを倒すことができなかった。

「反射で弱まったといっても、普通のスクープビームぐらいの威力はあるのに。やつもバリヤーを張れるんだな。反射で弱まったビームじゃだめか。でも、移動を阻止するには使えそうだ。」

りとは、敵の攻撃が当たったことに、動揺を隠せなかった。

「建物で反射させたの？怪我はしてなさそう。でも油断できない。慎重にいかないと。」
それでも、りとはPARKの方向へ進むことにする。

「PARKに行ったやつらを何とかしないと。」

逆に、ゼクルはりとから離れず付きまとい、ビームの壁の反射などを使いながら、簡単に奥に行かせないようにがんばっていた。

「こいつを奥に行かせちゃ第3連隊が危ない。何としてでも足止めしないと。」

道を渡ったギンシアは、奥に進みながらテレパシーで必死に呼びかける。

「王女様！、エビふりヤー閣下！どこにいらっしやいます。」

ゴモは壁の絵を見つけて位置を確認する。

「ここは初日に棒人間と対決したところだ。絵もそのままだ。」

みさとエビふりヤーたちは地下室で、戦闘の様子を見ていた。エビふりヤーは次々に消えていくスクーパーズ兵に心を痛めていた。その時に、ギンシアからのテレパシーによる呼びかけが聴こえた。そしてギンシアに答えた。

「ギンシアか。すぐ前の建物の地下にいるが、この建物の防御は堅い。今の兵力じゃ無理だ。急いで撤退するんだ。」

それを聞いたみさが、小声でエビふりヤーに言う。

「余計なことは言わないでいいですな。」

そして、ギンシアに呼びかける。

「ギンシアですな。みさですな。目の前のPARKという看板がある建物の地下にいるんですな。早く助け出して欲しいんですな。」

エビふりヤーは何も言えなかった。ギンシアがみさに答える。

「王女様、ご無事でいらっしやるようで、なによりでございます。わかりました、これより第3連隊は、王女様救出に向けて総力をあげて突入します。」

そう言うと、ギンシアはゴモに言った。

「ゴモ、第3連隊はこれより突入して、王女様を救出する。ゴモには、ここに残って連絡係を務めてくれ。我々が突入したら、敵の防衛装置の配置や威力を確認してくれ。そして、我々からの通信が1分間途絶えたら、王女様の居場所や敵の防衛装置の配備をガーチューンに伝えてくれ。頼む。」

ゴモは答えた。

「いまから上昇してビーム攪乱幕の援護を要請します。突入はその後にして下さい。」

「いや、後ろから棒人間が迫っている。またここにもファンが設置してあるだろうから、それほど効果はないだろう。突入は早い方がいい。」

「わっわかりました。1分間連絡が途絶えようでしたら、ガーチューン連隊長に状況を報告します。」

「うむ、頼むぞ。」

「いえ、ギンシア隊長が王女様を連れ帰りますので、私の役割は不要かと思えます。」

「ははは。そうだな。」

ギンシアは、20体ばかりになった隊員に命令を発した。

「これから、あの建物に突入し、地下室を探し出し王女様を救出する。いくぞ。突撃！」

長々と訓示している時間はなかった。第3連隊の生き残りの隊員たちは、歓声を上げて建物に突入していった。それに応じて、エビふりヤーの言った通り建物から今までにない威力と高い密度で、散弾の攻撃があった。第3連隊の歴戦の勇士たちは必死にそれをかわそうとした。何体かはギンシアの盾になって、ギンシアを建物に到達させようとした。だが、第3連隊の全員が建物に

近づくとなく消えてしまった。

「ガーチューンへの連絡を頼むぞ。」

ゴモはギンシアからの最後の通信を聞いた。第3連隊の全滅は明らかだったが、ゴモは隠れて1分間待った。ギンシアからの連絡がないことを確認して退却を考えたが、連絡事項をゼクールに伝えて、自分はこちら側で情報収集をすることにした。第3連隊の犠牲を無駄にはしたくなかった。

ゼクールの方に向かおうとしたとき、りととゼクールが争いながらやってきた。りととゼクールはゴモしかいないことを見つけて、戦闘が休止した。りととPARKがある建物側に回り込んだ。ゼクールはその手前の建物の陰に半分隠れた。ゴモはその後ろについて、今起きたことを伝えた。

「王女様は、PARKという看板がある建物の地下にいらっしやいます。ギンシア隊長との会話を聞きました。その後、第3連隊はその建物に突入しようとして全滅しました。建物の防衛は明治通りの防衛線よりも強固です。データを送ります。」

「ありがとう。僕とお前だけじゃ突破は無理そうだな。」

「はい。」

「どうするべきか。」

「私はこちら側に残ります。第3連隊の犠牲を無駄にはしたくないです。ゼクール軍曹は一度連隊に戻って、連隊長に状況を伝えてください。」

「大丈夫か。」

「はい、隠れるのは得意です。」

「よし、そうしよう。その前に、ここから王女様に呼びかけてみる。」

「はい、ここならば、たぶん届くと思います。」

ゼクールは最高強度のテレパシーで通信する。

「王女様、聞こえますか。第8連隊のゼクール上等兵です。王女様。」

みさは、エビふりヤーに黙っているように合図しながら答える。

「第8連隊、ガーチューンの部下ですな。私とエビふりヤーはPARKがある建物の地下にいるですな。」

「承知しました。すぐにでも助け出したいのですが、戦力的に難しい状況です。残念ながら第3連隊は全滅してしまいました。ただ状況は分かりましたので、これから連隊に戻りまして、作戦を立て直します。」

みさは、父の命令とは言え、すぐそばで自分を救出するために第8連隊が全滅したことを見て、少し動揺して迷っていた。

「有難うですな。でも、急がなくても良いですな。相手に従っていれば、相手は危害を加える感じではないですな。ごはんもおいしいですな。」

「そうですか。それは良かったです。第11連隊と協力して、必ず助け出します。」

「感謝するですな。よろしく願いますですな。」

ゼクルルは、こんな状況でも王女様と直接会話できたことが嬉しかった。それに無事で元気だったこと、安全そうなことにほっとした。

「やっぱりやつらの目的は王女様でなく、我々を殺すことか。しかし、狩りを楽しんでいるようには見えないな。相手もかなり必死のように感じる。どう思うゴモ。」

「訓練。あるいは試験。我々を全滅させれば昇進できるとか。」

「そうか、それはあるかもな。とにかく、相手が倒れるか、我々が倒れるまで終わらないということか。」

「王子様のとくと逆で、相手を倒して終えましょう。」

「そうだな。では2手に分かれるぞ。僕は来た道を帰る。ゴモはどこかに隠れてくれ。水と食料はビーム攪乱幕といっしょに投射するようにする。」

「有難うございます。」

「気をつけてな。では行くぞ。」

2体は二手に分かれて、PARK建物から遠ざかった。

「二手に分かれたの。」

りとはそうつぶやいた。そして、迷わず通信で無事なことはわかっていたが、まりのところへ行くことにした。攪乱幕の隙間から下に速いスクーパーズが東急プラザの方に飛んで行くのが見えた。

「こいつが行ったら、まり1人じゃ危ない。」

りとは、全速力でまりのところに向かった。

一方、まりはゾロモと道を挟んで、東急プラザとラフォーレで狙撃戦を展開していた。ラフォーレを壊したくないまりは、慎重に狙ってリア銃で攻撃していた。

「正確な射撃だわ。でもこの盾ならば、相手の攻撃を防げる。」

そう言いながら、屋上を移動しながら攻撃していた。

ラフォーレでは、第111分隊の他の隊員が交代で警戒する中、ゾロモが攻撃を行っていた。ジャモチャがゾロモに伝える。

「相手は、南に移動しました。」

「そう、ありがとう、ジャモチャ。でも相手のシールドが強力で打ち抜けないわ。攻撃のために、射撃手が体を出した時がチャンスよ。」

「はい、相手が攻撃しようとしたら伝えます。それまで隠れていて下さい。」

ゾロモは攻撃の機会を伺うため、隠れたまま南に移動する。ジャモチャが、ゾロモに伝える。

「射撃手、こちらの様子を伺っています。」

ゾロモが身を乗り出して撃とうとすると、まりは身を潜めた。

「射撃チャンスを作れるほど、体をさらしてはくれないか。」

「あまり何度か狙撃したが、すぐに身を隠さなくてはいけないためにあまり頻繁に射撃はできなかった。ジャモチャがガジメとゾロモに提案する。」

「相手の気を引き付けるために、人間の服を着て動くのはどうでしょうか。昨日、射撃手が手に持っていたものです。」

ガジメが言う。

「目的はわかるが、危険だぞ。」

「はい、わかっています。」

「そうか。わかった。だが、長時間身をさらすんじゃないぞ。」

「はい、わかりました。」

そのとき、ジャモチャの婚約者のリコが上申した。

「ガジメ隊長。私もやります。2体でやった方が効果的だと思います。それに、相手の意識が分散されて、より安全になると思います。」

少し考えて、ガジメが答えた。

「危険な任務だがお願いできるか。確かにリコが言う通り、2体でおとりになった方が全体としても危険が減少するな。」

「はい、わかりました。」

嬉しそうに、リコが答えた。そして、ジャモチャに答えた。

「2体で頑張ろう。」

「うーん、俺は反対だが。でも、やるんだよな。」

「まあね。私のこと良くわかっていてくれて、嬉しいわ。」

「じゃあ、俺の斜め後ろにいてくれ。」

「えー、後ろに、まあいいわ。」

そう言うと、ジャモチャとリコは服を取りに行った。ガジメがゾロモに言う。

「ジャモチャとリコが敵の注意を引き付けたら、俺がタイミングを指示する。その時まで、隠れている。」

「はい、わかりました。」

2体は服を着た後、屋上に向かった。

「どうジャモチャ、人間みたい。」

「人間より全然可愛いよ。」

「ほんと？ありがとう。」

「それより、気を付けて。」

「わかってるって。でも、相手の銃は大きいから動作が遅くて大丈夫。撃とうとしたら隠れられる。」

「そうだけど。気を付けて。」

「心配性なんだから。」

屋上になると、ガジメが注意をする。

「俺も見ているが、相手が射撃動作に入ったら隠れるんだぞ。」

ジャモチャが答える。

「はい、初めは私だけで出てみます。」

そう言って、ジャモチャが屋上から姿を現す。ガジメが離れたところから東急プラザ屋上にいるまわりを監視する。まりがシールドのわきからジャモチャをちらちら見ているのが、わかった。ゾロモに言う。

「気になってる様子だが、いまの状態ではまだ射線が取れない、もう少し、待っていてくれ。」

一方、まりは、明治通りの様子を監視カメラで見ていることと通信しながら、東急プラザの屋上にボードを立ててシールドとして、スクーパーズと対峙していた。ことから通信が入った。

「まりちゃん、今、PARKのすぐ前まで、スクーパーズが20体ぐらいやってきた。」

「大丈夫だった?」

「りとちゃんと協力してやっつけたから大丈夫。」

「そう。りとも大丈夫?」

「うん、元気に飛んでいる。」

「そうね。」

戦闘中ではあるが、飛び回っているりとこの姿を想像して、少しクスッとなった。

「まりちゃん、ラフォーレの屋上からの攻撃は続いているの?」

「うん、こっちも打ち返しているけど、お互い決定打に欠けるかな。でも、私の仕事は、これ以上スクーパーズが道を越えないようにすることだから、このまま頑張る。」

「ごめんね。もう少し落ち着いたら、修理に行くから。」

「わかってるって。いまはことこは、PARKを守っててね。」

「わかった。ただ、こっち側にはスクーパーズは、ほとんどいなくなったみたい。1体が逃げ帰る途中かな。りとちゃんは、まりちゃんのところに向かってる。」

「そう、良かった。りとが来てくれると心強いわ。」

「安心したら、おなか空いてきちゃった。」

「うふっ、ことこは。」

「えー、だって昼ごはん食べていないし。」

「そうだね。」

「じゃあ、これが終わって、防衛線を直したら、昼ご飯にしよう。」

「そんなに簡単に治るの。」

「大丈夫、建物1つ分だから。明治通り全体の防衛線とは違うよ。」

「まあ、長さ1キロぐらいありそうだもんね。それに比べれば、昼飯前？昨日はお疲れさまでした。」

「えへへ。ありがとう、まりちゃん。」

「それはこっちのセリフ。ところで、スクーパーズに動きはない？」

「うーん、屋上では動いているようだけれど、あまり大きな動きはないよー。」

「そう、よかったわ。じゃあ、また。」

「またね。なんかあったらいつでも呼んでね。」

「了解。」

そう言って通信を保留にすると、ラフォーレの屋上を見てみた。

「あれ、私がデザインした服を着ている。やっぱり、スクーパーズが着ても可愛いわね。」

少し横を見ると、もう1体がこちらの様子を伺っているのが見えた。

「危ない、危ない。こっちを誘っているのが見え見えよ。」

それでも、気になってシールドのわきからチラチラ見ている。

「やっぱり、丈はもう少し縮めたいわね。あと、やっぱり宇宙人だから可愛い宇宙柄も作ってみたいわ。」

その時、まりの尊柄の服を着た2体目のスクーパーズが現れた。

「うん、これもいい。」

思わずまりは、頭半分をシールドから出して見始めた。

その瞬間に、ガジメがゾロモに指示を出す。

「今だ。」

「はい。」

ゾロモが半身を出し、まりに向けて射撃した。まりは、射撃に気づいていないようだった。第11分隊の全員がゾロモの腕ならば弾がまりに当たると確信していた。

その瞬間である。超高速で東急プラザの前を横切る物体があった。それは、りとのボードだった。自分が行っては間に合わないと思ったりとが、ボードを先に行かせたのである。ボードでゾロモのビームを跳ね返した。りとはボードが無くなって自由落下をしていたが、ボードが弾を弾いたのを見て息をついた。

「間に合った。」

逆に、弾かれたゾロモのビームは、ラフォーレの方に向かっていった。それを見ていたガジメが指示する。

「伏せろ。」

ビームはラフォーレの屋上の柱に当たって、リコの方に向かい、リコを守るためにリコの前に立ちふさがったジャモチャに命中した。ジャモチャは、ラフォーレの屋上の床に落ちた。「ジャモチャー！」

屋上にいた第111分隊の全員が叫ぶ。そして、リコがジャモチャに呼びかける。

「ジャモチャ、ジャモチャ、消えないで。」

ジャモチャが震えながら答えた。

「なんか、気持ちが悪い。体の中から、引っ張られるようだ。」

「私が心で引っ張り返すから、負けないで。」

「わかった、負けない。」

そのときゼクルルからのテレパシーで連絡が入った。

「ラフォーレ屋上のスクーパーズ！上から棒人間の攻撃がある。早く隠れる。」

その連絡を聴いて、第111分隊隊員は退避を始めた。見ると、再びボードに乗ったりとが東急プラザの上空囲いの天井のすぐ下まで上昇していた。それを追って、ゼクルルも上昇していた。りとはラフォーレの屋上目掛けて攻撃しようとしていた。

「みんなが退避する時間を稼がなきゃ。」

ゼクルルが、遠くて当たるとは思えなかったが、りと目掛けて連続して射撃した。りとは、ボードでゼクルルの攻撃を防ぎながら、ラフォーレの屋上を狙って散弾を数発放った。そして、りとは下降してゼクルルを攻撃しようとしたが、ゼクルルもここで戦闘をしても勝てる見込みがあまりないため、下降して明治通りを渡りラフォーレの裏側に退避した。りとも、無理はせずに東急プラザ屋上のまりのところへ降りて行った。

ラフォーレの屋上では、まりへの射撃のため退避が遅れたゾロモをガジメがかばっていた。散弾ならば、ガジメのバリヤーで耐えることができたため、2体とも無事だった。ゾロモがガジメにお礼を言う。

「分隊長、有難うございます。」

「いや、無事でよかった。」

「分隊長も。」

二人は見つめあっていたが、ジャモチャの叫びで長くは続かなかった。

「リコ、リコ、リコー。」

リコは、動けないジャモチャをかばって、散弾を多数浴びて消滅してしまった。ガジメが、ジャモチャに尋ねる。

「リコは。」

「私をかばって消えてしまいました。俺はいいから、早く隠れろと言ったんですが。」

「そうか。」

「棒人間はどこにいます。私が行って刺し違えても倒してきます。」

「その傷じゃ無理だ。リコが自分の命を懸けて守った命だ。無駄にするな。」

「しかし。」

それ以上ジャモチャは何も言わずに、屋上に落ちていた三日月のアクセサリーを見て涙を流し

ていた。そして、心の中で棒人間への復讐を誓っていた。

ガーチューンや参謀たちは、ゼクルから報告を受けた。その内容は、第3連隊が壊滅したこと。王女様は最初に射撃手がいたPARKという看板のある建物の地下室に居ること、その手前の道にも防衛線が張られていること、そして、建物はかなり強固に守られていること、である。ガーチューンがアルドアに尋ねる。

「アルドア、この状況を突破できる作戦はあるか。」

「はい、最終手段になりますが、戦艦の旋回主砲を分解して運んで攻撃に使おうと思います。」

「戦艦の主砲か。第3連隊の技術参謀が言ってたやつだな。」

「はい、第3連隊の活躍によって、王女様の存在位置がほぼ確定しました。そして、その建物はかなり強化されて、かつ王女様が居る場所は地下室です。戦艦の主砲の弾がその建物に直撃さえしなければ大丈夫です。ですので、戦艦の主砲で発射装置が設置されている防衛線の建物を攻撃します。また、主砲のまわりには適度にビーム攪乱幕を張ります。そうすれば、敵の攻撃は無効化され、散弾よりパワーがあるこちらの攻撃は有効なはずですよ。」

「なるほど、準備にどのくらいかかる。」

「移動とパワーラインの敷設に2日間は必要と思います。」

「2日は長いが、それしか方法はないだろう。2日後ならば第1連隊も到着するはずだから、共同して作戦に当たろう。」

「はい、そして明治通りの手前からキャットストリートに主砲を運ぶのに半日。」

「キャットストリート？」

「はい、地球人の地図を見ました。すぐ前の通りを、明治通り、その奥のもう一つの防衛線がある通りをキャットストリートと呼んでいるようです。」

「そうか、変わった名前だが、まあ、いい。」

「さらに、キャットストリートから王女様が捕らわれている建物まで、主砲を運ぶのに4時間と見積もっています。戦艦主砲の威力は大きいので、建物に対しては、エビふりャー様と連絡をとりながら慎重に攻撃する必要があります。」

「わかった。戦艦の艦長には私から連絡する。大至急取り掛かってくれ。」

「分かりました。」

この話を横から聞いていたガジメがジャモチャに言う。

「ほら、2日後、戦艦の主砲を使って攻撃だ。連隊長を信じるんだ。」

ジャモチャは泣きながら答える。

「分かりました。2日後までに傷を直して、敵を殲滅するお手伝いをします。」

「そうだ。頼りにしているぞ。」

「はい。」

一方、東急ブラザの屋上では、まりのところに行ったりとがまりに尋ねる。

「大丈夫？」

「うん、りとははじき返してくれたから。でも、またやっちゃった。服に気を取られて。」

「まりがデザインした服だね。スケッチした覚えがある。」

「そうだったわ。私がイメージした通りの服の絵を描いてくれて、嬉しかった。」

「まりがデザインした服じゃ、仕方がないかな。私も、たとえスクーパーズでも、私の描いた絵を見ていたら、やっぱり嬉しくなると思う。」

「わかるわ。」

「とりあえず、明治通りを渡ってきたスクーパーズは、撃退したと思う。」

「ここもそう言っていたわ。それで、ここを修理して、それからランチにしようって。」

「それがいい。ここに連絡してみる。」

りとはここに連絡する。

「ここ、スクーパーズは今日はどう来ないと思うけど、修理に取りかかれる？」

「うん、センサーを確認しているけど、もうこっちにはスクーパーズはいなそう。」

「了解。一度PARKにもどるから、一緒に行こう。」

「えー、一人で行けるよー。」

「念のため。」

「わかったー。PARKで待ってるね。」

「お願い。」

りとはまりにここを連れてくることを伝える。

「じゃあ、ここを連れてくるから、少しだけ待ってて。」

「わかったわ。もう油断しない。」

「動きの速いスクーパーズが来たら、キャットストリートまで逃げてね。」

「そうするわ。でも、今日はもう来ない気がするわ。」

「私もそう思うけど、念のため。」

「了解。」

「じゃあ、行ってくるね。」

そう言うとりとはさらに速くなった速度でPARKへ向かった。PARKに到着するまで10秒かからなかった。PARKに着くと、ことが驚いてりと言った。

「もう着いたの。」

「うん、早い方がいいと思って。」

「すぐ支度を終えちゃうから、ちょっと待ってて。」

「わかった。」

そう言って、東急ブラザの方を見ながらここを待った。ことこの準備が終わると、2人でまり

のところ飛んで行った。

「ことも飛ぶの上手になった。」

「ありがとう、りとちゃん。防衛線の構築のために、飛んでるからかなー。習うより慣れろだよー。」

「うんそうだね。防衛線、いつも助かっている。」

「そんなことはないよー。りとちゃんが一番頑張っている。」

「そんなことはない。ここがいなかったら、PARKは守れない。」

「それより、いま、スクーパーズが減ってきたことだし、ラフォーレ原宿を取り戻す方法を考えられているの。夕食の時に詳しく話すね。」

「さすが、ここ。期待している。」

「でも、今は明治通りの防衛線を直さなくちゃ。」

「そうだね。お願い。」

そういう話をしている間に、東急プラザの屋上に到着した。ここは、早速修理に取り掛かった。まりは屋上でスクーパーズの監視。りとは、ここに付いて護衛を担当した。ここは、1時間ほどで修理と調整を完了した。ここがりとに作業の完了を報告する。

「りとちゃん、終わったよ。」

「お疲れ様、ここ。じゃあ、まりとPARKに帰ろう。」

「了解。」

2人はまりを迎えに行き、PARKへ向けて出発した。りとは様子を見るために、

「ちょっと、上に行って様子を見てくるね。」

と言って上昇していった。あたりを見回し、明治通り、キャットストリート、ラフォーレやPARKの様子を見た。そして、

「あれが、さゆみんのお店。」

と言いながらその方向を見ると、店の前にスクーパーズが1体いるのを発見した。まりとここに、

「さゆみんのお店の前にスクーパーズがいる。見て来るから、先に帰っていて。」

そう言って、りとはさゆみんのお店の方にもすごい速さで飛んで行った。

「りと、ちょっと待って。」「待って、りとちゃん。」

そう言いながら、まりとこともさゆみんのお店に向かった。

その日の朝早くから、市ヶ谷の防衛省の地下では、安全保障会議が招集したスクーパーズ対策科学技術専門委員会が開かれていた。まず、文科省副大臣から説明があった。

「皆様に緊急にお集まり頂きました理由は、他でもない、スクーパーズと称する宇宙人に対して、その対応を学術的な面からサポートして頂くためです。予想もしていない緊急事態ですので、忌

憚らない意見をお願いします。それを集約して実質的で有効な対応案を生み出せたらと思います。」

それでは、委員長から自己紹介をお願いしますでしょうか。

「帝都工業大学の石橋邦彦です。この度は委員長を務めさせて頂きます。専門は機械工学と機械材料です。この国難、いえ、世界の困難に対処できるように、全力を上げたいと思っています。」

「帝都大学の永井です。物理学を専門にしています。超光速航行を可能にする理論に注目していきたいと思っています。」

「帝都大学の加藤です。宇宙物理学を専門にしています。超光速航行やスクーパーズの星について注目していきたいと思っています。」

「帝都工業大学の諏訪です。原子力を専門としています。特に、生物に与える影響に注目していきたいと思っています。」

「帝都工業大学の東堂です。計算機科学を専門としています。スクーパーズの情報分析に当たりたいと思います。」

東堂教授に事務方から注意があった。

「東堂先生、この件に関しましてはツイッターなどのご利用はご遠慮ください。」

東堂教授は、周りを見回しながら答えた。

「わ、わかりました。」

そして自己紹介が続いた。

「帝都大学と理科学研究所の杉里です。機械学習を専門にしています。スクーパーズも人工知能を使っていると思いますので、それに焦点を当てて調べていきたいと思っています。」

「宇宙技術研究所の糸山です。スクーパーズの宇宙船について注目していきたいと思います。」

「産総研の遠藤です。ナノ材料応用に関して研究しています。スクーパーズが使っている材料の応用に焦点を当てたいです。」

「同じく、産総研の今村です。スピントロニクスに関して研究しています。スクーパーズの電子材料に焦点を当てます。」

「山陽重工の根本です。スクーパーズの宇宙船の製造技術に焦点を当てる予定です。」

「防衛科学技術研究所の土門です。スクーパーズの兵器技術に焦点を当てたいと思います。」

事務方から技術専門委員会の現在の役割が説明された。

「皆様に、現在調査して頂きたいことは、スクーパーズや彼らの宇宙戦艦の能力や仕組み、その構造です。また、原宿の状況に関しても早急の調査が必要と思います。」

石橋委員長が少しわくわくした感じで発言する。

「ともかく、緊急性を要します。スクーパーズや宇宙戦艦を調査することは現状不可能と思われるます。原宿の囲いについては、スクーパーズがすべて原宿駅側に集まっっていて、六本木側に全くいない状況です。ですので、六本木側から囲いを調査をしようと思います。私は行きますが、他

に調査を希望される方はいますか。」

事務方が説明を追加する。

「多少の危険は伴うと思いますが、自衛隊が護衛しますので、是非、お願いします。現在、スクーパーズに関して調査できることは、その囲いぐらいしかない状況です。」

諏訪委員が答える。

「はい、遠距離からのレーザー分光の観測結果からも地球上の物質とは全く異なっていることがわかっていきます。その壁の構造と人間・生物に対する影響は、早急に調べる必要があります。」

「ありがとうございます。」

「研究室に、非常に優秀な博士課程学生がいるのですが、連れて行って良ろしいでしょうか。」

「はい、本人の承諾が得られれば良いと思います。万一の補償は政府が責任をもって行いたいと思います。」

「有難うございます。学生はぜひ調査したいと言っていましたので、大丈夫だと思います。」

「わかりました。同意書の様式をお渡ししますので、出発時にサインの上提出するように言っておきます。」

「研究室にある分析装置を持って行きたいのですが。」

「自衛隊の車を先生の研究室に向かわせます。それで、学生と分析装置を運ぼうと思います。」

「有難うございます。学生に至急準備するように伝えます。」

石橋委員長がまとめる。

「それでは、石橋とうちの浦藤助教、諏訪委員とその博士学生で原宿の囲いの調査に当たりたいと思います。出発は。」

事務方の方を見る。

「帝都工業大学の学生は7時30分、ここからは8時00分に出発したいと思います。現地には、8時30分の少し前に着くと思います。」

「わかりました。では諏訪委員、学生への連絡と準備をお願い致します。」

石橋委員長らが、軽装甲機動車3台で第1空挺団の隊員に護衛されながら原宿の六本木側の囲いに向かった。途中で、帝都工業大学諏訪研究室の学生と合流し、9時前には囲いの前に到着していた。到着すると、まず、陸上自衛隊員が下車して周辺監視にあたった。その後、4名が下車した。石橋委員長が浦藤助手に分析機器の設置を依頼する。

「僕も手伝うから、電子線X線分光器の設置をしよう。どこがいいかな。みんな同じに見えるので、とりあえずは設置しやすいところから始めよう。」

「はい、わかりました。」

諏訪委員が学生に尋ねる。

「桐谷君、ガンマ線回旋検査装置の設置場所どこがいいかな。」

「石橋先生がおっしゃいますように、違いがわかりません。装置が互いに影響しないぐらい離し

て、設置しやすいところにしましょう。」

「そうだね。あの辺かな。」

「はい、あそこがいいと思います。」

「じゃあ、装置は私が運ぶよ。」

「いえ、私が運びます。」

それぞれの機器を設置したのち、電源やコンピューターとの接続を終えて、機器を立ち上げ始めた。その音を聞いて、諏訪委員が石橋委員長に尋ねる。

「(Windows)XPですか。」

「いや、なかなか更新する予算がなくて。」

「諏訪先生のところは、(Windows)10じゃないですか。すごいですね。」

「去年予算がついて、やっと買えました。良かったですよ。今回に間に合ってます。」

「私のところの機器はですねー。もともとは古いんですけど、センサーを徐々に研究室で改造していまして、分析精度ならば最新機器に負けることはないですよ。」

「そうですか。さすがですね。」

「ただ、校正や検査自体に手間と時間がかかるのが欠点です。」

「うちは、桐谷君がとても優秀で、最新機器なのにそれを改造して、現在の世界最高性能の分析装置だと自負していますよ。」

「いいですよ、そういう学生。将来が楽しみだ。」

「はい。」

委員長と委員が笑いながらどうでもよい話をしている間に、助教と学生が機器のスタートを終え、データを取り始めていた。取得したデータは、帝都工業大学の計算機センターにあるサーバーコンピュータに送られ、東堂教授の協力のもとその解析を開始していた。

諏訪委員が学生に話しかける。

「どうかね。」

「中性子ですね。」

「中性子?」

「はい、中性子だけで膜状になっています。強い相互作用で結合しているようです。」

浦藤助手も答える。

「そうです。電子がありません。中性子が通常の物質の原子間距離の千分の1ぐらいの距離で密集している感じですよ。」

石橋委員長が言う。

「なるほど、それは興味深いな。サンプルは取れないかね。」

「表面がとても硬くて無理だと思います。結合エネルギーから推測すると、ダイヤモンドより1

0億倍程度硬いのではないでしょうか。」

「そうかー、そんなに固くちゃ無理だなー。残念。」

諏訪委員が言う。

「できることは限られていそうだけれど、少しでも正確なデータを集めよう。中性子間距離の分布、結合エネルギー、膜の厚さ、比熱、なんでもいい。集められるだけのデータを集めよう。」

「わかりました。」

その時である。監視にあたっていた自衛隊が叫ぶ。

「スクーパーズです。」

あたりに緊張が走り、軽装甲機動車はエンジンを始動した。その隊員が指さす方をみると、1体のスクーパーズが遠くの方を飛んでいた。初めこちらをちよつと気にしたようだったが、他の仕事のためか人間をそれほどは気にしてはいないような感じだった。

石橋委員長がつぶやく。

「あっちも、囲いを調査しているのかな。」

諏訪委員が答える。

「どうでしょう。」

少しだけ時間が経って、スクーパーズは遠くへ行ってしまった。石橋委員長が言う。

「もう少し待って、何も起きないようでしたら作業再開です。」

自衛隊隊員が双眼鏡であたりを確認するが、スクーパーズらしきものは現れなかった。石橋委員長が作業再開を命じた。浦藤助教と桐谷は位置を変えながら中性子の囲いを綿密に計測した。浦藤助教が桐谷に話しかける。

「どうですか。何か分かりました。」

「はい、中性子の結晶構造が分かりそうです。」

「そうですね。こちらは何とかそれをつかめそうです。もう少し分析装置のエネルギーを上げられると良いのですが。」

「こちらもそうです。」

「でも、この構造だと特異点ができて、不安定な部分ができそうですね。」

「はい。それが原因で原宿駅の方に、穴が開いているのではないかと思えます。」

「なるほど、そうですね。その通りです。それにしても、この囲いはスクーパーズが作ったのでしょうか。」

「いえ、彼らにはできないと思います。」

「なんで、そう思うのですか。」

学生は慌てたように。

「いや。何ででしょう。戦艦で壊そうとして壊せなかったからかな。」

「そうですね。では、あのエビフライ星人とかいう宇宙人が作ったのでしょうかね。」

「どうでしょう。ちょっとわかりません。」

「そうですね。今はデータを集めることにしましょう。帰ったら、もう少し分析できると思いますが。量子色理論でモデルを作ってシミュレーションして、データと照合してみましよう。」

「はい。お手伝いします。」

それを聞いていた石橋委員長が嬉しそうに言った。

「いやー、諏訪先生の学生さんも優秀ですね。」

「そうですね。二人とも頼もしいです。」

そして、二人で笑った。2名の教授が談笑をしたり、機器を運ぶのを手伝ったりしているなか、特に桐谷が全く休まず観測しているため、石橋委員長が声をかけた。

「それにしても、熱心に計測していますね。面白いですか。」

「はい、大変興味深いということもありますが、この囲いの中に私の恋人がいます。」

「えっ、高校生が恋人さんなんですか。」

「いえ、クレープ店の店員の方です。」

「あー、鈴木彩友美さんですか。写真では美人さんでしたね。うらやましい。」

「あの申し訳ありませんが、先生、作業を続けてよろしいでしょうか。」

「あっ、ごめんなさい。続けてください。」

ぼつが悪そうに、石橋委員長が諏訪委員に話しかけた。

「じゃまするなって、おこられちゃいましたよ。」

「じゃましちゃいけませんよ、石橋先生。ははは。」

「そうですね。こちらでデータでも見ていきましょう。」

「そうですね。」

しばらく、4名が各々の作業を続けていると、自衛隊の監視員が叫ぶ。

「また、スクーパーズです。今回は2体。」

再度、軽機動装甲車のエンジンがかけられた。自衛隊の隊員が銃や110mm無反動砲に手をかけた。今回は立ち去らずにゆっくりとこちらに向かっていた。自衛隊の隊長が隊員に声をかけた。

「あわてるな。向こうが攻撃するまで攻撃するな。」

石橋委員長も言った。

「そうですね。攻撃するならば、もう攻撃してきてもおかしくない距離です。警告しに来たのかもしれない。」

諏訪委員も答えた。

「データもかなりとれましたし、警告を受けたら、素直に引き上げることにしましょう。」

「そうですね。」

「浦藤君、桐谷君、もうそろそろ引き上げる準備をして下さい。」

スクーパーズ2体が石橋委員長がいるグループのそばにやってきた。そして、翻訳機を使って語

りかけた。

「地球のみなさん。」

石橋教授が諏訪教授に少し嬉しそうに小声で話しかけた。

「『地球のみなさん。』とききましたよ。」

スクーパーズは続けた。

「私たちは、スクーパーズ宇宙遠征軍、第1師団第3連隊所属の技術参謀のボナダ少佐とダルガ少尉です。」

いつもニコニコしている石橋委員長も少し緊張して答える。

「私はこの責任者、石橋邦彦技術検討委員会委員長です。こんにちは、ボナダ少佐とダルガ少尉。」

スクーパーズが、見合わせた後に用件を伝えた。

「こんにちは、石橋委員長。私たち2体は地球人に降伏します。局所銀河群条約に従った保護を求めます。」

予想外の内容に、石橋委員長と自衛隊護衛隊長が顔を見合わせた。

りとがまりを連れラフォーレを脱出して明治通りを挟んだ東急プラザ側に逃げようとしたとき、2人を追ったパドとイワタは、東急プラザに設置されていた散弾の発射装置から放たれた散弾が命中して深手を負い飛べなくなつて落ちていった。被弾したイワタは、バリヤーで散弾を防いだり機敏にかわしてラフォーレの方に撤退していくガジメたちに向かってテレパシィで叫んだ。

「ちくしょう、推力がでない。誰かスクープビームで引っ張ってくれ。」

この叫びに気づいてスクープビームで引っ張ってもらえれば、落下を止めることはできたかもしれない。しかし、他の隊員は散弾をかわずことに集中していて2体を助ける余裕はなかった。それに単に引っ張られただけの状態では、散弾の餌食になるしかなかったことも間違いではない。そのため、2体を置いて撤退した隊員を責めることはできない。

そうなると、イワタは重力に引かれて落ちるしかなかった。そのまま明治通りの東側、裏原側の路地に落下した。地面に落ちた後、なんとか転がって建物の陰に隠れた。とても痛かったが、再度飛行を試みた。しかし、

「飛べない。飛べない。」

と焦るばかりだった。本隊へのテレパシィ通信も試みたが、テレパシィも非常に弱まっていたため通信することができなかった。棒人間たちが来るのが怖かったが、その場所にいる以外は何もできなかった。携帯型医療セットで傷の応急処置をした。傷は浅くはなかったが、消滅してしまうほどでもなかった。1体では心細いので、パドを探がそうと思った。銃声は止んだとはいえ、こちらは敵の勢力圏内なので、痛みに耐えておとなしくしている他はなかった。その間、家族のこと、友達のこと、これまで経験してきたことが走馬灯のように頭を巡った。

そうこうしているうちに、あたりが暗くなり夜になった。静かにしていると、遠くから足音が聞こえた。

「棒人間だったらどうする。」

恐怖が体に走ったが、息をひそめて隠れているしかなかった。そのまま行き過ぎてくれればと祈ったが、足音は大きくなるばかりだった。人影が見えた。そして、こちらにまっすぐやってきた。

「くそっ、見つかった。」

覚悟してスクープビームの発射を試みたが、怪我がひどくて発射することは無理だった。3人のうちの誰かだと思った。怪我していなくても敵うわけがないのに、この状態では絶対に無理と思い、イワタは観念した。

「お父さん、ごめんなさい。イワタは何もできないまま、ここで消えます。」

人間の手が伸びてきた。最後は潔くと思っただけだが、

「わー」

という悲鳴のような叫び声が出てしまった。ただ、斬られも、撃たれも、爆発もしなかった。美味しそうな匂いがした。少し大きな人間は、右手の先に三角形の柔らかそうなものを持っていた。

「たぶんスクーパーズさんが好きなアボガドクレープよ。食べて。」

翻訳機を持っていないイワタには言葉は直接は通じているわけではなかったが、食べると言っているように思えた。何だか良くわからなかったが、空腹だったしもう食べるしかないと感じたので、一口食べた。

「おいしい。なんだこれは。こんなおいしいものを食べたことがないぞ。」

傷の痛み、仲間が死んだ悲しみと、死ぬかもしれないという恐怖があったが、それを忘れさせるほどのおいしさだった。残りもバクバクと食べた。食べ終わったころ

「とりあえず、もう1体スクーパーズさんがいるので、いらっしやい。」

と言いつつ、ひょいと持ち上げられた。そして、その人間はイワタを持ったまま歩き出した。人間はイワタに向けて尋ねる。

「私は、さゆみんというの。原宿でクレープを作っています。クレープ、美味しかった？」

イワタは意味が分からないので、ただ人間を見ただけだった。人間、さゆみんが続けた。

「話を通じないのは困ったけれど。他のスクーパーズさんといっしょになれば安心するか。10分ほど歩いて、クレープ店の扉を開けて入っていった。そして、部屋のドアを開けるとそこには、やはり傷ついて飛べなくなったパドがいた。部屋の床にそつとイワタを下すと、パドがやってきた。」

「イワタか、大丈夫か。」

「はい、命はなんとか。」

「何だその応急手当は。だから新兵は。いい、俺がやり直してやる。」
そう言いながら、パドは応急手当をやり直した。

「これでいい。」

「有難うございます。痛みが弱くなって、楽になりました。」

「お前も捕虜か。」

「そういうことでしょうか。」

応急手当が終わったのを見計らって、さゆみんが2体に話しかける。

「あれだけじゃ足りないでしょう。またクレープを作るから待っててね。アボガトを基本にして、いろいろ作ってみるから。」

そして、調理場で楽しそうにクレープを作り始めた。

「スクーパーズさんにもクレープが美味しいなんて、すごいことよね。世界の人に私のクレープを食べて喜んでもらうことが夢だったけれど、今は世界でなくて天の川銀河。料理は星を越えるかな。我ながらすごいことになっている。」

イワタがパドに尋ねる。

「パドさんも、向かいの建物からの射撃が当たったのでしょいか。」

「そうだ。飛べなくなって隠れていたら、あの人間にここまで運ばれた。そして、三角形の食べ物ももらった。」

「あれ、すごくおいしかったですよね。」

「あんなおいしいものを食べたことはないな。」

「パドさんもそうですか。」

「ああ。」

お互いうなずき合った。イワタが今後のことを聞く。

「パドさん。これからどうします。」

「連絡も取れないし。すぐに殺されることはなさそうだから、おとなしくしていようと思う。そして飛べるようになったら、機会を見て飛んで逃げる。」

「わかりました。私もそれに賛成です。」

「それにしても扉にカギもかけないで、不用心な人間だな。」

「そうですね。軍人でなく民間人なんじゃないでしょうか。」

「俺もそう思う。とりあえず、今は体を治すために休むぞ。」

「はい。」

2体のスクーパーズは、何もしないで体を休めていた。イワタもパドの応急処置のおかげで痛みが引き、うとうととしながら、この2日間の戦いを思い出していた。

「ゼクルとゴモは無事だったのかな。俺ももっと強くならないと。それにしても、あの棒人間、何者なんだろう。この人間とどういう関係なんだろう。できれば出くわしたくないな。今はおとなしくして、隊にもどることを考えよう。」

しばらくして、さゆみんが何種類かのクレープを持ってもどってきた。

「スクーパーズさん、食べて。あと、お茶も持ってきたら、良かったら飲んでみて。」

パドがイワタに言った。

「毒が入っていることはないと思う。」

「はい、さつき食べても大丈夫でした。」

「それに、俺たちを殺すつもりなら、そんな面倒なことはしないだろう。」

「そうだと思います。」

「じゃあ、地球の料理を試してみることでしょう。」

「はい。」

そう言いながら、クレープを一つずつ食べ始めた。パドがイワタに話しかける。

「何だこれ、おいしい。さっきもそうだったが。」

「はい。本当にこんなおいしいものを食べたことはありません。」

「おれもだ。」

「もしかすると、美味しいもので、我々を手なずけようという考えでしょうか。」

「うーん。秘密を話させるためか。確かに手なずけられても良い美味しさだ。」

「パド上等兵、それはさすがに。」

「冗談だ。」

「ですよー。」

さゆみんが、2体に尋ねる。

「どれが美味しかった？」

ただ、言っていることが分からないようなので、クレープを一つずつ指さしながら、顔を向けた。パドがイワタに確認する。

「どれが美味しかったか質問しているのかな。」

「はい、そうだと思います。」

「どれが美味しかった？俺は3番目だ。」

「私は、2番目です。」

「まあ、どれが美味しいかは秘密事項ではないから、その前に移動して教えることにしよう。」

「はい。」

そう言うと、2体はそれぞれの好みのクレープの前に移動して、さゆみんの方を見た。さゆみんは、それを確認すると、

「うーん、アボガドと赤唐辛子と、アボガドとわさびか。スクーパーズさんは、甘いのはあまり好きじゃないのかな。グリーンペッパーや他の香辛料も試してみようかな。」

さゆみんは、新しいクレープのメニューを考えはじめていた。

「ここは開けておくから。帰りたくなったら、いつでも帰っていいわよ。けど、やっぱり危ないから、戦いが終わるまでここに隠れていた方が安全よ。」

そう言い残して、上の階へ上がって行った。扉は開いていても、パドとイワタは怪我が治るまではおとなしくしている方が良くないと思いい、そのまま横になることにした。おなががいつぱいで、疲れていたこともあってすぐに寝付いた。

突然話は変わって、ここはアンドロメダ星雲のデストロイヤーズ星、アンドロメダ星雲を支配するデストロイヤーズ帝国の本星である。時はスクーパーズが地球にやってくる20日くらい前だろうか。デストロイヤーズ帝国最強の戦士と言われるアムロディーがデストロイヤーズ帝国大本営に呼ばれた。デストロイヤーズが発するデストロイビームは通常は黒いが、アムロ

デューは白色のビームを発することができ、その威力も圧倒的だった。また、数々の困難な特殊作戦を成功させ、イケメンだったためデストロイヤーズの仲間からは、麗白の神と呼ばれていた。アムロデューがシャドウズ総参謀長の部屋に入る。

「アムロデュー、入ります。」

「ご苦労。アムロデュー、最近はどうかね。」

「はい、スクーパーズとの停戦が続いて平和で何よりです。」

「デストロイヤーズ最強の君がそれでは困るな。」

「参謀長、心配には及びません。毎日の訓練は欠かしていません。」

「そうか、そうだろうな。うむ、大声では言えないが、もうすぐスクーパーズとの停戦が終わる。作戦が順調に運んだら、スクーパーズ本星で君に活躍してもらわないといけない。」

「スクーパーズ本星で？」

「そうだ。スクーパーズ本星でだ。作戦の詳細はまだ言えないが、今までの争いとは全く違うぞ。」

「わかりました。第7連隊から近衛兵団に移ったというエビふりヤーとの再戦も近いというわけですね。」

「わくわくするかね。」

「いえ。ただ、これで戦いを終わらせることができれば、みんな安心するんじゃないかと思えます。」

「そうだ、その通りだ。宇宙艦隊の決戦で大筋は決まると思うが、本星を占領し、少ない損害で戦争を終わらせるためには、君たち地上軍、特に特殊部隊の活躍が是非とも必要だ。」

「はい、スクーパーズを含めて、民間の犠牲を少なく終わらせるためには、電撃作戦であるの知れ生命体の命をなんとも思わないスクーパーズ王を捕らえることが一番だと思います。」

「その時は頼む。ただ、スクーパーズ側も動いているという情報もある。この先どうなるか本当にわからない。」

「わかりました、どんな状況にも柔軟に対応できるように、訓練に励みたいと思います。」

「ああ、君の活躍に期待している。しかし、その作戦開始はもう少し先だ。今日呼んだのは別の任務のためだ。」

「どのような任務でしょうか。」

「うむ。長年追っていたデストロイヤーズの極悪なテロリストが、天の川銀河の太陽系にある地球という惑星に逃げ込んだことが最近わかった。特別高等憲兵を逮捕に向かわせるが、君はその護衛をお願いしたい。」

「天の川銀河で憲兵の護衛ですか。」

「そうだ。敵が抵抗する場合には、君にも憲兵を助けて欲しい。」

「そのテロリストは、そんなに強いんですか。」

「そうだ。強力なデストロイビームを撃つことができる。1連隊に匹敵する君と同程度のビームを撃つことができるとも言われている。また、テロリストにも部下がいるかも知れない。その場合に備えて、君が選んだ部下4名を連れて行っていい。」

「そんな強力なテロリストが。わかりました。人選を急ぎます。」

「ただ、さっきも言った通り重要な作戦の前だ。スクーパーズとの戦闘はできるだけ避けてくれ。」

「はい、わかっております。」

「では、出発は1週間後だ。地球に関しては、この戦争の前にスクーパーズから提供された古い情報しかないが、そのデータに目を通しておいてくれ。また、連れて行く部下の名簿は明日の12時までに参謀本部に報告してくれ。」

「はい、わかりました。」

アムロデューは他の銀河の惑星に行けることに少し心が躍った。

「天の川銀河の惑星か、どんなどころだろう。でもテロリストは、何でそんなところに逃げたのだろう。」

その理由は、大本営から帰る途中に見た地球に関するデータからすぐに明らかになった。アムロデューは驚いてつぶやいた。

「地球人の外見は我々とそっくりじゃないか。70億人もいるとすると、センサーを使って、探すのは大変そうだな。いずれにしろ、テロリストのデータは我々に開示しないようだから、我々は待っていればよいだけの話だが。」

1週間後、アムロデューは部下のベルシウス、ガン、ミヤブサ、テザーンを連れて、特殊工作艦に乗船した。特殊工作艦は、武装・装甲は貧弱であるが、きわめて高速に、そして補給を受けずに長距離を移動することができた。通常の戦艦は、ワープを繰り返しても1日に1万光年程度を進むのがせいぜいであるが、特殊工作艦はその十倍の速さ、1日に10万光年程度を進むことができる。そのため、デストロイヤーズ星から地球まで、30日弱で到着することが可能である。乗船すると、特殊工作艦のブローム艦長が迎える。

「いやー、アムロデュー大尉にお乗り頂くとは光栄です。」

「有難うございます、艦長。私の方が階級がずうっと下ですので、無用なお気遣いは不要です。ただ、体がなまらないための訓練施設を拝見させて頂ければと思います。」

「大活躍のアムロデューさんに比べれば、私など単に歳をとっているだけです。わかりました。訓練施設は今からご案内します。」

「場所を教えてくださいでもよいのですが。」

「いえいえ、是非、案内させて下さい。あと、誠に申し訳ないのですが。」

「なんでしょうか。」

「うちの娘がアムロデュー大尉の大ファンでして、サインなどを頂ければ。」

「もちろん構いません。ただ、子供が軍人のファンというのは。このご時世ですので仕方がないかもしれませんが、もっとのんびりした星でありたいですね。ところで、お嬢様のお名前は、なんというのですか。あと、おいくつでいらっしゃいますか。色紙にお名前と何かメッセージを書き添えたいと思います。」

「名前は、ブラウです。年齢は27歳です。」

「えっ、10歳ぐらい年上ですね。まあ、構いませんけれども。」

そういうと、艦長が差し出した色紙に「ブラウさんへ。自分に正直に。」という言葉添えてサインを記した。

「有難うございます。娘はいつも、アムロディー大尉、可愛い、可愛い、と言ってばかりで。」

「そうですか。可愛いですか。いろいろあるものですね。でも、それも嬉しいですよ。」

広くない艦内、居住区画前方の訓練施設に到着した。

「着きました。ここが訓練施設です。デストロイビームの射撃練習場もありますが、アムロディー大尉がフルパワーで撃つと艦が破損する可能性があります。そのようなときは、艦の外に出て撃って頂ければと思います。」

「外に出るのは構いませんが、外で撃ってスクーパーズに感づかれないでしょうか。」

「天の川銀河までは、スクーパーズがほとんどいないので大丈夫と思います。少なくともワープするときに発生する重力波よりは分かりにくいです。天の川銀河に入ると、フルパワーでの射撃練習は難しいかもしれません。」

「おっしゃること、了解しました。フルパワーでの練習は天の川銀河までとしたいと思います。」

「有難うございます。たとえ見つかっても、船足が早いので逃げるのは得意なのですが、天の川銀河でウロウロしていると、面倒なことの火種になりかねませんので、できるだけ発見されないようにしたいのです。」

「わかりました。」

「揚陸艦と同程度の訓練設備があります。VRでグループの訓練もできると思います。」

「それは嬉しいです。早速、今日から使わせて頂きたいと思います。」

「今日から、さすがです。あと、一つ気を付けていたきたいのは、高等憲兵との喧嘩を避けるようにして下さい。50名ほど乗っているのですが、全員が軍曹以上、指揮官は私より階級が上のガッセル准将ということですよ。そして、彼らは秘密をたくさん抱えているためか、滅多に部外者と話しませんし、名前も全員偽名らしいです。性格的にもかなり面倒な感じがします。」

「わかりました。そういう仕事なのでしょう。衝突しないように気を付けます。」

「有難うございます。もうすぐ出航の時間ですので、私はここで失礼します。航行の計画は送りします。30日弱の期間、訓練の間には食事などを楽しんでください。このコックは私が選びました。我々の任務は長旅が多いので、食事だけが楽しみです。」

「そうですか。私も料理を趣味にしていますので、どんな味か楽しみたいと思います。」
アムロデーは、部屋に戻ると隊員にいま聞いたことを説明した。その後で個室に入り地球に関するデータを見ていた。

「地球人は、我々デストロイヤーズ、地球人から見たら宇宙人か、宇宙人にどんなイメージを抱いているのだろうか。」

そんなことを考えながら、地球に関するデータの中にあつたアニメーションの中から宇宙人が出てくる面白そうなものを見ていた。

特殊工作船は、アムロデー隊と高等憲兵団の乗船が終わると、システムの最終確認を行い、その後出港した。アムロデー隊の全員は展望室でしばらく帰れないデストロイヤーズを見ていた。憲兵団の隊員も故郷を見たい気持ちには変わりがなかっただろうが、全員部屋に引きこもっていた。星や艦隊などの周りには、ワープによる急襲を受けないために、ワープジャマーが広範囲に張られていた。特に本星のジャマーは、その強力なバリヤーをワープですり抜けられないために、広範囲に張られており、デストロイヤーズ星の場合、その半径は12光時間に及んだ。デストロイヤーズ星のワープジャマーの圏内は亜高速で航行し、その圏外に出るためには1日以上を費やす必要があつた。ワープジャマーの圏外に出ると長距離ワープにより、一路、天の川銀河を目指した。

パドとイワタが朝を迎えていた。朝起きても、やることなく手持ちぶさたにしていると、さゆみんがアボガドとグリーンペッパーと玉ねぎを使ったサラダを持ってきた。イワタがパドに話しかける。

「これも、さっぱりしていて美味しいです。」

「その通りだな。朝の食事にはちょうどいい。」
飲み物のついてさゆみんが話しかける。

「コーヒーとお茶を持ってきたわ。コーヒー、美味しいかな。」

パドがイワタに話しかける。

「こっちは、昨晚と同じだな。こっちは、新しい飲み物だ。イワタ、飲んで見ろ。」

「毒は入っていないでしょうけれど。」

そう言いながら、コーヒーを飲んで見た。それを見たパドが尋ねた。

「どうだ。」

「苦いです。微妙な味です。」

「そうか。ちょっと、飲んでみるか。」

一口飲んでパドが言う。

「うーん、何だろうね。微妙な味だ。」

そして、2体はお茶を飲み始めた。パドが言う。

「こっちの方がいいね。」

「そうですね。」

それを見たさゆみんがつぶやく。

「コーヒーはあまり好みじゃないよね。じゃあ、ハーブティーとかいれてみようかな。」

そして、パドとイワタに向けて言う。

「今日のお昼はクレープね。夕食はパエリアの予定だけど、お口に合うかしら。スクーパーズさん用のは、すこし辛みを付けてみようかな。あと、アボガドも入れてみようかな。」

パドとイワタは何を言っているかわからなかったが、さゆみんの表情を見て安心して、ただうなずいていた。

しばらくすると、外が騒がしくなった。スクープビームと人間側のビームの発射音が多数聞こえた。また、テレパシーでも一つ一つは微弱ではあるが、多数の歓声と悲鳴が混ざってとても恐ろしい、まるで地獄の叫び声のように聴こえた。イワタがパドに尋ねた。

「また、戦っているんでしょうか。」

「たぶん、そうだろう。」

「我々は、どうしましょうか。」

「どうしようかと言っても、この体じゃ足手まといになるだけだし。ここでじっとしているしか。」

「体が治るまでは、おとなしくしているというのも分かりますが。ちょっとだけ、表に出て見えます。」

「すぐに戻って来いよ。ここがどこだかも良くわからないし。」

「わかりました。」

イワタが扉を確認すると鍵はかかっていたいなかった。そのため、簡単に転がって外に出ることができた。道にビーム攪乱幕が流れてきていて、薄っすらと煙っていた。2階の窓から地球の小さな動物がイワタを見ていたが、少しすると興味を失ったようで、部屋に入って行った。そのとき、連続して爆発音が聞こえ、テレパシーの歓声が大きくなった。そして、射撃手が急いで明治通りに向けて飛んでいくのが見えた。イワタはその姿を見て不安な気持ちが抑えられなくなり、部屋に戻ることにした。

「パドさん、射撃手が敵の防衛線の方に飛んで行くのが見えました。」

「そうか、激しい戦いが続いているようだ。やつらが戦う理由だけでもわかると良いのだが。あのご飯をくれる人間から聞き出せないだろうか。」

「戦闘員ではないようですので、翻訳機があれば何かわかるかもしれませんが、現状では意思の疎通をすることが難しいとは思いますが。」

「それも、そうだな。」

時間が経つにつれて、戦いの音は明治通りの方から裏原の奥の方へ移って行った。イワタがパドに尋ねた。

「あの防衛線を突破したのでしょうか。」

「そうかもな。奮戦しているようだ。」

「自分が参加できないのが残念です。」

「うん。」

次第に音が弱まっていった。2体が心配していると、明治通りの方でまた単発的に音がして屋前には静かになっていった。それから少しして、イワタがパドに尋ねた。

「作戦は成功したでしょうか。」

「成功していたら、すぐにこのあたりにもスクーパーズが来るだろう。」

「そのときは、あの人間は民間人で、むしろ我々を助けてくれたと説明しないと。」

「そうだな。」

「ちょっと、外を見てきます。」

そう言って、イワタは店の前に出て行った。外をみると、遠い方でビーム攪乱幕の濃い部分所々漂っていた。また、そればかりでなく、火災の煙が上がっているようだった。テレパシーの耳を澄ましてみたが、何も聞こえなかった。イワタからもテレパシーで呼びかけてみたが、返事はなかった。状況が分からなかった。そのときボードに乗って裏原の奥の方へ向かいながら上昇していく棒人間を発見した。

「棒人間だ。何をしているんだ。」

そうつぶやきながら見ていると、囲いの天井あたりで、あたりを見回していた。そして、こつちを見たのがわかった。

「やばい、隠れなきゃ。」

そう言いながら隠れようとする、棒人間が手に持った棒を構えて猛スピードで迫ってきた。

「今、部屋に戻ると、パドさんも見つかってしまう。あの看板の裏に隠れよう。」

そう思って看板の方に転がりながら移動したが、棒人間はすぐそこだった。

「うかつだった。」

と後悔したが、どうしようもなかった。棒人間が切りかかろうとしたとき、食べ物くれた人間が間に割って入ってきた。

「りとちゃん、やめて。」

「さゆみん。」

そう言って、りとはとりあえず棒を下した。りとがさゆみに聴いた。

「このスクーパーズは？」

「昨日の夕食の帰りに、動けなくて、その上痛みに苦しんでいたから、うちで休んでもらっているの。」

「何を言っているのか良くわからない。なんで、スクーパーズを助けるの？」

「だって、怪我をしているのよ。」

まりとことも到着した。まりが、りとに尋ねる。

「さゆみんが、怪我して動けないからって言って、スクーパーズを助けているんだけど、どう思う。」

「さゆみんが？さゆみんらしいと言えば、さゆみんらしいけれど。」

まりがさゆみんに向かって言う。

「それで、大丈夫なんですか。」

「うん、大人しくしているよ。クレープを美味しそうに食べてくれる。」

りとが口を挟む。

「それは今は怪我をしているからで、動けるようになったら、私たちをまた襲って来るよ。」

「もう、襲ってこないんじゃないかな。」

「なんでわかるの。」

「なんとなくだけど。でも、捕虜を殺したら局所銀河群の戦時条約に違反するわよ。」

「ジュネーブ条約？」

さゆみんは少ししまったという顔をした後に続けた。

「そう。宇宙人でも捕虜は保護しなくてはいけなと思うわ。特に怪我している場合は。」

「でも、スクーパーズは侵略者。世界中でたくさんの人を殺している。」

「そのスクーパーズでも無抵抗の人間は攻撃しないわ。」

「その考え方、さゆみんらしいのはわかるけど。」

そう言って、りとは考え込んでしまった。まりがここにアイデアを求める。

「ここ、なんかいい方法ない？スクーパーズを閉じ込めておけて、さゆみんの安全が確保できるような。」

「わかったー。部屋から簡単に出れないようにすればいいんだよね。部屋を強化して、扉外から鍵をかけられるようにするね。あと、部屋に監視装置もつけておくよ。」

「ありがとうことこ。」

さゆみんがここに尋ねる。

「食事とかはどうすればいい。」

「小さな、小窓をつけておくよー。」

「ありがとう、ことこちゃん。」

りとがさゆみんに言う。

「何かあったら、すぐに私に連絡して。急いで行くから。」

「わかったわ、りとちゃん。何かあったら、りとちゃんに連絡するようにする。」

「それにしても、心配じゃないの？ スカーパーズが隣にいて。」

「うん、全然平気。私、鈍いのかな。」

まりが言う。

「鈍いというのは違うかもしれないけど、天然？」

「ひどい、まりちゃん。」

「いい意味ですよ。スカーパーズが傍にいても平気というのは、かなりのレベルだとは思いますが。」

「そうなのね。気を付けるわ。」

「でも、さつきからスカーパーズを見てみると、りとを見ているときと、さゆみんを見ているときで感じが全然違う。」

りとが尋ねる。

「どういうふうによ？」

「りとを見ているときは、化け物でも見ているように怯えていて、さゆみんを見ているときは、優しいお姉さんを見ている感じ。」

「ことも同意する。」

「うん、わかるー。りとちゃん、スカーパーズの中では、緑色の悪魔と呼ばれていそう。」

りとが答える。

「えー、緑色の悪魔？ 二人ともひどい。」

「えー、カッコいいよー。とりあえず、部屋と扉の強化をしてくるね。」

「うーん、悪魔の方はともかく、強化をお願い。」

「わかったー。」

さゆみんが言う。

「部屋にはもう1体いるから驚かさないようにね。大人しいから大丈夫よ。」

それを聞いたまりが言う。

「私もここに付いていくね。」

そう言って、まりとことが部屋の方に向かった。

りとがさゆみんの方を向いて謝罪する。

「さつきは大きな声を出して、ごめんなさい。さゆみんやみんなのことが心配で。」

「こちらこそ、勝手をやってごめんなさい。りとちゃんが、みんなのために頑張っているのは分かってるわ。」

「何かあったら言ってね。」

「わかった。クレープを焼くから食べていく？」

「いいんですか。」

「もちろん。」

「じゃあ、お言葉に甘えて、待っています。」

「はい。みさちゃんとエビふりヤーさんの分も作るから、持って行って。」

「はい。」

「スクーパーズさんにもクレープを作っているんだけど、美味しそうに食べてくれるので、嬉しいわ。」

「さゆみんのクレープは美味しいから。スクーパーズ用のクレープの中身はどうしているの?」

「みさちゃ・・・」

「みさちゃん?」

「何でもない。みさちゃんと、好みが似ていると言いたかったの。」

「そうなんだ。そうか。」

りとはまた少し考え込んでしまった。まりとことが戻ってきた。ことが言う。

「部屋とドアの強化と監視装置の設置は終わったよ。」

さゆみんが、お礼を言う。

「ありがとう、ことこちゃん。」

そのあとスクーパーズをひょいと持ち上げた。りとが尋ねた。

「大丈夫なの?」

「えっ、大丈夫だよ。昨日も持って運んできたし。」

まりが言う。

「まさに、宇宙時代のナイチンゲールね。」

「ありがとう、まりちゃん。」

りとは、仕方がないかという顔をしながら、スクーパーズに向けて言った。

「もし、さゆみんに何かしたら、ただじゃおかないから。」

スクーパーズは怖そうにりとを見た後、さゆみんの笑顔を見てほっとしたようだった。さゆみんがスクーパーズを部屋まで運んだ。付いて行ったりとが、部屋にいたスクーパーズにも同じ注意をした。クレープ屋の台所に向かったさゆみんに、まりが話しかけた。

「お手伝いしましょうか。」

「有難う。クレープを焼くのは私がやるから、包むのを担当してくれる。」

「はい、わかりました。」

台所に到着したさゆみんがまりに話しかける。

「これが、夕食のパエリアの仕込み。」

「すごい。美味しそうですね。」

クレープの生地を作る準備をしながら答える。

「今回は本を見ながら。美味しくできると嬉しいけど。」

「さゆみんならば、絶対美味しくできますよ。」

「うまくいったら、彼にも作ってあげようかな。」

「私たちは、また実験台ですね。はい、何度でも務めますので、実験台が必要な時は呼んでください。」

「有難う。明日のメニューも考えておくね。」

「それは、今日のバエリアが美味しかったときにして欲しいです。」

「もし上手くいかなかったら、昨日のスーパーに高級な豚肉も残っているので、豚の生姜焼きクレープを急いで作るね。」

「はい。りとに負けない独創的なクレープを楽しみにしています。」

そして、まりがりとに話しかける。

「りと、りとならば、豚肉を使ったクレープ、何がいい？」

「えっ、豚肉を使ったクレープ。青椒肉絲クレープとか？」

さゆみんが答える。

「そっか。青椒肉絲クレープ、野菜が取れていいわね。」

「二人とも。気が合うんだか、合わないんだか。」

まりがあきれて言って、4人が笑った。

クレープの準備ができて、4人でクレープを食べているときに、さゆみんがりとに向けて言う。

「りとちゃん、ごめんね。これからも、スクーパーズさんのけが人がたくさん出ると思うの。」

そのときは、やっぱり、助けると思う。」

りとも同意する。

「危険なのに私たちのために残ってくれたさゆみん、怪我して戦闘意思を失ったスクーパーズを助けたいというのも、何となくわかる。もう、反対はしないから、安全だけは絶対に気を付けて欲しい。」

「わかったわ。さっきの約束は守るわ。何かあったら、急いでりとちゃんを呼ぶね。」

「はい、夜中でも、いつでも大至急で駆けつける。」

ことが言う。

「私も必要な設備は何でも作るから、言ってねー。さゆみんは、俺の嫁ーって感じー。ちょっと困った顔をしているさゆみんを見て、まりがことに注意する。

「さゆみんをお嫁さんにできる人は決まっているみたいよ。」

「そうかー。残念。」

りとが尋ねる。

「残念って?」

「やっぱり、この中で嫁にするなら、さゆみんだよー。」

「それは、わかんなくはないけど・・・」

まりがフォロー?をする。

「婿にするなら、りとが一番じゃない。」

「まり、それフォローになつてない。」

4人の笑い声が響いた。食べ終わると、PARKに帰ることになった。さゆみんがりとに夕ご飯の確認をする。

「夕食は夜7時ぐらいに持つて行くね。」

「有難う。何かあったら本当に連絡してね。」

そして、3人はみさとエビふりヤーの分のクレープを持って、PARKに帰って行った。

PARKに到着すると、りとは地下室からみさとエビふりヤーをPARKに連れて上がった。そして、まりが、さゆみんから預かったクレープを渡しながら言う。

「お腹が空いたでしょう。待たせちゃつてごめんなさい。これ、さゆみんから預かったクレープ。きつと美味しいわよ。」

みさとエビふりヤーは、クレープを食べ、味に感心しながら言う。

「おいしいですな。」「さすが、さゆみん様でございます。」

みさがりとに尋ねた。

「きょうも、りとちゃんは大活躍だったですな。地下室のモニタから応援していたですな。」

「ありがとう。」

「ところで、さゆみんの店にはすごく急いで向かったですな。そんなにお腹が空いていたですな?」

「おなががすいているように見えたの?」

りとは少し笑いながら続ける。

「あれは、さゆみんの店の前にスクーパーズが1体いたので、急いで行ったの。」

「そうですな。それで、やつつけたですな?」

「ううん、さゆみんが怪我して戦わなくなったスクーパーズを保護していたの。」

「スクーパーズカフェでも始めるつもりですな。」

「さすがにそれはないんじゃない。怪我しているから助けなくちゃということみたい。エビふりヤーが言う。」

「さゆみん様は立派な方でございますな。緑十字勲章を授けたいところでございます。」

「危険で止めたんだけれど。さゆみんだからしかたがないと、あきらめたところ。それで、ここがスクーパーズが外に出られないように部屋の強化と監視装置を設置することにした。」
ことが説明する。

「ここからでも部屋の様子を見ることができるよう。」
ことが部屋の様子を映し出した。エビふりヤーがしみじみと言う。

「これがさゆみん様が保護されたスクーパーズでございますな。怪我をして痛々しいことでございますな。あつ、これは、姫様の、みさ様の口まねではないでございますよ。」
りとが聞く。

「エビふりヤー、スクーパーズはエビフライ星人にとって、憎むべき敵じゃないの？」

「もちろんそうでございますが、やはり傷ついたものをみるのは痛々しいものがございます。」

「エビふりヤーも優しい宇宙人なんだね。」

「有難うございます。」

「私、優しくないのかな。」

「そんなことはありません。りとは、みんなのことを思う、とても優しい人でございます。ただ、優しさの形が異なっているだけでございます。」

「ありがとうございます。やっぱりエビふりヤー、本当に優しいのね。まりとは大違い。婿にするならエビふりヤーが1番よね。」

まりの方を見ながら、りとがそう話した。まりが苦笑している中、エビふりヤーが答えた。
「えっ、わたくし、星に妻も子供もおりまして・・・」

「冗談よ。でも、そうなら、エビふりヤーをエビフライ星に返す方法も考えないとね。」

「有難うございます。やっぱり、りとは優しい方でございますよ。」

「ありがとうございます。あー少し元気が出た。」

まりも言う。

「私も、婿と言ったのは冗談よ。りとはすごく可愛いわよ。」

「冗談とわかってはいるんだけど、子供の時、よく男の子に間違われたトラウマかな。」
「わかった。気を付ける。」

「ううん、大丈夫。それに、嫁にするならさゆみんが1番というのはわかる。」

「それはどうかな。ここもいい線行っているわよ。」

「うん。それも言える。私たちどうしようか。」

「結婚しないで、2人で住むというのもありかも。」

「まりと同棲!?!」

「そう、りと同棲。」

ことが言う。

「えー、そのときは、私もいっしょに住むよ。」

まりとりとが答える。

「そうはならないとは思うけど、相手がいなかったらどうぞ。」

「そんなときは、もちろん大歓迎。だから安心して。でも、そうはならないと思うけど。」
2人が笑う中、ことが答える。

「えー、そうなるよー。」

まりが答える。

「はいはい。そのときはね。でも、高校と大学に行って、5年は先かな。」

「じゃあ、5年後。約束だよ。」

「はい、約束。」

「りとちゃんも、約束だよ。」

「うん、約束。約束は絶対守るから。」

まりがここに言う。

「りととの約束は絶対信用できるから。」

「まりちゃんの言う通り、安心したー。」

りと言う。

「私は絶対みんなを見捨てないけれど、結局、私が一人残されるというのが一番ありそう。」

まりが言う。

「いや、りとちゃんは、宇宙人と結婚するかもしれない。」

「えー。」

りと言う。

「確かに、りとちゃんが宇宙人と付き合っているけど違和感ないかなー。地球の男性じゃ物足りないって感じ。」

「2人とも勝手なことを言って。」

「でも、りとに怒られちゃったけれど、私はスクーパーズの服を作ってみたいという気持ちはやっぱり少しある。」

「そうね、私もある。スクーパーズの星に行って普通のスクーパーズたちの生活を描いてみたいというのは。」

りと言う。

「私も、スクーパーズの技術者やオタクと話してみたいかなー。」

みさが言った。

「みさは、もう少ししたら、そういうことができるようになると思うんですね。でも今はスクーパーズを撃退するしかないですね。」
りとが尋ねる。

「そうすれば、対等に話せるようになるということ?」

「そうですね。対等になるですな。」

「そうなるど、いいね。」

対等になる。その意味自体は同じだったが、その実現方法は、りととみさで大きく異なっていた。

食べ終わった後、みさがりとに言った。

「エビふりヤーとみさは、地下室に行ってるですな。」

「もう安全だと思うけど、そうね、その方がより安全ね。待ってね、いっしょに行くね。」

「ありがとうございます。」

そういうと、りとはみさとエビふりヤーを地下室に連れて行った。部屋にもどると、りとは休みながらスクーパーズのスケッチの手直しを、まりはスクーパーズの服の構想を、ここは何かの設計をしているようだった。一方、地下室のみさはりとがいなくなったことを確認してから、エビふりヤーに言った。

「まずいことになったですな。」

「はい？」

「捕虜のことですな。」

「と言いますと？」

「もし捕虜の口から我々の素性が知れると、作戦に支障をきたすですな。」

「ただ翻訳機は持っていないようですし、意思の疎通ができるとは思いませんでございませす。」

「だから、お前は甘いというのですな。我々も翻訳機なしで人間と会話ができません。捕虜が地球の言葉を覚えるかも知れないですな。それに、翻訳機を持った捕虜が加わるかもしれないですな。」

「そうしますと、どのように対処すれば良いでございませすか。」

「処分するしかありませんな。」

「処分と言いますと。」

「処分は処分ですな。その意味ぐらい分かるですな。」

「彼らはスクーパーズのため、そしてきっと姫様救出のために戦って負傷したのでございませす。その彼らを私に殺せというのでございませすか。」

「そうですね。」

「私にはそのようなことはできませんでございませす。」

「エビふりヤー、いいかですな。この作戦が失敗すると、第3連隊の9割、第8連隊の半分の犠牲が全て無駄になるですな。そして犠牲はこれから増えるですな。」

「しかし。」

「そして、それが元になって、デストロイヤーズとの争いに負ければ、何十億の命が失われることになるですな。様々な文明を持つ惑星で行っているこの作戦は、スクーパーズの王族に課せられた使命ですな。父上、スクーパーズ王の絶対命令ですな。」

エビふりヤーは自分を可愛がり取り立ててくれた王様のことを思い出していた。

「わかりましたでございます。」

「わかれば結構ですな。」

「しかし、監視装置もありますし、うまくいくでございますでしょうか。」

「うまく、行かせるのがエビふりヤーの使命ですな。」

「作戦を考えるでございます。少し時間を頂きたく存じます。」

「わかったですな。」

エビふりヤーの考えた作戦は、外で建物を見張り、さゆみんが夕食を運ぶために建物を出た後に建物に入って自分の尾の硬いところで錠を壊し、監視装置が設置してある部屋から2体をおびき出し、建物の中で処分するというものであった。万が一、だれか人間と出会いそうになったときは、その人間の精神波を感じして、先に陰に隠れ、陰から急に出て気絶してもらおうというものである。作戦を聞いたみさは、

「それで実行するですな。」

と言って、夕食時間の前まで待つて実行することを決断した。18時30分ぐらいになり、作戦が開始された。みさとエビふりヤーに対しては、ここが監視対象から外してあったため、エビふりヤーが外で活動してカメラに写ることがあっても、警報が鳴ることはなかった。そのため、エビふりヤーは、さゆみんの建物の前までスムーズに移動することができた。エビふりヤーはつぶやいた。

「私は、たとえスクーパーズでも悪人ならば容赦なく戦うことはできます。でも、あんないい若者を。それもスクーパーズ星のため、王女様のために戦って傷ついた兵を殺すことになるなんて。自分の運命を呪いたいでございます。しかし、千数百、最終的に二千体以上になるかもしれない犠牲を無駄にすることができないのも事実でございます。これもスクーパーズが文明を生み出せなくなった報いなのでございましょうか。あの若者たちにも、ご両親がいらっしやるのでございましょうか、このことを知ったらどのようなに思われるでございましょうか。私は八つ裂きにされても、仕方がないでございます。今のりと様ならば、私のサイコバリアヤーや衣を貫くことができそうですございます。作戦の最後に、私もりと様に八つ裂きにされれば良いのかもかもしれません。」

そういうことを考えているうちに、さゆみんが台車に夕食を載せて店から出てきた。

「味見した感じは良かったけれど、みんなの評判はどうかな。うまくいかなかったら、意見を聞いて、美味しくして行かなくちゃ。でも、エビふりヤーさん、バエリアのなかのエビを見て

どう思うかな。大丈夫かな。私たちがだたらどうだろう。自分がいつも擬態している外見とそっくりの知恵ない小型の生き物がいたら食べられるか。うーん、やっぱり食べられないかな。少し心配になってきたわ。そのときはエビを除いた部分を上げれば大丈夫かな。」

などとぶつぶつ独り言を言いながら、PARKの方へ戻って行った。エビふりヤーは、さゆみんが道を曲がって見えなくなったことを確認したら、店の前に進んだ。そのとき、後ろからさゆみんの声が聞こえた。

「いけない、いけない。オリーブオイルを忘れた。やっぱり、スペイン料理ならばサラダにもオリーブオイルをかけたいわよね。」

そう言いながら、台車を押して走って戻ってきた。エビふりヤーは、とっさに看板の裏に隠れたが、振りむけば見つかったもおかしくない程度しか隠れることができなかった。さゆみんがドアの前に来た時、エビふりヤーは自分の反対側に石を飛ばした。さゆみんが、その着地音の方を見た時、エビふりヤーは、

「さゆみんさん、すこしだけお休みになって下さい。」

とつぶやきながら、尾で地面を蹴ってさゆみんに向かって跳ねて行った。

スクーパーズから投降者が出たということで、緊急に国家安全保障委員会が招集された。

「今回、緊急で会議を招集した理由は、スクーパーズから投降者が出たためです。現在の状況に関して、内閣調査室長の上杉から説明を願いたいと思います。」

「最新の情報は、防衛省と文科省から説明願うとして、経緯だけをご説明致します。本日、朝9時より自衛隊の護衛の下、調査委員会の石橋教授、諏訪教授らがスクーパーズがほとんど現れない、六本木側で原宿の囲いを調査していたところ、2体のスクーパーズの技術将校が降伏し身柄の保護を求めてきました。局所銀河群条約というものがあり、宇宙戦争におけるジュネーブ条約のようなものと思われまます。この銀河群のかなりの知的生命体が加入している条約らしいのですが、ご存知と思いますが、地球人は加盟していません。とりあえず、首相のご判断により、2体を国賓として迎えることにしました。現在は、太平洋戦争時に作成した大本営地下壕跡につくられている施設にかくまっている状況です。拘束などはしていません。その場所で、先の2人の大学教員が助教と学生と共に話を聞いている状況です。」

「自衛隊員でなくですか。」

「はい。自衛隊員の尋問ですと、関係を悪くする可能性もあります。たとえ拘束しても、われわれの技術力では有効とは考えられません。そこで、スクーパーズや原宿のこと、宇宙のことを教えて頂くという形で話を聞いています。」

「そうですね。それは良い考えだと思います。」

「総理！」

「何ですか。官房長官。」

「ホットラインで、合衆国大統領から電話が入っています。」

「2体の投降者がことがわかったのでしょうか。外から見えていましたし。わかりました。電話をここにつないで下さい。委員全員で対応しましょう。英語が分からない方は、事務方に概要を聴いてください。」

「電話を繋ぎます。」

「はい、お願いします。」

ここからは、英語での会話ですが、日本語に翻訳した会話を載せます。

「ワタル、こんにちは、元気でやっているか。」

「お久しぶりです、大統領。はい、私は元気です。大統領もお元気そうですねによりです。」

「ポールでいいよ。こちらの観測によると、日本の自衛隊がスクーパーズ2体を連行したという報告が入っているが。」

「連行というより、スクーパーズ2体が急に投降してきたんだ。捕虜に関して、銀河群条約というものがあるそうだが、我が国というか地球は加入していないので、我が国の客人として迎えて、大学の教員が話を聞いているところだ。」

「投降する理由はわかるか。」

「上官の方が、原宿の囲いの中で、スクーパーズの連隊が全滅するような無理な作戦をしていて、無駄に部下を死なせたくないためと説明している。」

「あの囲いの中で、戦闘が行われているのか。」

「これは前後の状況からの推定になるが、スクーパーズとエビフライ星人から武器を与えられた女子高校生3名が戦っていると考えている。」

「女子高校生3名?!」

「そうだ。オタク向けの店のバイトの店員3名だ。その他に、クレープ店の女子店員1名が残っている。あと、アメリカ人の少女1名丸野みさもいる。その5名の救出を最優先に考えているが、唯一の出入口にはスクーパーズが集中しているので、救出できない状況だ。」

「丸野みさに関して、詳しい情報を送ってくれ。合衆国市民保護のためならば米軍もいくらかも協力する。エビフライ星人から与えられた武器を米軍に渡してくれるならば、米軍が責任をもって少女たちの代わりに戦う。スクーパーズに有効な武器があるならば、戦いを志願する兵はいくらでもいると確信している。」

「米軍の協力が要になれば要請する。ただ、いまは自衛隊も全く手出しできない状況だ。」

「そうか。ところで、投降した2体の聴取に協力させてくれないか。大学の教員が良いというならば、最高の教員から志願者を募る。」

「わかった。ただ投降した将校は第3連隊。この連隊に関して説明すれば、地球には、南北アメリカ担当の第3連隊、ユーラシア担当の第8連隊、ヨーロッパ・アフリカ担当の第11連隊

が来ているとのことで、アメリカに被害を及ぼした第3連隊の隊員なのだが、感情的にならない方を選んでくれるか。」

「ああ、わかった。大丈夫だ。2体は投降したんだろう。我々は投降したものは寛大に扱う。」
「わかった。今日は概略の話を聞いた後、食事など生活について聞いている。技術的な細かいことは明日から聴く予定だ。」

「そうか、明日の早朝までには聴取に参加する人間を横田に送る。そこからヘリで現地へ向かう。」

「自衛隊の誘導員を、早朝に横田に送るから、指示にしたがってくれ。」

「わかった。今日は有意義な話ができ嬉しいよ。必要なものがあつたら何でも言ってくれ。最優先で持って行くから。」

「お心遣いに感謝する。この国難、世界難に協力して対処していこう。」

「OK。では、また明日連絡する。」

「了解。では、また明日。」

電話を終えて、会議が再開した。

「電話の会話で、だいたいのことがわかったと思います。現在、2名の大学教員が質問に当たっています。極めて協力的で、有意義な情報が聞き出せそうですが、場合によっては、この2体は敵前逃亡者としてスクーパーズからの攻撃対象になる可能性があり、慎重な扱いが必要です。そのため、米国の協力が必要不可欠と考えます。何か意見はありますか。」

「総理！」

「何ですか、経産大臣。」

「スクーパーズから得られた情報は、新しい産業の種になる可能性が高いです。それを我が国で独占できれば、非常に有利になると思われませんが。」

「はい、有難うございます。ただ1国で独占することは、誰も助けってくれないということです。日本はそれでやっていける国ではないと思います。」

「わかりました。実は、首相の言う通りと思っていました。ただ、確認のために言ってみました。米国の協力は最低限必要だと思います。」

「有難うございます。」

「総理！」

「なんでしょうか、防衛大臣。」

「兵器に関する情報が入ると、宇宙艦隊の創設も考える必要がでて来るでしょうか。」

「はい。スクーパーズの今回の作戦は、明確に略奪行為で許されることはありませんが、明らかに民間人の犠牲を最小限にするという意図は見えます。スクーパーズの話信じれば、ア

ンドロメダ銀河を支配するデストロイヤーズはそうでないと言っています。ことと場合によっては、スクーパーズとの共闘が必要になる場合もあると思います。」

「スクーパーズとの共闘ですか。」

「はい。」

「宇宙大戦になるということでしょうか。」

「アンドロメダ星雲から侵略者がいる場合は、防衛行為かと思います。」

「米軍は何でしょうか。」

「それは米国民が決めることですが、米国民を守るために合理的に必要なならば、スクーパーズとの共闘の方向に動くと思います。いずれにしろ、宇宙の情勢に関して情報を少しでも得たいところです。」

「総理！エビフライ星人はどういう宇宙人なのでしょうか。」

「内閣調査室長、現在までわかっていることをご説明願えますか。」

「少女たちとの会話のビデオを解析した結果では、スクーパーズに誘拐されたと説明していたようです。予想では銀河系のどこかの惑星ではないかと考えられます。誘拐された理由はわかりませんが、スクーパーズを敵視しているようにも感じられます。スクーパーズに対抗できる武器を作れるようですので、星間戦争が起きているのかもしれないかもしれません。ただ、詳しいことは、本人あるいはスクーパーズからの聴取を待ちたいと思います。」

「スクーパーズを信用しきるわけにもいかないということになりますが、それは国際関係も同じです。柔軟に対応していきたいと思います。いずれにしろ、人類が宇宙に大きく踏み出すきっかけになる可能性があります。慎重かつ大胆に行動していきたいと思っています。」

さゆみんが、エビふりヤーを抱きかかえて走って、PARKへやってきた。息を切らしながらみんなに言う。

「ごめんなさい。急に後ろから何か飛んできて、おどろいてげんこつで払ったら、エビふりヤーさんで、動かなくなっちゃって。」

みさが驚いた顔をしてから、エビふりヤーの方を見た。

「これは気絶しているだけですな。息はあるですな。すぐに目を覚ますと思うですな。」

「でもどうしてエビふりヤーが。」

「良くわからないけど、パエリアを持ってこようとして、オリブオイルを忘れて取りに帰ったら、看板の横に隠れていたみたいで。」

「そう。何でかな？」

少し考えたみさが、さゆみんにしようがなさそうに言った。

「さゆみんが美人だから、ワツと言って驚かそうとしたですな。エビふりヤーのようなオヤジが考えそうなことすな。」

りが答える。

「そうかもしれない。さゆみんの驚いた顔を見たかったのかもしれない。オヤジだから。まりも追い打ちをかける。」

「まあ、さゆみんを驚かせたら喜ぶと思ったのかもしれないね。オヤジだから。ところが慌てて考える。」

「えっ、えっ、私も。きつと、うーん、きつと、さゆみんのキャットという声を聴きたかったのかなー。オヤジだから。」

さゆみんが答える。

「みんなひどい。」

みさがさゆみんに謝罪する。

「ごめんなさいですな。エビふりヤーの自業自得ですな。気絶しているとは言え、さゆみんに抱っこされて本望ですな。後で注意しておくですな。」

「有難う。みさちゃんにそう言ってもらえると助かるわ。とりあえず、ソファアに寝かしておくれ。私、パエリアを取ってくる。」

「有難うですな。いってらっしゃいですな。」

さゆみんが出て行って少して、エビふりヤーが目を覚ました。

「あれ、ここはどこでございましょう。さゆみん様のお店に。」

みさがエビふりヤーの言葉を遮って、真面目な目で見つめて話しかける。

「さゆみんのお店に行って、さゆみんを驚かせようとして、驚いたさゆみんのパンチで気絶したですな。」

「は？そうでございますか。」

エビふりヤーは周りを見て悟って答えた。

「そうでございます。さゆみん様を驚かせようとして近づいたら、驚いたさゆみん様のパンチを食らったでございます。」

まりがエビふりヤーに尋ねる。

「まあ、さゆみんを驚かせたい気持ちはわかるけれど、さゆみんのお店には何しにいったの？わざわざ、パエリアの具に行行ったの？」

「違うでございます。それは。」

また、みさが答えた。

「スクーパーズを見に行ったですな。」

「そうなの？」

「そうですな。」

「そうでございます。けがの状態がどんなか見に行きましたでございます。りとが注意する。」

「エビフライ星から連れ去れた復讐だなんて言って、そのスクーパーズを虐待したらだめよ。私もさゆみんに諭されてわかったけど、地球でも無抵抗の捕虜への虐待はいけないことになっている。」

「そうでございますか。地球も良いところでございますな。本当に大変申し訳ないことをしてしまつたでございます。」

「なんで、エビふりヤーが謝るの。」

「それは。それは、同じ宇宙人としてでございます。宇宙人を嫌いにならないで欲しいでございます。」

まりが答える。

「心配しなくてもわかっているわよ。エビふりヤーはいい宇宙人だつて。りと、エビふりヤーは、さつきもスクーパーズの捕虜のけがを心配していたぐらいだから大丈夫よ。」

「そうか。ごめん、エビふりヤー。」

「いえいえ、捕虜への心遣い、感謝の極みでございます。私への注意は、りと様の正義をなそうとする、優しさの形と思うでございますよ。」

「さゆみんに諭されたからだけど。でも、ありがとう。エビふりヤー。」
まりが注意する。

「だけどエビふりヤー、今はこういう状況だから急に驚かそうとするのはだめよ。さゆみんだから気絶ですんだけど、りとなら真つ二になっていたわよ。」

りとが抗議する。

「なに、まり、今度は私？じゃあ、まりだったら、風穴があいていたわよ。」
みさが言う。

「そうになったら、バエリアの具に使えばいいですな。」

「みさ様、ご無体なでございます。」

まりとりとが答える。

「大丈夫、エビふりヤーが入ったバエリアは遠慮するわ。」

「まあ、そう。美味しくはなさそう。」

エビふりヤーは安心して同意する。

「ごもつともでございます。美味しくないでございます。」
それを聞いてみんなが笑った。

少しして、さゆみんが戻ってきた。

「遅くなってごめんなさい。待った？あつ、エビふりヤーさんが気が付いている。大丈夫ですか。」

エビふりヤーが答える。

「先ほどは、さゆみん様を驚かそうとして、大変失礼なことをしたでございます。自業自得ですので、お気になさらないで下さい。」

「有難うございます。次から気を付けます。」

「いえいえ、本当に誰かが襲ってくる場合もあるかもしれないでございます。誰かがいきなり近づいてきたら、あのパンチをくわすのが一番でございます。なかなかの右フックでございます。」

「本当に有難うございます。エビふりヤーさんは優しい方なんです。私、いつも力仕事ばかりで、見た目より力があるんです。本当にごめんなさい。これからは気を付けます。」

「そんなことはありませんでございます。自分を守るのを第一に考えて下さい。」

「有難うございます。」

みさがさゆみに言う。

「エビふりヤーは、単に美人に優しいだけですか。さゆみんは全く気にする必要はないですか。」

「みさちゃんも有難う。じゃあ、パエリアを食べようか。まりちゃん、取り分けてもらえる。私は持ってきたスープを温めて、サラダを作っちゃうから。」

まりが答える。

「分かりました。」

みさとことこが顔を見合わせながら言う。

「みさちゃん、テーブルを片付けようか。」

「はいですな。」

さゆみんがりとお願いする。

「じゃあ、りとちゃんは、ナイフとフォークとスプーンを出してくれるかな。」

りとが答える。

「もちろん、いいよ。」

それを聞いたまりがさゆみに言う。

「心遣い、ありがとうございます。ナイフとフォークとスプーンは落としても割れないからですか。さすがはさゆみん。」

それを聞いたりとが答える。

「そんな、落とさないよ。まり。」

「ごめん、りと。メイドをやったら、ドジっ子メイドのキャラかなと思って。」

「私が、メイド!？」

「そうメイド。やってみない。」

「えー、メイドのバイト？まりがやるならいいけれど。」

「わかった。じゃあ、この件が片付いたら、メイド喫茶でバイトね。」

「メイド喫茶！？私が、メイド喫茶のメイド？」

「大丈夫。さゆみんも一緒だから。さゆみんのお店の系列店で人が不足することがあるんだって。」

「さゆみんがいつしよなら、まあいいか。」

まりがここに言う。

「こともいっしょよ。」

「わかったー。いつしよなら大丈夫だよー。」

そして、みさに向かって謝る。

「ごめん、みさちゃんは、年齢的に無理だと思う。いろいろ法律に触れそうだよ。」

「わかったですな。みさはPARKで店番しているですな。」

食事の用意ができて、みんなで頂きますをする。

「いただきます。」「いただきますですな。」「いただきますでございます。」

まりが、話を切り出す。

「パエリア、ご飯に海の幸の味がしみていて美味しいです。」

「ほんと、ありがとう。」

りどが同意する。

「とっても美味しいです。これならば、誰に食べさせても大丈夫。」

「じゃあ、今度作って、食べさせてみるかな。」

まりが冷やかすが、撃沈してしまう。

「食べさせてみるかな。仲が良さそうですね。」

「もちろん、すごく仲がいいわよ。」

「もう、さゆみんには勝てる気がしません。お幸せに。」

「ありがとう。」

ここでもお礼を言う。

「お店で食べるより美味しいよー。パエリアクレープなんてどうかなー。」

「パエリアクレープ！それは盲点だったわ。考えてみるね。」

まりがりどに言う。

「りど、ここにお株を取られているよ。」

「お株って。でも、魚介類の濃いめの味だからどうかな。アサリの炊き込みご飯クレープなら美味しそうだけど。」

「アサリの炊き込みご飯クレープ？！口を挟んだ私がばかでした。」

さゆみんが言う。

「まりちゃん。何事にもトライしてみることは重要よ。」

「じゃあ、最初に作った料理を彼氏さんに食べてもらうことはできますか？」

「うーん、やっぱり最初はPARKに持ってこようかな。PARKってそういう所じゃない。」
「どういう所ですか？」
りと言おう。

「まり、いいじゃない。美味しいよ、きっと。アサリの炊き込みご飯クレープ。」

「きつと、そうね。しょうがないわ。私たちが先鋒をつとめましょう。」

「そう、それがPARKの良いところ。」

ことこもりとに同意する。

「そうだよー。PARKは時代の最先端を切り開くところ。」

まりは少しあきれて言う。

「はい、はい。宇宙人と戦うぐらいだから。」

それを聞いて、みんなで笑った。りがことこりに話しかける。

「そういえば、ラフォーレを取り戻すことを考えていると言ってたけれど、どうやるの。」

「小型の戦車を3台作って、それでラフォーレに乗り込むの。戦車の装甲はスクーパーズのビームが集中しても大丈夫なものにする予定だよ。そして、後部にジェットファンを付けて、建物の中のビーム攪乱幕は吹き払うようにするよー。」

「そうか、戦車ならば安全かも。」

「うん。それで下からラフォーレの階段を上がっていくの。占拠した入り口には、防衛装置を付けて、スクーパーズが入れないようにする。」

「さすがは、ことこね。すごいいい。」

まりがことこりに尋ねる。

「アイディアはすごくいいけれど、戦車はいつごろできそう？」

「今日も設計していた。明後日の朝には3台用意できると思う。」

「さすがだわね。ことこ。」

「ありがとう。だから、明日は2人は休んでいてね。」

りことまりがことこりに言う。

「わかった。警戒はするけれど、休んでいる。」

「そうね。やっぱり、疲れが溜まってきているわよね。1日休めるのは嬉しい。」

「うん。私は壁に絵でも書いていようかな。PARKのそばだから、何かが起きてもすぐに対応できるし。」

「私は、スクーパーズとエビふりヤーの服でも考えてみようかな。」

エビふりヤーが喜びながら言う。

「私めの服ですか。すごく楽しみでございます。」

「うん、エビふりヤーがますます可愛くなる服をデザインするわね。」

「可愛いでございますか？」

「うん、パステルカラーの生地を使おうかな。」

「分かりましたでございます。楽しみにしていますでございます。」

みさが言う。

「よかったですな。エビふりヤー。可愛くなれるですな。」

「はい、みさ様。エビふりヤーは可愛く生まれ変わります。」

りとがまりに注意する。

「スクーパーズの服はいいけれど、戦闘中に油断しちゃだめ。危ないから。」

「分かっているって。平和が訪れたときのため。」

「分かっているなら、いいけれど。」

「それに、次は戦車に乗るから安全よ。」

「うん、でも何があるかわからないから、戦車でも油断は禁物。いざとなったら、私は戦車を降りて戦うから、その隙に2人は逃げてね。」

「また、無茶を言う。」

ことが言う。

「戦車から、ビーム攪乱幕も出せるし、逃げるときは、戦車に乗ったままの方が安全だと思うよー。」

「そうなの？わかった。そのときは、臨機応変に対応する。」

まりが心配そうに言う。

「りと、無理はしないでね。」

「わかってるって。それより、エビふりヤーの服のデザインが決まったら、スケッチするから言ってね。」

「うん。可愛い服もいけれど、やっぱり執事服とか似合いそうよね。」

「まりの言う通り。話し方から、似合うと思う。」

「でしょう。」

「どんな風になるかちょっと楽しみ。」

エビふりヤーも喜んで言う。

「地球の執事は最強だったりしますから、私にピッタリでございます。」
ことが嬉しそうに言う。

「エビふりヤーも日本のアニメ見るの。」

「はい、みさ様といっしょに見ていただきます。」

りとが不審がって尋ねる。

「みさちゃんと一緒っていつ見たの？」

「それは、それは。えーと、何時でございましたでしょうか。」
エビふりヤーがみさの方を見る。

「記憶がないですな。エビふりヤーの勘違いと思うですな。」
そしてみさは続けて言う。

「さゆみん、パエリアとっても美味しかったですな。いつも美味しい食事を有難うですな。眠くなってきたので、地下室で寝るですな。」

そして、エビふりヤーを連れて地下室の方に向かった。さゆみんが答える。

「ありがとう。はい、おやすみなさい。」

「じゃあ、念のため部屋まで送っていくわ。」

まりがみさとエビふりヤーの後を追った。ここが2人と1尾を見送った。

「おやすみなさい。」

りとも深くは聞かないでおやすみの挨拶だけを告げた。

「このところ大変だから疲れたよね。おやすみなさい。」

地下室に到着すると、みさはまりにお礼を言って別れた。扉を閉めた後黙ってディスプレイを見ていた。まりが部屋に戻ったことを確認して、えびふりヤーに強めに話しかけた。

「何を言ってるですな。りとちゃんに怪しまれたですな。」

「申し訳ございません。」

「りとちゃんは少し前から、みさとエビふりヤーがスクーパーズかもしれないと思っているようですな。とりあえず気を付けるですな。」

「承知しましたでございます。」

「あともう一つ。驚いたさゆみんにワンパンチで気絶させられるってなんなんですか。スクーパーズ最強の兵ではなかったんですな。」

「面目ございません。スクーパーズのサイコバリアは、無機物には強いでございますが、精神力で負けると、簡単に通過してしまっております。」

「やはり、さゆみんの精神力は強力ですな。」

「姫様も気が付いていたでございますか。」

「この状況で傷ついたスクーパーズを助けてまわれるというのは、普通の精神力ではないですな。」

「はい、優しく高貴でそして強い心を感じましたでございます。」

「そうですな。さゆみんも連れて帰りたいところですな。しかし、さゆみんは戦わなさそうだから無理ですな。」

「そうでございますな。ところで、姫様、捕虜の件はどうすればよろしいでございますでしょうか。」

「そうですね。お前が、第2形態になれば、さゆみんに負けることはないと思うですな。ただ、それでは目立ちすぎるですな。仕方がないですな。みさがさゆみんの店の前に行って、たとえ翻訳機が手に入っても人間とは何もしゃべらないように指示してくるですな。」

「それがいいでございます。それがいいでございます。兵たちは姫様の指示には絶対に従うでございます。本当に、それがいいでございます。」

「何度もうるさいですな。わかったですな。」

捕虜を殺さなくて良くなったエビふりヤーは心の底からほっとした。しかし、さゆみんのパンチを思い出しながらつぶやいた。

「しかし、さゆみん様のパンチ、サイコバリヤーを抜けたとしても、ころもの物理バリヤーも強いはずなのですが、それで気絶してしまうとは。私も、もう歳なのでございましょうか。」

夕食が終わって後片付けした後、さゆみんは帰って行った。今日戦闘があった辺りをまわって、怪我したスクーパーズを4体ほどみつけた。とりあえず店に帰って4つクレープを焼いて、台車を押して怪我したスクーパーズを助けてまわった。そして、4体をパドとイワタがいる部屋に入れた。そして、2体に向かって言った。

「ごめんなさい。私、スクーパーズの治療ができないから、面倒を見てあげて。クレープを焼いてくるから、少し待っててね。鍵をしめないと、りとちゃんに怒られちゃうし、外に出ると危ないから鍵は閉めるね。」

そういうと、さゆみんは扉を締めて、クレープを焼き始めた。部屋の中では、パドがイワタに話しかけた。

「イワタ、とりあえず、応急手当をするぞ。」

「はい、わかりました。」

パドとイワタは4体に対して応急手当をした。パドが4体に話しかける。

「私は、パド上等兵です。第8連隊第1中隊所属です。」

4体が返事をした。

「応急手当が上手ですね。楽になりました、第3連隊第1中隊のドービス上等兵です。」

「同じく、ファージル一等兵であります。」

「同じく、ガリル一等兵であります。」

「自分は、ズジル二等兵であります。」

最後にイワタが自己紹介する。

「自分は、パド上等兵と同じ分隊に所属しているイワタ二等兵であります。」

ドービスが同じ階級のパドに尋ねる。

「ここは地球の捕虜収容所か？我々を運んできた人間は、戦闘員のようには見えなかったが。」

「民間人のようだ。民間人が怪我をしている我々を安全なところで休ませているという感じだ。」

イワタが説明を追加する。

「先ほどまでは、鍵も付いていませんでした。それで外で様子を見ていたら、棒人間に見つかって、危うく殺されるところを、さっきの人間が守ってくれました。それがなければ、私は死んでいました。」

「民間のボランテニアということなのか。」

「それはわかりませんが、単に助けただけのように思います。」

「ところで、君たちは第3連隊がどうなっているか知っているか。」

「残念ながらここから離れられないため、良くはわかりません。」

「そうか。」

「はい。奥の方で音がしていたのですが、しばらくすると聞こえなくなってしまいました。」

「そうか。」

パドも説明を追加する。

「俺も良くわからない。第3連隊は、テレパシーが通じる範囲には来なかったようだ。」

「わかった。有難う。」

ファージルが話し出す。

「しかし、連隊の状況もわからないのに、我々はここで何もして良くて良いのでしょうか。ドービスが答える。

「傷ついて飛ぶこともビームも発射できない状況ではどうしようもない。戻っても足手まといになるだけだ。今は体を治すことに専念しよう。」

パドが答える。

「ああ、こちらでも、そう相談していたところだ。」

他の隊員も同意の表情を見せていた。ドービスがクレープの印象を語る。

「それにしても、あの人間くれた三角の食べ物、美味しかったな。まったりとした深い味わいで。あんな美味しいものは今まで食べたことがないぞ。」

イワタが答える。

「はい、あの人間がこの建物で作っているようですが、とてつもなく美味しかったです。それに、それ以外のご飯もおいしくて。さらに、いろいろ改良してどんどん美味しくなってきました。この星は食事に関してはかなり進んでいるという印象を持ちました。」

「そうか。おいしいご飯を、スクーパーズ本星に持ち帰ればみんなも喜ぶのだが。」

「はい。ただ、我々の採取リストには食べ物はありませんでした。」

「そうか。それは残念だ。」

他の隊員も残念そうな表情を見せていた。そのとき、さゆみんがいろいろなクレープを持って部屋に入ってきた。スクーパーズはおいしそうに、さゆみんが作ったクレープを食べた。

PARKでは、まりがりとさゆみんの部屋の監視装置でスクーパーズが増えていることを確認していた。まりがりとに話しかける。

「りと、さゆみんの店のスクーパーズ、6体になっている。」

「えー、さゆみんは、もう。」

「今日の戦闘でけがしたスクーパーズよね。少なくとも、さゆみんには危害を加えない感じはするけれど。」

「うん、それは感じた。スクーパーズも民間人と分かっているみたい。」

「私たちは、戦闘員と言うことね。」

「うん。とりあえず、さゆみんに危害を加えないようならば、放っておこうと思う。」

「そうね。」

次に、りとがえびふりやりの弱さについてまりに話しかける。

「それより、さっきのことで分かった問題は、みさちゃんの護衛はエビふりやりに任せてきたけれど、エビふりやりの護衛じゃ当てにならないということ。」

「そうね。私も、宇宙人だから、少しのスクーパーズならば何とかできるかもしれないと思ったけれど。確かに、りとの言う通り、いくら力仕事をしているからと言って、さゆみんのパンチで気絶してしまうようでは話にならないわよね。」

「うん、話しにならない。だから、どうしようかと思って。」

「私たちが付いているわけにもいかないし。」

それを聞いていたことが提案をする。

「みさちゃんに携帯式のブザーをもってもらおうか。みさちゃんがボタンを押すか、画像で監視して、近くにスクーパーズが来たら警報を出すの。その警報が3人に届くようにするから。」

「そうね。現状はそれが一番いい。すぐに作れる？」

「大丈夫。」

「戦車の準備もあるのに、ごめん。」

「出発は明後日だから、まだ時間はあるよー。」

「ありがとう。」

次の日は、スクーパーズも、りとたちも平和な朝が始まった。アルドアたちは、戦艦の旋回主砲の移設で忙しかったし、ことこも戦車の設計で忙しかったが、戦闘は止んでいたの、それ以外の者たちは、つかの間の平和の中で休息を取っていた。ゼクルが、ラフォーレの屋上から主砲の移設作業を指揮しているアルドアの方見ながら、ガジメに話しかける。

「私も手伝ってきましようか。その方が少しでも早く作戦が始めます。」

「やめておけ。明日の作戦の成否は我々、特にお前にかかっているとところが大きい。棒人間をお前と俺で抑え込まなくてはいけない。」

「そうですね。全力で頑張ります。」

「頑張るだけで済まされな。我々が突破されたら作戦の成功は不可能だ。連隊長は我々だけで無理と判断したら、ご自身で我々に加わる覚悟だ。」

「えっ、連隊長ご自身が？」

「そうだ。連隊長のビームは強力だからな。」

「そうですね。棒人間を吹き飛ばしていましたから。少し離れたところから援護して頂ければ助かります。」

「連隊長もやる気になると前に出てきそうだから、その時はお諫めしないと。」

「分隊長も大変ですね。」

「中間管理職はつらいところだな。」

「はい、分隊長と連携して、何とか棒人間を本隊には近づけないようにしましょう。」

「そうだな。あと、連隊長から言われたのだが、もう一つだけ言っておくことがある。」

「なんでしょうか。」

「それでも力が不足する場合は、特殊な薬を使うそうだ。」

「どんな薬ですか。」

「動きが俊敏になって、スクープビームにデストロイビームが加わるそうだ。」

「それは、噂になっている第0研究所の薬でしょうか。」

「第0研究所は実在しないことになっているが、そんな薬があるとすると、もしかすると実在するのもかもしれないな。だが公式に第0研究所はないということだから、我々スクープパーズ兵としてはないということだ。余計な詮索はするな。研究の結果、副作用はだいぶ弱くなってきたという説明だが、それでも全く安全というわけではないそうだ。」

「それで王女様が助かるならば、私は全く躊躇はしません。棒人間と戦っていると、速く反応しない体もどかしくなります。覚悟はできています。」

「そうか。わかった。私も覚悟はできている。4体分しかないそうだから、お前と私、ゾロモと連隊長が使うことになることだ。」

「わかりました。それが最終決戦ということですね。」

「そういうことだ。」

「分隊長と私で棒人間を抑えようとすると、射撃主は誰が抑えますか。」

「ゾロモが指揮をとり、ジャモチャを始め残りの第111分隊が対応する。」

「射撃主は動きが速くはありませんから、遠距離から抑えられると良いですね。」

「ゴモが無事帰還したら、必要な方に加わってもらう予定だ。」

「ゴモは大丈夫ですよ。私よりずうっと慎重で適切な判断ができます。絶対、無事に帰ってきます。」

「そうだな。とりあえず、今は飯でも食って、体を休ませておけ。」

「レーション（戦闘食）は美味しくないのですけれどもね。」

「そう言うな。栄養だ。」

「はい、王女様を助けるためならば、何でも食べます。」

「お前は、そうだな。」

「はい。」

キャット通りの奥で隠れていたゴモが、偵察のために隠れながら少しずつPARKに近づいていった。夜にも接近して見たが、様子が分からないところも多かったため、朝になってから再度接近してみることにした。

「慎重に、慎重に。」

物陰に隠れながら、設置してある監視装置の死角を通りながら、少しずつ接近して行った。少しして、遠くの方に作業をしているりとを発見した。

「棒人間だ。壁に向かって何をしているのだろう。壁に話しかけているわけではなさそうだし。危険だけど情報を得るためにもう少し近寄ってみるか。ビーム攪乱幕は持ってきているし、いざとなったらそれを撒いて逃げるができる。ただ、戦闘は絶対に避けなくては。」
そう言いながら、少しずつりとの方に近づいて行った。

その少し前、PARKでは朝食を済ませた後、やはりはスクーパーズ用に服のアイディアを練り、ここは戦車の設計を続けていた。みさとエビふりヤーは地下室に行き、ゲームをしている。明治通り近くのスクーパーズに目立った動きがなく、手持ち無沙汰なりとは、PARKのそばの道の壁に絵を描くためにPARKから出て行った。PARKのすぐそばなので、2人も止めなかった。以前描いた家での家族3人の生活の絵の隣に、以前から図案をスケッチしていた遊園地で遊んでいる家族3人の絵を描くことにした。

「まずは、下書きっと。」

そう言うってから、下書きを描いた。デフォルメされたブランコ、滑り台、鉄棒、砂場。そして、ブランコに乗る子供とそれを見守る両親。りとは想像上の両親の下書きを描いていく。

「このボードがあると、梯子を使わなくて済むから便利。」

そう言いながら、1時間ぐらいで下書きを描き終えた。

「本当に、このボードがあれば、どんな大きな壁でも簡単に描けそう。後ろに下がって全体を見るのも簡単だし。さて、次は彩色か。家の絵より、もう少し明るくしようかな。でも深みも欲しいし。」

そんなことを、考えながら色を調合して、壁に慎重に色を付け始めた。スケッチブックではなく壁なので、壁の色が邪魔して意図した色にするのは難しかったが、それでも少しずつ壁の絵に色が付いていった。

ゴモがりを見つけたのは、ちょうど下書きが半分終わったところだった。棒人間が絵を描いていることがわかって、ゴモは心の中で叫んだ。

「お前なのか。この絵を描いていたのは、本当にお前なのか？」

そうは言っても、目の前で絵ができていく過程を見せつけられては否定のしようがない。ゴモは偵察任務を忘れて、絵ができていく過程を少し離れたところで見つめていた。

「描いたり、下がって全体を見たり、直したり。あんなふうに描くのか。」

「あつ、綺麗な曲線だな。」

下書きが終わって、彩色しているときも、ゴモは一心不乱にりとが絵を描くところを見ていた。

「色を作るのは大変なんだな。何度も作り直している。」

「丁寧に描いているな。ミスがない。器用なのかな。」

「うん、いい色味だ。色の組み合わせも新鮮だ。」

絵が完成が近づいたのか、りとは後ろに下がって眺めては壁に戻って、細かな修正を繰り返していた。そして、地上に降りて、じっと絵を見ていた。ゴモは、絵が完成して我に返った。

「しまった、偵察を忘れていた。でも、絵を描くところを見て面白かった。こんなに集中して何かを見たことは、生まれてから一回もないか。残念だが、私にはあんな風に上手に描けない。それにしても、だいぶ時間を使ってしまった。任務に戻らないと。あいつがいる以上、これ以上進めない。今日は一度撤退して、キャット通りの裏側を、もう少し調べよう。隠れるところとかあれば、何かに使えるかもしれない。」

そう言いながら、少しずつ下がっていった。下がりながらも、絵のことを考えていた。

「左の絵は暖かな感じがよかったけれど、もう少し明るくて、右の絵も好きだな。スクーパーズを狩るのが趣味の残酷なやつと思っていたけど、違うのかな。向こうも何か事情があるのか。いや、今のやつは敵だ。倒さなくてはいけない敵だ。相手の事情を考えていると、仲間を危険にってしまう。」

ゴモはそう考えて、調査の任務に戻ることにした。一方、りとはの方は、ボードのおかげで1枚目の絵が思ったより早く書き終わって時間が余っていた。

「記録のためにも書いておこうかな。」

そう言いながら、りとは今描いた絵の右隣にデッサンをしていたもう一つの絵を描き始めた。

午後3時ごろになって、2枚目の絵も描き終えたりとがPARKに戻ってきた。

「ただいま。」

まりが答える。

「りと、ずうっと絵を描いていたわね。」
「うん。たいぶ気分が落ち着いた。」
「お腹はすいていない？さゆみんが作ったオムライス食べる？」
「時計をみたりとが驚きながら言う。もう3時なんだ。」
「そうよ。熱心に絵を描いているので声をかけられなかったわ。」
「そうか。確かにお腹がペコペコみたい。」
「じゃあ、待ってて。持ってくる。」
「ありがとう。」
「もう、冷めちゃったかな。」
「大丈夫。いただきます。」
そう言うのと、りとはオムライスを食べ始めた。
「さゆみん、卵を焼くのも上手だね。」
「ほんと、美味しかった。メイド喫茶でたまに作るんだって。」
「そうなんだ。」
「さゆみんも、おいしくなーれ、おいしくなーれ、もえもえきゅん。っていうのするのかな。」
「さゆみんの場合、しなくても、美味しそうだけれど。」
「またそういう、身も蓋もないことを。」
「でも、私にちゃんとできるかな、オムライス。」
「無理じゃない。」
「そうだけど、まりは容赦ない。じゃあ、バイト無理か。」
「大丈夫よ。さゆみんに作ってもらって、りともえもえきゅんだけで。」
「そんなのに需要ある？ことこなら、ありそうだけれど。」
「あるよ、りともきつと。」
「ありがとうございます。ケチャップで描く絵だけでも練習しておこうかな。」
そういうと、台所にケチャップを取りに行った。
「さて、なんの絵を描くといいだろう。とりあえず、猫でも書こうか。」
描きあがった絵を見て、まりが言う。
「それ三毛よね。さすが上手、可愛いわね。食べちゃうのが勿体ないぐらい。」
「そうか、動物はやめるか。これなら問題ないけど。」
そうやって別の絵を描き始めた。それを見て、まりが言う。
「確かに、オムライスの絵ならば問題ないけど、オムライスにオムライスの絵ってわけがわからないわ。」
「それなら、餃子の絵とかは。」
「包むものどうしだけれど。しいて言えば、トマトの絵？」

「なるほど。中はチキンライスだから、動物でも鶏の絵も構わないかな。」
「まあそうね。でも、そんなこと言っていないで、早く食べちゃいなさい。」
「わかった。」

オムライスを食べた後、食器を洗うために腕をまくると、腕にあざができていたのが見えた。片づけ終わってから、さらにそのことを話した。

「どこかにぶつけたのか、腕にあざがでちゃった。」

「そうなの。私もなの。ここ。」

そう言って、二人であざを見せ合った。

「私は、ラフォーレで天井からものが落ちてきたときかな。気をつけなきゃね。」

「うん。そうも言ってもらえないときもあるけれど。」

「そうだけでもね。」

このときは、あざはそのうち治ると思って、あまり気にしていなかった。

捕虜のスクーパーズの昼食もオムライスだった。スクーパーズたちも満足したようだった。イワタが言う。

「おいしいですね。これも。」

「そうだな。覆うものが少しトロっとしていて、美味しかった。」

ファージルがドービスに向かって話しかける。

「ここは、レストランか何かのようですね。」

「そのようだな。」

「こういうところの捕虜になれてラッキーですね。」

「ただ、敵の司令部の意図次第では、どうなるかわからない。安心はできない。」

「そうですね。世話をしてくれる人間はいかにも民間人という感じですし。軍の命令があったら逆らえないですね。」

「うむ。だが、今はパド上等兵が言う通り、おとなしくして、怪我を治すほかはない。」

「そうですね。」

イワタが他の隊員に尋ねる。

「皆さんの具合はどうですか。」

ガリルが答えた。

「みなさんの応急手当のおかげで、痛みはおさまりましたが、まだもう少しという感じです。こちらは、みんな同じぐらいと思います。」

パドが答えた。

「俺は、低空なら飛べそうだが、ビームは無理そうだ。そういうイワタ、お前はどうか。」

「はい、私も低空なら飛べるようになりました。ビームも出せそうです。」

「そうか。よく食べるだけのことはあるな。まあ、俺もいつもより良く食べているがな。」
ドービスが言う。

「そうですね、お二人とも治りが速いですね。飛べるのでしたら、万が一の場合は我々を置いて逃げて下さい。場合によっては、飛べない我々は盾になります。」
パドが答える。

「お気持ちは嬉しいですが、棒人間は私たちでかなう相手ではありません。その場合は、全員がバラバラで脱出しましょう。2〜3体ぐらいは助かるかもしれません。いずれにしろ、計画的に脱出するのは、みんなが飛べるようになってからにしましょう。それまでは、治療に専念しましょう。」

「了解しました。こちら、パド上等兵の意見通りにしたいと思います。」

「有難うございます。」

イワタが付け加える。

「ご飯も美味しいですしね。」

パドが笑いながら答える。

「イワタは体格通り食いしん坊だからな。」

「パドさんもいつもの調子が戻ってきて、なによりです。」

「そうだな。」

その部屋の全員で笑って、和やかな時間が流れた。

2時ごろに、さゆみんが食器を取りに部屋に入ってきた。食器をまとめて持って、部屋から出ようとしたとき、首をかしげて何か聞いているようだったが、何を言っているか良くはわからなかった。逆に、さゆみんが部屋から出ていくとき、スクーパーズたちは、「美味しかった」とか「ありがとう」とテレパシーで声をかけたがわからなかったようだった。さゆみんが出て行ったあと、パドがイワタに話しかける。

「今、あの人間、鍵を忘れに行かなかったか？」

「そうですね？確認してきます。」

イワタが扉をそつと少しだけ開けてみた。そして、周りを見渡した後、そつと扉を閉じてパドに言った。

「はい、開いています。人間は上で後片付けをしているようです。」

「おっちょこちょいなやつだ。脱出のチャンスのようにもあるが。」

「罠ということもないでしょうけれど、やはり第3連隊のみなさんが治ってからのの方が良いと思います。」

「そうだな。さつき決めたばかりだな。無理をしても仕方がない。」

第3連隊のドービスが言う。

「いえ、もし本当にチャンスならば我々をおいて行ってください。我々は我々で何とか考えます。」

「わかりました。ただ、外に出ると、棒人間がやって来る可能性がありますので、やはり2体での脱出は無理と考えます。」

イワタが答える。

「そうですね。棒人間が突然現れたときは、体の芯が凍るほど怖かったです。」

「俺も棒人間が迫ってくる光景は勘弁願いたい。そういえば、もうそろそろ、第3連隊のみなさんの傷薬を交換する時間だな。イワタ、交換を手伝ってくれ。」

「はい、分かりました。」

夕方近くになって、PARKではまりがお風呂に入ること提案をした。

「上のお風呂が使えると思うから沸かしてくるわ。一人づつしか入れないけれど。」

りしが答える。

「ありがとう、まり。私も手伝う。」

ことしも答える。

「まりちゃん、ありがとう。少し休憩するかなー。」

「今日はここが一番働いてる。」

「そんなことないよー。」

まりもりとに同意する。

「そうね。ここが一番に入りなさい。」

りしが言う。

「今日は私が一番遊んでいたから、一番最後がいい。片付けをしておく。」

まりが言う。

「みさちゃんとエビふりヤーはどうするかな。」

りしが答える。

「そうね、みさちゃんが入ったほうがいいかな。エビはどうするかな。」

「エビって。じゃあ、聞いてくるね。」

「分かった。じゃあ私がお風呂の準備をしているね。」

「やっぱり、逆にしましょう。みさちゃんとエビふりヤーに聞いてきて。」

「私、信用ないの。」

「そういうわけでもないけど。」

「わかりました、じゃあ聞いてくる。でも、みさちゃんがアメリカ人だとすると、お風呂が泡だらけになるのかな。」

「そうかもね。」

「まあ、いいか。そのときは沸かし治す。」

「そうね。」

「じゃあ、行ってきます。」

りとは机から何かを持ち出して、地下室に向かった。扉の前で呼び鈴を鳴らして、部屋に入りたりとがみさに尋ねる。

「みさちゃん、お風呂沸かすけど入る？」

「お風呂ですな。みんなで入るですな？」

「ごめん、このお風呂そんなに大きくないから、一人か二人づつになる。」

「そうですな。それならば今日はいいですな。まだやることもあるですな。」

「何をやるの？」

「そつ、それは、ゲームですな。エビふりヤーとゲームをしなくてはいけないですな。推理ゲームですな。」

エビふりヤーが答える。

「はっはい。その通りでございます。推理ゲームでございます。みさ様、推理力が優れていて、なかなかかわらないでございます。」

「二人で楽しそうね。」

「はい、とっても楽しいでございます。」

「そうか。エビふりヤーも少しは役に立っていることが分かって良かった。本当は宇宙人だしスクーパーズが来た時に、少しはみさちゃんを守れるかと思っただけど、昨日のさゆみんのことを考えると、それは無理みたい。けど、みさちゃんが地下室でじっとしているのに役立つているので、それで十分。」

「りと様は、失礼な方でございますね。わたくしは本当は強いでございますよ。」

「ごめん、役に立っているという言い方は失礼だった。ちゃんと役割を果たしていると言えばいい？」

「いいえ。絶対にどんな敵からもみさ様を守れるでございます。」

「そう、じゃあ、試してみようか。かかってきていいわよ。」

「変身なしでよろしいでございますか。」

「どうぞ。」

「じゃあ、お言葉に甘えまして。」

エビふりヤーがとびかかるが、すぐにりとに組み抑えられた。

「いやちよつと。」

「いやちよつとじゃない。エビふりヤーはみさちゃんが勝手に外に出て行かないようにしていればいいから。そして、もし何かあったら、昨日、ここがみさちゃんに渡した非常時の呼び出し装置で呼び出して。」

りとにすこし力が入ったのか、エビふりヤーが苦しそうに言う。

「分かりましたでございます。」

りとがエビふりヤーを離れた後、エビふりヤーに謝罪する。

「エビふりヤー、乱暴しちゃって本当にごめんなさい。二人のことが心配で、手荒なことをしちゃったけど、今言ったことを聞いて。なんとなく、みさちゃんが外に行きたがっているように思ったから。」

エビふりヤーが言う。

「分かりましたでございます。それにしても全く動けなくなっていました。今のは何なのでございましょうか。」

「うーん、絞め技の応用かな。おばあちゃんに鍛えられていて。」

「そうでございませうか。おばあちゃんとやはらは、凄い方でございませうな。」

「うん、無事だとは思いますが、やっぱり早く会いたいですな。」

「そうでございませうね。」

みさも感心して言う。

「それにしても、りとちゃんは強いんですね。」

「なんか、おばあちゃんに鍛えられていたからかな。でも、前みたいに可愛いって言ってもらったほうが嬉しいよ。」

「つよ可愛いんですね。」

「つよは余計だけれど、ありがとう。推理ゲームに飽きたらでいいんだけど、ビーズを使って自分でデザインして飾りを作ってみない。」

「みさがですね？きつと無理ですね。」

「そんなことはないよ。いっしょにやってみよう。」

「わかったですね。やってみるですね。」

「その意気。挑戦することが大切。まず、これがビーズというもの。」

「たくさんあるですね。可愛いものがたくさんあるですね。」

「まずは、私と同じ順番に並べてみて。」

りとが1つ1つビーズを取り出して並べる。みさも、りととおなじものを取り出して並べる。

「並べたら、この糸を通して、こんな具合。」

「小さくて難しいですね。でも、なんとかするですね。」

「つぎは、結ぼう。一度、別の糸でやってみようか。」

そう言ってみるとは、何もない糸を結んで見せた。

「じゃあ、もう1回やるから、みさちゃんもやってみて。」

「わかったですね。」

そう言ってみると、りとがもう一度、糸を結び、みさも同じように結んだ。

「さすが、みさちゃん、私より全然器用。」

「そんなことはないですな。」

「じゃあ、次は、ビーズが入ったひもを結ぶよ。」

「はい、ですな。」

2人が、それぞれビーズを通したひもを結んだ。

「上手上手。それを指にはめると、可愛い指輪の出来上がり。」

「わー、可愛いんですな。」

「すごい。さすが、みさちゃん。」

「それは違うですな。りとちゃんの真似をしただけですな。さすがはりとちゃんが正しいですな。」

「ううん、最初は誰でも真似から始めるの。恥ずかしがることじゃない。真似てから、だんだんと自分が表現したいものをはっきりさせていけばいいだけ。じゃあ次はビーズを自分で並べてみよう。長さは、今と同じで。」

「無理ですな。」

「無理じゃないって、どんな指輪にしたいか思い浮かべて。」

「うーん。うーん。」

「そう、そうやって思い悩むことも楽しいよ。」

「楽しいですな？」

「そう。」

「わかったですな。考えるですな。」

少しして、みさがビーズを並べ始めた。

「こんな順番で良いですな？」

「結構、シックでいい感じ。」

「そうですな？」

「うん、とつてもいい。じゃあ、糸を通して。」

みさが糸を通して結んだ。

「じゃあ、指にはめてみよう。どんな感じになるかな。」

みさは無言で指にはめた。それを見たりとが感想を言う。

「すごい。なんか高貴なお姫様の可愛さって感じ。さすがはみさちゃん。」

「そうですな。嬉しいですな。一生の宝にするですな。」

みさが、すこし目に涙を浮かべながら、エビふりやーに言う。

「エビふりやー、みさが作ったですな。」

「素晴らしいでございます。素晴らしいでございます。素晴らしいクリエイティブティーでございます。」

そういう言いながら、エビふりやーも目に涙を浮かべていた。そして、りとに言う。

「りと様、大変ありがとうございますでございます。やはり、りと様は単に強いだけの人間ではないでございますね。」

「だから強いは余計だって。」

「エビふりヤーも、りと様とずうっと一緒にいたくなりました。」

「そう、ほんと。じゃあ、スクーパーが去ったらPARKで働きなよ。うちの店長なら絶対に雇ってくれるよ。宇宙人がいたら客寄せになるし。」

「そうでございますね。考えてみるでございます。」

「わかった。店長に紹介するなら、まりからの方が確実だから、そのときは言って。まりをお願いする。」

「有難うでございます。」

話す順番を待ちかねていた、みさがエビふりヤーに言う。

「エビふりヤーの話はみさの後でいいですな。」

「大変失礼したでございます。エビふりヤーはみさ様のクリエイティブティーに感動して、取り乱してしまっただでございます。」

りとが2人の様子を見て言う。

「2人ともオーバー。」

すると二人が同時に返事をした。

「そんなことはないですな。」「そんなことはございません。」

りとが少し呆れて、少し微笑んで言う。

「そう、ありがとう。もうそろそろお風呂の時間だから上に上がるけど、みさちゃん、次はブレスレットとか作るといいよ。作り方は同じ、長さはこんなものかな。あと、基本は大きめのビーズを使う。でも、小さいもので何本も腕にすることもできる。今ここにはないけれど、みさちゃんなら、すごい大きなビーズのブレスレットというものもありかな。」

りとは、大体の長さを紙で示しながら言う。

「そうですな。奥が深いですな。ブレスレットも作ってみるですな。」

「みさちゃんのビーズのブレスレット楽しみ。それに、ネックレスもできるし、かばんや携帯の飾りもできる。」

「楽しそうですな。いろいろやってみたいですな。」

「うん。そして、素材を加工できるようになるともっと広がる。そうすれば、ネットで売るところもできるよ。」

「すごいですな。」

「それはまだ先として、できるところからやってみよう。じゃあ、また夕食のときに来るね。」

あと、ことが作ったその緊急連絡装置を絶対に離したらだめだよ。なんかあったら、すぐに駆け付けるから。」

「分かったですな。」「分かりましたでございませぬ。」

りとが出て行つてから、エビふりヤーがみさに話す。

「指輪、本当に驚いたでございませぬ。」

「みさが、一生懸命考えたですな。」

「そうでございませぬか。そうでございませぬね。」

「また、作つてみるですな。アイディアを考えるのは楽しかったですな。」

「はい、エビふりヤーも全力で応援するでございませぬ。」

「『全力』という言葉で思い出したですな。りとちゃんに押しえられたとき、本当に動けなかつたですな?」

「全力を込めたのですが、全然動けなかつたでございませぬ。」

「大した全力ではないですな。もう歳ですな?」

「そんなことはないとは思つてございませぬが、さゆみん様といい、りと様といい、少し自信をなくしたでございませぬ。」

「まあ、お前のことはいいとしてですな。」

「いいでございませぬか?」

「今は全然いいですな。それより、りとちゃんに外出を怪しまれたですな。最初にやることがあるといつたのがいけなかつたですな。」

「そうでございませぬね。あれはうかつでございませぬ。」

「うるさいですな。」

「はっ、申し訳ございませぬ。」

「まあ、エビふりヤーのいう通りですな。でも、捕虜に口止めはしないといけないですな。仕方がないので、一人で行くですな。エビふりヤーは何かあったら、うまくごまかすですな。」

「一人でいらつしやつては危ないでございませぬ。」

「ここにはりとちゃんたちと、スクーパーズしかいないから大丈夫ですな。」

「そうでございませぬか。やつぱり、エビふりヤーめがついて行つた方がよろしいと思つてございませぬ。」

「大丈夫ですな。部屋に誰か一人はいる必要があるですな。みさはもう寝たと言つてごまかすですな。もう少ししたら出発するですな。」

「姫様がそれほど言われるのでしたら、わかりましたでございませぬ。わたくしめは部屋で待つているでございませぬ。」

りととは、さつき描いた壁の絵を見てきてからPARKへ戻つた。お風呂上がりのことがソファに座つていた。

「りとちゃん、お帰り、どうだった。」

「2人とも今日はお風呂いいつて。推理ゲームに熱中していたみたい。」

「へー、楽しそう。」

「うん、楽しそうだったよ。頼りにならないけど、みさちゃんはエビふりヤーに任せておけそう。」

「あの地下室は、スクーパーズのビームが何発当たっても大丈夫。」

「そうだよ。だから、エビふりヤーには、みさちゃんを外に出さないように言っておいた。」

「それじゃー、安心だね。」

「うーん、エビふりヤー、いい宇宙人だけど、少し間が抜けているところがあるからやっぱり心配。」

「そうかー。でも、連絡装置もあるから大丈夫だよ。」

「そうね。有難う、ここ。助かる。」

「えへへ。」

「ところで、まりは。」

「お風呂から上がって、すぐに奥の方へいっちゃったよ。」

「そうありがとう。」

りとが奥へまりを見に行き、声をかける。

「どうした。何かあった。」

まりは、

「何でもない。大丈夫よ。」

と答えたが顔は暗かった。とりあえず、りともお風呂に入ることにしたが、それでまりが落ち込んでいる理由がすぐにわかった。上着を脱いで、鏡を見た瞬間、息を飲み込んだ。

「はふっ。」

声にならない声が出た。体のあちこちにあざのようなものができていて、その周りが少しピンク色になっていた。ピンク色と言っても、打ち身などで腫れたときのピンク色とは違って、スクーパーズのようなピンク色である。りとは上着を着て、ことことまりを呼んだ。

「ここ、まり、ちょっと来て。」

ことことまりがやってきた。体のあざを見せたりとを見て、まりが言う。

「りともなんだ。私もそんな感じ。なんだろう、スクーパーズの祟りかな。」

まりは少し安心したようだった。ことごとがりとに言う。

「分析してみるからちょっと待ってて。ソファーに座ってて。」

「ここが分析装置を持ってきてりとの体を分析する。」

「うーん、あざみたいなどころから、スクーパーズのバリヤーが出ているみたい。」

「そうなんだ。アマツマラのせいかな。」

「アマツマラがスクーパーズの死んだ情報を吸収して、それを抽象化した情報の一部がもれ出てきているみたい。」

「そうか、スクーパーズと戦っていると、私たちはスクーパーズになっちゃうということ。」

「そうかも知れない。でも、変身と同じでまだ定着していることはないから、アマツマラを壊せば元に戻ると思うよ。でも、時間が経つと定着するかなー。」

「そうなんだ。さすがことこ。ありがとう。でも、まだアマツマラを壊すわけにはいかない。ところで、ことこは大丈夫なの。」

「うん、私はあまりスクーパーズが死ぬところの近くにいなかったから、アマツマラがスクーパーズの情報を吸収していないみたい。」

「そう、良かった。」

りとはまりの方を向いて言う。

「まりはアマツマラを壊していいよ。それで、みさちゃんと地下室に避難していて。明日は、私が戦車で出て戦う。ことこはPARKで情報支援をお願い。」

「何を言っているの、りと。明日、3人でスクーパーズを地球から追い出しましょう。追い出したら、アマツマラを壊しましょう。」

ことこも賛成する。

「そうだよ、それがいいよ。戦車の設計もだいたい終わったよ。明日の朝には間に合うよ。それだけじゃないよ。まりちゃんのリア銃も改良する。反応炉のエネルギー生成速度は変えられないけれど、いろんなモードを追加して、充填時間はかかるけどビーム弾一発のエネルギーを増やしたりできるようにするよ。それで、大きな宇宙船の撃破は無理でも追いかえすことぐらいはできるよー。」

「ことこの言う通りだわ。戦車でラフォーレを奪還して、原宿からスクーパーズを追い出して、戦艦ごとスクーパーズを地球から追い出す。それで元通りだわ。」

「2人とも大丈夫？」

まりとことこが答える。

「大丈夫！」

「大丈夫だよ！それにりとちゃんとまりちゃんからは、強力なバリアーが出ているから、普通のスクーパーズのビームぐらいじゃそんな簡単にやられないよ。」

まりが答える。

「私からもバリアーか。いいわ明日はりとと一緒に戦う。ボードにもだいぶ慣れてきたから。ことこは、りとと言う通り後方から支援をお願い。」

りとも同意する。

「本当にそう。後方支援をお願い。」

「わかったー。できるだけ安全なところから2人を支援するー。あと、まりちゃん、この新しいリア銃のマニュアルを読んでおいてね。」

「うへっ、何、この分厚いの。」

「モードやその細分のポジションがいろいろあるから。」

「まあ、またね。とりあえずは、今ので十分だわ。」

「そうかー。じゃあ、今までの散弾はモードエイトポジションセブン。強力なビームはモードナインポジションワンで大丈夫だよ。宇宙船と戦うときに新しいモードを言うね。」

「それは、その時でいいわよ。今は、モードエイトポジションセブンとモードいくつだっけ。」

「モードナインポジションワン」

「そうそう、モードナインポジションワン。それで、りとの方は？」

「りとちゃんの方は、サイコレセプタをりとちゃんの精神と直結させて、反応速度を向上させる。それでボードもタンクももつと俊敏に動かせるようになる。ルナ銃の威力は前も言った通りりとちゃんの精神力次第。それも明日までには仕上げるよ。」

「ありがとう、ボードやルナ銃の反応が遅いって思っていた。」

「うん、それはキャットストリート上空での戦闘データからわかってたよー。」

「さすが、ここ。自分でもいろいろやってみただけ、あまりうまく行っていなかった。そうか、サイコレセプタを直結させればいいのか。」

「でも、ボードや棒に受けた衝撃が、直接精神に伝わるから気を付けてね。」

「分かった。」

「その代わり、最終的にはりとちゃんの認識と同時に動くようになるから。」

「ありがとう、ここ。うん、遠距離攻撃はまりに任せて、私は接近戦に徹する。あと、万が一のために胸ポケットのペンを強化した。」

「ペンは剣よりも強しね。」

「残念だけれど、そう。でも、どこにでも描けるペンとしても使えるよ。」

「さすが、りとね。でも、スクーパーズがいる間は、絵にかくことに夢中になっちゃだめよ。」

「わかってるって。」

りととまりは、そう言った後笑いあった。ことが二人に休むように言う。

「じゃあ、2人は明日大変だから今は休んでいて。戦車の設計仕上げちゃう。」

「ありがとう。みんな、明日で決めるよ。」

「了解。」「了解ー。」

りとは明日のため少しでも体を休めるために、今日はもう絵を描くのをやめて、ソファで静かに横になることにした。横になると、学校やPARKでの出来事、スクーパーズが来てからのことが頭に浮かんだ。

「スクーパーズが来て、まりとことことは、もっと仲良くなれた。本当に戦友になっちゃったし。さゆみんのことものいろいろ分かった。スクーパーズにもやさしくできるなんて、心の底か

らやさしい人なんだろうな。私は、みんなに強い強いと言われて・・・。私は、例えるとなんになるんだろう。」

こんな感じで思いにふけてしばらくしたとき、急に警報がなった。りとは飛び起きて、モノアイディスプレイを見る。

「みさちゃんの周りにスクーパーズ。さゆみんの店の前。行かなきゃ。」

まりとこともディスプレイを見て状況を理解していた。りとは外に走り出しながら、前を向いたまま2人に、

「行ってくる。」

とだけ告げて、さゆみんの店の方に全速力で飛んで行った。

その少し前、みさがエビふりヤーに指示をしていた。

「それでは行ってくるですな。何かあったら、うまくごまかすですな。」

エビふりヤーはあまり気乗りはしていなかったが、捕虜を処分しろと言われるよりは、ずうっとまじだったため、了解することにした。

「姫様、行ってらっしゃいませ。ここで、万が一のために鍛えてきた力を披露しましょう。」
そういうと、一度、スクーパーズの姿に戻ってから、みさの姿に擬態し直した。

「どうです、みさ様そっくりでございますしょう。」

「すごいですな。さすがスクーパーズ最強の戦士ですな。でも、中身がエビふりヤーと思うと、気持ち悪いですな。」

「姫様は、遠慮がないでございます。でも、これで安心でございますしょう。」

「話し方がエビふりヤーですな。気を付けるですな。」

「そうでございますね。いえ、そうでございますですな。」

「声をもう少し高くするですな。」

「わかりましたですな。こんな感じでどうですな。」

「なかなかですな。少し風邪をひいたと言えごまかせるですな。」

「姫様、ありがとうございます。」

「だから、話し方に気をつけますな。」

「わかったですな。ありがとうございます。」

「まあ、いいですな。あまりしゃべらないようにするですな。では、行ってくるですな。」
そういうと、こっそりとさゆみんの店の方に向かって歩いて行った。

さゆみんの店に着くと、テレパシーで中のスクーパーズに話しかける。

「皆、大丈夫ですな？スクーパーズの丸野王の長女みさですな。これから言うことをよく聞くですな。そうすれば、皆は無事にスクーパーズの本星に帰れるですな。」

さゆみんの店の中では、大騒ぎになり数体が叫ぶ。

「みさ女王様!？」

みさがそれに答える。

「そうですね。これから言うことをよく聞くですな。皆の世話をしている人間のさゆみんはとつてもいい人間ですな。だから、」

みさが話している途中に、パドが捕虜たちに言う。

「確認する必要がある。本当にみさ様ならば、どんな状況でもお守りしなくては。」

そう言うと、鍵をかけ忘れた扉を開けて店の前に出た。さゆみんは、買い物に出て店にはいないようだった。表に出ると確かにみさ王女がいた。

「みさ王女様、大丈夫でいらっしゃいますか。私は、第8連隊所属のパド上等兵です。怪我をしています。みさ様をお守りします。」

「パド上等兵、有難うですな。でも、出てきちゃだめですな。りとちゃんが来ちゃうですな。」

「りとちゃんと言いますと。」

「とても強い人間ですな。皆の命が危ないですな。だから早く部屋に戻るですな。」

「そんな危ない人間がいるところに、みさ様を置いていくわけにはいきません。我々の命より、みさ様の命の方が優先です。私たちが盾になりますから早くお逃げ下さい。明治通りまで行けば、第8連隊が全力で救出にあたると思います。」

「無理ですな。エビふりヤーでさえ、りとちゃんには全く敵わないですな。でも、私たちには危害を加えないんですな。だから、早く部屋に戻るですな。」

「やっぱり、そんなに強いのですか。だから、エビふりヤー様も従っているわけですか。」

ドービスが叫ぶ。

「10時方向、上方45度に棒人間。高速接近中。」

パドがイワタに言う。

「くそつ、早速来やがった。イワタ、俺が王女様を運ぶ。お前はビームで援護を頼む。」

「わ、わかりました。」

ドービスが言う。

「パド上等兵、私たちがおとりになる。王女様をお願いする。」

「すまん。」

「王女様が見えなくなったら、どこかに隠れるので、心配は無用です。」

それが無理なことは分かっていたが、パドは自分の役割を果たすことにした。パドがみさに今まで見たことがないような真剣な顔を向ける。

「時間がありません。みさ様、失礼します。」

そう言うと、パドはみさを上に乗せて、イワタを連れて明治通りと思う方に全力で向かった。ドービスが叫ぶ。

「頼んだぞ。」

フアージル、ガリル、ズジルが叫ぶ。

「イワタ、行けー。」

ドービスが指示をする。

「分かれて、ビームを出す体勢を取る。」

フアージルが尋ねる。

「ビームは出ませんが。」

「それでいい、相手をひきつけられればいい。」

後ろを振り向いていたみさがテレパシーで叫ぶ。

「やめるですな。みんな死んじゃうですな。」

それを聞いた捕虜のスクーパーズたちは、みさ王女は優しい方と思いながら、最後の覚悟を決めていた。

りとは上空からすぐに、さゆみんの店の前で捕虜になっていたスクーパーズがみさをさらっていくのを見つけた。

「やっぱり、スクーパーズの狙いはみさちゃん。」

手前の4体のスクーパーズが地上から、こちらにビームを発射しようとするのを見つけた。みさを助けるために、上空に退避するわけにはいかなないので、急降下してかわそうとした。

それを見たドービスが命令する。

「今だ、ボードに取り付け。」

4体のスクーパーズが高速に転がりながらりと迫ってきた。りとは向こうからやって来てくるとは好都合と思いつながら、棒を構えた。4体のスクーパーズが精いっぱいジャンプしてボードに取りつこうとする。

「このー。」

りとは、みさと反対側から来る一体はルナ銃で仕留め、1体は棒で突き刺し、その2体が消えて行った。しかし、ズジルがボードの前部に、ドービスが後部に取りついた。ドービスが2体の悲鳴を聴きながら叫ぶ。

「フアージル、ガリル。」

そして、ズジルに命じる。

「ボードから振り落とされるな。」

2体にボードに取りつかれたりとは、棒を使うとボードに損傷を与える可能性があるため、まづ前のスクーパーズを蹴落とそうと蹴り上げたが、吸いついたように動かなかつた。しかし、数回蹴ったところで消えて行った。次に、後ろのスクーパーズを蹴ろうとしたとき、ボードが推力を失って地面に落ちてしまい、りともボードから振り落とされ、地面に転がった。見るとボードのエンジンの周りに焦げたスクーパーズがへばりついていて、しかし、そのスクーパー

ズもすぐに消えてしまった。ボードのところに戻って、ボードで飛ばうとしたが、エンジンが故障して飛べなかった。ボードを作り直すには、一度全ての変身を解除しなくてはいけない。スクーパーズを見失いたくないため、りとはボードを置いて、全力で走ってみさたちを追った。変身したまま走るとは初めてだったが、体は軽く高速で走ることができた。そのため、すぐにみさたちが見えてきた。りとは心に誓っていた。

「絶対誰も見捨てない。」

イワタが後ろから走って追って来るりを見つけて、パドに報告する。

「棒人間、地上を追ってきます。」

パドが少し悲しそうに、でも褒めたたえるように言う。

「第3連隊の連中、ボードを奪うのに成功したのか。頑張ったな。」

イワタが言う。

「次は僕の番です。パドさん先に行ってください。」

「頼む。」

イワタはそう言うのと、ビル陰、高さ7メートルぐらいのところ隠れて、りを待ち伏せた。

「父さん、みさ王女様のため、棒人間を足止めしてみせます。力を貸して下さい。」

りが過ぎ去ったとき、りとの斜め後ろへビームを発射する。りとはジャンプしてかわす。そして、前に走ったまま、ルナ銃をイワタの方へ向ける。イワタは冷静だった。銃の向く方向が良く見えた。そして、銃の動きを見ながらそれに直角の方向へ動き、弾を避けようとした。銃身の向きが自分の少し右側の上の方向だった。

「かわせる。」

イワタはそう思った。しかし、銃身から出てきたのは散弾だった。イワタは、体が穴だらけになった。

「散弾を撃てるなんて聞いてない。」

そう言って、消滅してしまった。

走り続けたりとは、パドに迫ってきた。

「イワタのやつ、時間稼ぎもできないか。あっちに行ったら、また鍛えてやらなきゃ。」

パドは決心を固めていた。りとはパドを追い越して止まり、パドの前で手を広げ叫ぶ。

「スクーパーズ、止まりなさい。」

みさも、パドにテレパシーで命じる。

「止まるですな。そうしないとパドが死んじゃうですな。ここは、みさがなんとかするですな。任せてほしいですな。」

パドは、みさを下すとみさに言う。

「みさ様、明治通りまでもうすぐです。このまま、走ってお逃げ下さい。」

そして、

「王女様を乗せて飛んだんだ。ゼクルのやつめ、羨ましがるだろうな。」

と思いつながら、みさをゆっくりと地面に下した。そして、そのまま、りとに向かって右側に回り込みながら突撃して行った。りとは、みさがそばにいて跳弾が当たる可能性があるため、ルナ銃を使うことができなかった。棒を構えると、パドはりとの直前で曲がって後ろに回り込むようになった。それを追って横向くと、パドが突撃してきた方向から石がたくさん飛んできた。パドが弱いながらもスクープビームで石を連れてきたのである。大きな石を棒で払うと。パドが全力で体当たりして、りとを建物の方に押しやった。そして、みさに叫ぶ。

「今のうちです。走ってお逃げください。私が棒人間を抑えています。」

しかし、みさは動けないようだった。

「イワタに王女様を乗せて、俺が時間をかせぐべきだった。」

パドは、そう思ったが遅かった。それでも時間を稼ぐために、パドは土や砂をスクープビームで思いっきり引っ張ってきて、りとが周りを見えないようにした。そして、立ち上がるとうするりとの足を狙って体当たりした。再度、りとは地面に手をついた。

「みさちゃん、大丈夫？」

りともそう叫んだ。返事はなかったが、先に体当たりしてくるスクープパーズを片づけることにした。突撃してくるパドを地面に座ったまま、少し横になって壁の方に蹴った。そして、少し息を切らしながら、動けなくなったパドの方に走り寄った。

「よくもみさちゃんを。とどめよ、消えて。」

そう言いながらパドを棒で刺した。パドはすぐに消えてしまった。みさはパドの最後のテレパシー通信

「みさ様、どうぞご無事で。」

を聞いて涙と震えが止まらなかった。昨日、エビふりヤーに捕虜たちを始末してこいと命じた自分が限りなく邪悪な存在に思えてきた。

土煙が晴れると、りとはみさが無事なことが確認できた。りとはすごく怖い顔をしていたが、みさちゃんを見つけて和らいだ。みさは知人が死んだ時のようなすごく悲しい顔をして、涙を流し震えながら黙っていた。

「みさちゃん、大丈夫？」

「だ、大丈夫ですな。」

「来るのが遅くてごめんさい。怖かったですでしょう。でもみさちゃん、これに懲りたら、もう一人で出ちゃだめ。エビふりヤーは寝てたの？相変わらず役に立たないやつ。」

「ごめんさいですな。」

「ううん、気を付けていればそれでいいって。私はどんなことがあってもみさちゃんを見捨てないから。」

「見捨てないですか？」

「うん、絶対に。悪いスクーパーズはみんなやつつけてあげる。」

みさは、

「一番悪いスクーパーズは、私ですな。」

と言いたかった。

「父上、本当に本当にこれで良いですか？これがみんなのためなんですな。みさにはもう分からないですな。」

心の中でそう問いかげながら、

「有難うですな。」

とだけ答えた。

その時、さゆみんが走りながらやってきた。

「りとちゃん、何をやってるの！捕虜のスクーパーズさんたちを殺したの？」

「だって、みさちゃんを襲ったんだよ。」

さゆみんがみさを見ながら言う。

「そんなはずは・・・」

「そんなはずは、じゃないよ。さゆみんが余計なことをするから。」

「余計なことって。怪我をしているスクーパーズさんたちを見捨ろって言うの。」

「でも、助けると襲ってくるんだよ。殺すしかないじゃない。」

「殺すしかって。スクーパーズさんだって生きてるし、感情もあるのよ。」

「私には、みさちゃんや、みんなの方が絶対に大切。」

「そうだけど。」

りとも涙がこぼれてきた。そして腕をまくって、また濃くなったあぎを見せながら悲しそうに叫ぶ。

「私だってスクーパーズを殺したくはない。スクーパーズを殺すと、私がスクーパーズになっちゃうかもしれないの。」

「ど、どうして？」

「殺したスクーパーズの情報がアマツマラに集められ、それが持っている人の体を変化させるんだって。ことが。」

この一言で、さゆみんには少し事情が分かった気がした。それで、みさを少し怖い顔で見て、何かを言おうと思ったが、みさも本当に泣いているのを見て何も言えなくなった。りとも泣き始めていたが、さゆみんとみさに言う。

「大丈夫。たとえスクーパーズになったとしても、みんなを守るから。絶対に見捨てたりしないから。」

「りとちゃん。」

泣いている2人を見て、さゆみんが、

「りとちゃん、ここから逃げない？私も手伝うよ。だって、私は、私は・・・」
と途中まで言いかけたが、りとは途中でそれを遮った。

「心配してくれてありがとう、さゆみん。すこし元気が出た。大丈夫、明日で決める。ここが戦車の設計図を作ってる。それで、明日スクーパーズを地球から追い出すから。安心して。」

「そう。明日で。」

りとがさゆみんが手に持っていたものを見て尋ねる。

「もしかして、それは夕ご飯の材料？」

「そうよ。今日はチンジャオロース。下ごしらえしたら、持っていくね。」

「ありがとう、楽しみ。さゆみんの料理、美味しいから。」

「クレープには入れないよ。普通に、ご飯と中華スープと中華サラダと。」

「それ、絶対に美味しそう。」

「ほんと？メニューを喜んでもらえてうれしい。」

「さゆみん、じゃあ、戻ろうか。一応、安全のため店まで送ってく。」

「大丈夫だけれど、わかったわ、みんなで帰りましょう。」

そして、まだ、少し泣いているみさの手を持って言う。

「じゃあ、みさちゃん、さゆみんのお店経由で、PARKに帰ろう。」

「わかったですな。」

さゆみんの方を向いて尋ねる。

「さゆみん、手をつないでいいですか？それとも、手をつなぐのも彼氏さん限定？」

「えっ、別にいいけれど。」

そういうと、3人は手をつないで、さゆみんのお店の方に向かった。さゆみんが、りと言
う。

「りとちゃん、普通、私が真ん中じゃない。大きいんだから。」

「いいの。私が二人と手をつないでいたい。」

「そっか。わかった。」

りとは、もう明日の決戦のことを考えながら、さゆみんのお店に向けて落ち着いて歩いて行く
ことができた。